

ラブライブ！！サンシャイン！～文学少女の恋煩い～

花陽ラブ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

静岡県沼津市

東京ほど何もない所だが、東京には無い良い所はある

そんな、田舎寄りな穏やかな場所に

住む、この物語の主人公

木田正斗（15）

国木田花丸（15）

この2人の

ちよつとした恋の物語

目次

第1部

野球少年と文学少女	1
幼馴染み	5
相談相手は堕天使	8
赤髪ツインテールちゃんの服	12
文学少女は気付かない	16
赤髪ツインテールのトラウマ（前編）	20
赤髪ツインテールのトラウマ（後編）	24
堕天使のドツキリ	28
文学少女と花火	33
堕天使な不幸な1日	38
赤髪ツインテールちゃんのヤキモチ	42
文学少女、海に行く	46
赤髪ツインテールちゃんは悩む	50
堕天使は知っている	53
文学少女、家出する	57
堕天使のネット配信	61
赤髪ツインテールちゃんは頑張る	65
文学少女、誕生日を祝う	69
赤髪ツインテールちゃんの想い（前半）	72
赤髪ツインテールちゃんの想い（後半）	76
堕天使とりりー	80
文学少女のいらいら	83
堕天使、犬を拾う	86

赤髪ツインテールちゃんと約束

89

文学少女と廃校

93

赤髪ツインテールとSaint Snow

97

赤髪ツインテールちゃんの決意

101

Awaken the power (前編)

104

Awaken the power (後編)

108

堕天使の正月

112

文学少女のバレンタイン

116

堕天使の昔話

120

赤髪ツインテールちゃん、家出する

124

文学少女、合併先の学校

128

堕天使は善い子

131

赤髪ツインテールとお姉ちゃん

134

第2部

文学少女、新しい学校に行く

137

赤髪ツインテールと新しいAqours

141

谷崎百瀬

144

涙の理由

148

優しいクラスメイト

152

公表

155

蘇るトラウマ

159

百瀬の想い

163

理亜の気持ち

166

告白

169

約束の甲子園

173

文学少女、恋に気付く

百瀬の過去

野球少年と文学少女、恋の結末

176

181

187

第1部

野球少年と文学少女

5月：

新しい生活から1ヶ月過ぎた

俺、木田正斗は4月から高校生になり

沼津市の共学に入学し、昔から大好きだった野球部に入った
今は試合には出れないが試合に出れる選手になって

たくさん試合に出て活躍してやる

そして：俺には約束した事がある

幼馴染みとの交わした約束を

「おい、あの子」

「ああ、すげー可愛いな」

ん？なんだか、周りがざわざわしている

先輩達も何かを話している

俺もみんなが見ている方向を向き

そこに居る人物に驚いた

「あつ！居たぞら」

「正斗くーん！」

あ、あれは：茶髪に近い色の髪の色

小さい身長、そしてその小さい身長に似合わない大きな山

今の静岡県にはなかなか居ない独特な方言

間違いない、俺の幼馴染み

国木田花丸ちゃんだ

「正斗？うちの新入部員に居たよな…」

「ああ、木田正斗の事だろーな」

俺に気付いたマルちゃんは嬉しそうに手を振っている

それは嬉しい

しかし、俺にはわかる俺に集まっている先輩や同級生の視線が「きーだーくーん？」

「ちよつと、君にお話があります…」

後ろから同級生の複数から捕まって

俺は野球部の部室に連れて行かれていく

まさか、自分のせいとは思ってはいない

幼馴染みの無垢な笑みに俺はちよつと救われた

「うう……酷い目にあつた」

あれから数時間に渡り

マルちゃんについてめちやくちや聞かれた

あれは彼女なのかとか、俺に紹介しろとか

冗談じゃない、マルちゃんは俺の大切な人だ

誰にも渡すかよ

と言つても俺の一方的な片思いだけど

しかし、なんでマルちゃんがうちの学校を見に来たんだ

電車に乗ったのか、あのマルちゃんが？

「あつ、遅かつたね…待ちくたびれたすら」

「遅いわよ」

「こ、こんばんは…き、木田くん」

学校の校門を出てすぐの所によく知っている

3人が居た

「ああー、なるほど善子…お前が連れてきたのか」

今さっきの疑問が解消された

3人のうち、真ん中に居る

黒髪にお団子を作っている女の子

津島善子、自称、墮天使ヨハネと語っている

いわれる、厨二病にかかっている

「ヨハネよ!!善子言うな」

「そーよ、あんたが頑張っている姿を見たいからって2人が言うから

連れてきたのよ」

「そーなんだ、わざわざありがとねルビィちゃん」

「っ!?!ぴ…ぴぎい」

この、すぐに俺から離れた

赤髪のツインテール少女は黒澤ルビィちゃん

沼津では有名な名家、黒澤家の次女

男性恐怖症で俺もなんとか話してくれるレベル

「ダメずらよ、ルビィちゃんを怖がらせたら…」

「うう…難しいな」

「ってまたのっぽパン食べてるし」

マルちゃんを見たら、大好きな沼津市名物のっぽパンを食べている

彼女はこれが大好きでいっつも食べている

「あんまり食べ過ぎないようにしろよ」

「マルちゃんはスクールアイドルなんだから」

「うっ…わかってるずら」

スクールアイドル、5年前からブームになっている学生のアイドル

内浦にスクールアイドルが出てきた、沼津にも噂が流れていた

その噂のスクールアイドルのメンバーのうちの1人がマルちゃん達だ

内浦は俺やマルちゃんたちが育った

小さな所、今の子供達はみんな顔なじみで友達だ

最近、マルちゃんたちが通っている

浦の星女学院に東京からの転校生が来たりと話題になっている今年は忙しそうになりそうだな

「じゃあ、帰ろうか…マルちゃん、ルビィちゃん」

「うんー」

「ほ、ほこ」

これは俺、木田正斗と
マルちゃんこと、国木田花丸の
小さな町の小さな恋の物語

幼馴染み

「おーきーるーずーらー!!」

「うう…それで毎回起こすのやめて、マルちゃん」

時刻は朝の五時、一般的に起きるには早い時間帯

俺、木田正斗は沼津市の高校に通っている

うえに野球部に所属している、朝練には出たいので朝早くに起きて
いる

ここは俺の部屋だ、なんでそんな部屋にエプロン姿の国木田花丸
ちゃんことマルちゃんが居るのかと言うと

マルちゃんの家と俺の家は少し離れてはいるが近くにある

それにマルちゃんの家はお寺さん、早起きには慣れているので

俺からお願いをしている

しかし、今どきフライパンをおたまで鳴らして起こす奴がどこに居
るんだ

「何を言ってるぞ、正斗君は」

「これじゃないと起きないからやってるんだよ」

「た、確かに……」

なかなか起きない俺も悪いよなど少し反省をした

朝から可愛い幼馴染みがエプロン姿で起こしにくる

これはなかなか凄い事なのではないかと自分で思う

「むっ…なんでそんなにオラの事を見てるぞらか」

俺の視線に気づいたのか、マルちゃんは両手で自分の身体を隠すよ
うにし

目を細めて俺を見ている

「い、いやいや…違うから!そんな意味で見てないから」

「冗談すら、早くしないとご飯が冷めちゃうよ?」

舌を少し出してイタズラが成功したかのような笑顔で

言っただけ

俺の部屋の扉を締めて、階段を降りる音が聞こえる

俺もゆつくりと起き上がり、下に向かう事にした

〜数年前〜

俺とマルちゃんの出会いは

両親同士が知り合いで、昔からマルちゃんのお寺にお世話になっていたように

必然的に俺とマルちゃんは幼馴染みになる訳だ

幼稚園から小学生までは一緒だったけど

中学から俺が野球をやりたいって理由で沼津市の学校に行く事になった

それでも毎日のように顔を合わせていたし

会いに来てくれた

試合がある日には必ず来てくれた

優しい優しい、自慢の幼馴染みの女の子だ

それでもやつぱりケンカとかしたりする

あれ以来してはないけど…

俺とマルちゃんの2人だけの秘密の約束

「正斗君……」

「……………」

中学、2年生の時に

先輩達の最後の試合、俺の判断ミスで試合に負けてしまった

あの時の俺は酷かった、マルちゃんは何も悪くないのに

酷くマルちゃんに当たってしまった

今でも後悔している

「も、もう帰ろう？みんな帰っちゃったぞら」

「うるさいな!!お前には関係ないだろー!あっちいけよ!!!」

「……………」

「関係あるぞら…オラは正斗君をずっと見てた、正斗君が頑張ってた事も正斗君が苦しかった事もみんな知ってるぞら…今日の試合だって、正斗君は悪くないよ」

ゆつくりと俺の顔を両手で包み

目を合わせるようにした

その目には涙を流し、真剣な表情だった

「負けた事は悔しいけど、来年は勝とうよ…正斗君なら勝てるよ」

「オラにカッコイイ正斗君見せてほしいぞら」

「…………ごめん、マルちゃん」

「俺、どうかしてみたいだ…マルちゃんを泣かすのはこれで最後にする！次に泣かす時は嬉し涙を流させてやる！！俺は君を甲子園に連れて行く！」

俺は絶対にこの子を泣かせない

俺はこの子の為に勝とう、勝って

高校生になっても勝ち続けて、甲子園に連れて行く

そして…告白しよう

「ありがと…それじゃあ、オラもしっかりサポートするぞら」

嬉しそうに笑う彼女

やっぱり、マルちゃんには笑顔が1番似合うよな…

「この事は2人だけの秘密にしよう」

「2人だけの…約束」

「嘘付いたら、閻魔様に舌を抜いてもらうぞら」

マルちゃんが言うマジでそうなりそうで怖いな…

俺達は指切りをした、2人だけの約束を

〜現在〜

「気を付けて行くぞら」

「うん…マルちゃんもスクールアイドル頑張ってね」

今でもその約束は

守っています

相談相手は墮天使

俺、木田正斗は

幼馴染みの国木田花丸ちゃんが好きだ

しかし、当の相手は全く気づいてはくれない

片想いをして数年になる

そんな俺が何をいるかというと

時間は午後五時、夕焼けが優しく街を包んでいる時間帯

俺は沼津のある公園で待ち人を待っている

「来たわよ…」

「おう、ありがと」

津島善子…

俺とマルちゃんが幼稚園の時に一緒に遊んでいたが

小学校は違う所に行ってしまい

それ以来会ってなかったのだが

〜1ヶ月前〜

高校生になってからしばらくして経ったある日

「マルちゃん…どこに連れて行くつもり？」

「まだ言えないすら…きつと正斗君びっくりするよ？」

マルちゃんが急に高校のクラスメイトにプリント渡さないとダメ

だからと沼津まで来ている

高校のクラスメイトって俺は全く関係ないよな

なんで俺なんだろうー

「着いたすら」

「へえー、マンシヨンに住んでるんだな」

「じゃあ、俺近くに居るからマルちゃんは行ってきてよ」

「ダメすら！正斗君が来ないと意味がないすら!!」

マンシヨンの入口で別れようとしたら

俺の腕を両手で掴み行かせないようにするマルちゃん

お、俺が来ないと意味がない？

なんでだ…

「わ、わかった…行くから」

「うん！じゃあ行くぞら」

マルちゃんは嬉しそうにもしながら

マンションの中に入り、ぎごちなさそうにその人が住んでいる部屋の番号を押す

「あつ、津島さんと同じクラスの国木田です」

出た声の主は恐らく母親だろう

へえー津島さんって言うのか

そーいや、昔

幼稚園の頃に善子ちゃんって子が居たな

あの子も津島だったよな…元気にしてるかな

ロツクが空いて

幼稚園の頃のことを思い出しながら

その津島さんの部屋まで行く

「着いたぞらー！」

部屋の前に着いて

インターホンを鳴らす、中から若い女の子の声が聞こえ

そつと、扉が開いて

「また来たのね、ずら丸…言っておくけどまだ行かないからね!!」

「……あつ」

マルちゃんに向かって話す女の子

その子の顔を見て、さつきまで思い出していた

女の子が出てきた

「善子ちゃん…?」

「へっ?…あ、あんた」

「正斗!?!」

女の子に対して、名前を確かめたら

女の子がゆっくりと俺の顔を見た

そしたら、びっくりした顔をしていた

これが幼稚園以来とある、津島善子との再会だった
〜現在〜

今では、連絡も取り合って
時々こうやって会っている

公園のベンチに2人で座り、話す

「ずら丸なら大丈夫よ…あんたが考えてる状況にはまだなっていないわよ」

「そ、そうか…」

「さつきと付き合ってくれって言えればいいのに…正斗から言えば、ずら丸なんてイチコロよ？」

こうやって、スクールアイドル活動で何か

悪い虫につかれてないかとゆう報告と恋愛相談に乗ってもらっている

善子いわく幼稚園の時から俺がマルちゃんが好きだと気付いていたらしく

まだ付き合っていない事にびっくりしたらしい

仕方ないから相談に乗ってやると言われた

なんだかんだで優しいのが俺は好きだな

「そんな簡単に言えたら、苦労はしねえーよ」

「それに…マルちゃんは全く俺に興味無さそうだし」

「ふう〜ん」

「あんたにはそう見えるのね…」

何かボソツと言った善子の言葉は聞こえなかったが

俺は自分がしている腕時計の時間を見た

午後7時を示していた

「あつ、もうこんな時間か…」

「善子、家まで送るよ」

「ヨハネよっ!!」

「いけないわよ…家までは近いし、私が逆に送るわよ」

「ダメだ！善子も女の子なんだから、何かあつたら大変だろうが」

「ほら行くぞ…」

俺は善子の頭を優しく撫でて

善子の表情は見えなかったけど、どこか顔が赤く見えたような気がした

「ふん……」

「すら丸にそんな風にしなさいよね」

今日も俺は

堕天使様に相談に乗ってもらった

赤髪ツインテールちゃんの服

俺、木田正斗は今

国木田花丸ちゃんと休日の朝からある家の前に居る

「相変わらず、凄いな家だな…」

「オラはもう慣れたぞら」

和風の大きな家、日本の家を絵に描いてみようと云われたらみんな描きそうな

めちやくちや広い家

そんな大きな家に住んでいる人

沼津市では一番の名家、黒澤家の方々が住んでいる

なんで、俺やマルちゃんがそんな家の前に居るのかという

「お待たせ、花丸ちゃん！」

家の扉が勢い良く空いて

この家から出てくる人のイメージとは少し違う

女の子が出てきた

黒澤ルビイちゃん、この黒澤家の次女

マルちゃんとは小中高と同じで俺も小学校は一緒に居た

上にお姉さんが居て、名前は黒澤ダイヤさん

マルちゃん達と同じ学校の3年生だ

そんなルビイちゃんには、苦手な物がある

それは…

「ううん！大丈夫だよ、ルビイちゃん」

「おはよう、ルビイちゃん」

「……………」

「……………!?!」

俺でも何が起こったのか分からないぐらいに

めちやくちや早く、マルちゃんを家の中に入れて

扉を閉められてルビイちゃんが消えた

そう、ルビイちゃんは男性が苦手

男性恐怖症なのだ

何故、男性恐怖症になったのかは聞いた事はない

マルちゃんやダイヤさんいわく

男性の雰囲気やゴツゴツした感じが怖いらしい

俺は少し平気らしく唯一話せる男の子

と言ってもらった事がある

今のリアクションでちよつと不安になったけどね

「全くルビイったら…お客様を置いて、廊下を走るなんて……」

「あら…正斗さんではないですか」

「お、おはようございます、ダイヤさん」

再び、扉が開いて

ルビイちゃんかと思ったら

ルビイちゃんのお姉さん、黒澤ダイヤさんが出てきた

礼儀正しく、しっかりしている

日本の女性といえばとこんな感じだと思う

厳しい所もあるがその分優しさもある素敵なお姉さんだと思う

「おはようございます、ごめんなさいね…ルビイが急に扉を閉めちゃって」

「いえいえ、大丈夫ですよ…多分マルちゃんがルビイちゃんに連絡してなかったんじゃないかな」

「ふふ、そうですか…とりあえず中に入りなさい」

ダイヤさんが中に入れてくれて

ルビイちゃんの部屋まで案内してくれた

黒澤家の家の中は見た目が高級そうな物ばかり

さすが、名家だ

そんな周りの物を見ていたら、ルビイちゃんの部屋までやってきた
「ルビイ？正斗さんを置いていってダメじゃないですか…入っても大丈夫ですか？」

ダイヤさんが部屋の中に居るはずのルビイちゃんに話し掛ける

「ま、待って！あと少しだけ」

中で何かをしているのか、少し騒がしい

「はあ…正斗さんごめんなさい」

「少しだけ待っていて下さい」

ダイヤさんだけが中に入り

何かの手伝いに行った、俺は言われた通り
待つことにした

〜数分後〜

「もう中に入ってもいいはずら〜!」

中からマルちゃんの声が聞こえ

俺は部屋の中に入った

「お、お待たせ…木田くん」

中に入ったら、ルビィちゃんが待っていて

少しもじもじして下を向いている

どこことなく顔が真っ赤だ

それに……

「大丈夫だよ…それよりルビィちゃん」

「は、はい」

「その服、似合ってるね…可愛い」

ルビィちゃんは今どきの女の子が着そうな

可愛らしい服を着ている

なるほど、それを着る為だったのか

「っ!?!……へへ、そっか」

「ありがとう」

ルビィちゃんは近くにあった、ぬいぐるみをぎゅうと抱き締めて

凄く、嬉しそうだ

なるほど、めちやくちや気に入ってる服だったんだな…

〜数時間後〜

「今日はありがとうございました、花丸さん、正斗さん」

「マルも楽しかったぞら!」

「楽しかったです、ありがとうございました」

夕方、遊んでいると時間が過ぎるのは早い

俺とマルちゃんの家に戻る事にした

ルビイちゃんは少し離れた所に居て、ダイヤさんが代わりにお礼を言っている

「ところで正斗さん…今日のルビイの服」

「どうでした？」

「可愛かったですよ、ルビイちゃんあんな服好きですもんね…よつぽど気に入ってるんですね」

「……………」

「ルビイが…貴方に見てほしいから選んだ服なのに」

ダイヤさんが少し、残念そうな顔をして

俺やマルちゃんには聞こえないレベルの声で何かを言った

「独り言ですわ、さあ早く帰らないと御家族の方が心配しますわよ」

「は、はいー」

ダイヤさんが俺達をビシツと指を指して

行ってきたので、2人で急いで家に帰った

ルビイちゃんが見せてくれた意味

ルビイちゃんの気持ちに気付くのは

もう少し先の話だ

文学少女は気付かない

「なあ木田！お前の彼女だよな、これ」

学校の昼休み、俺は教室の自分の机でうとうととしていたら

同じ部活の友達にスマホを見せられた

画面を見たら、マルちゃんがメンバーに居る

スクールアイドルAqoursが映っている

「彼女じゃないよ…幼馴染みだけだよ」

「彼女じゃないのかーじゃあさ、俺にし「絶対にやだ」

「まだ途中なんだけど…」

スマホの画面で楽しそうに踊るマルちゃんを見て

前々から気にはしている事が出てきた

そう…男が、近寄ってくるのではないだろうかなど

学校が終わり

家に帰ってきたら、母が東京に行っていて帰ってきている

東京のお土産をマルちゃんの家にも持っていきなさいと

言われたので、持っていく事にした

「おや？正斗くん、来てくれたんだね」

「こんばんは、おばさん…マルちゃんは家？」

「ええ、マルなら家に居るから会ってあげて」

お寺の門をくぐり、歩いていたら

マルちゃんのおばあちゃんが居た、挨拶をしてからマルちゃんが居

るか確認をして

お土産の事を話して、家に向かった

「美味しいぞら〜」

恐らく、縁側に居るだろうと縁側に行ったら

美味しそうに和菓子を食べているマルちゃんが居た

「やっぱり居た…」

「あつ、正斗くん…こんばんは」

「これ、母さんが東京に行ってきたてきてマルちゃん達にお土産だつて」
「東京のお土産!!嬉しいづら、正斗くんも食べようよ…時間大丈夫だよね」

東京のお土産が入った、袋をマルちゃんに渡したら
目をキラキラさせて喜んでくれた

一緒に食べようと誘われて
食べる事にした

マルちゃんはお茶を用意しに行ってくれて

1人、縁側に座り待っている事にした

「お待たせ〜!さあ食べるづら」

お土産のお菓子を皿に入れて

持ってきてくれた、2人だけで食べるお菓子

最高に美味しい

「あつ、そうだ…正斗くんに伝えたい事があつたんだ」

「伝えたい事?」

マルちゃんが何かを思い出したのか

嬉しそうな顔をして話し始めた

「あのね、今日…オラのファンだつて人に会つたんだ!」

ふう〜ん

ファンか……………

ファン!?!

「ぶっ!?!」

「えっ!大丈夫ずら…熱くなかつたずら?」

びっくりした俺はお茶を吹き出して

慌ててマルちゃんがハンカチを持ってきて拭いてくれた

俺も自分で拭いたりした

「だ、大丈夫だよ…続けて」

「う、うん…今日の放課後にね、ルビィちゃんと一緒に本屋に居たらね」

「同じ年ぐらいの男の子からファンですつて言われちゃつたずら」

すつごく、嬉しそうに話してるマルちゃん

た、確かにスクールアイドルなんだ

フアンの1人や2人は付くとは思う

しかしなんだ…この嬉しくない気持ち

「もちろん、ルビィちゃんは離れた所に居たけど」

「どうするつもりだったの……」

「えっ?」

「もし、その男が悪い奴でマルちゃんやルビィちゃんに何かあったらどうするつもりだったの……」

「あんまり、仲良くしない方がいいよ」

俺は何を言っているんだ

マルちゃんにフアンが付いたのに、何をムカついてるんだ

何を……

「ごめんなさい……」

マルちゃんはしょんぼりした顔で

申し訳なさそうにしている

違う：俺はこんな顔をさせたいんじゃない

マルちゃんには笑っていてほしいんだ

「俺もごめん……なんか言い過ぎた」

「フアンが居るのは嬉しい事だもんな」

「…オラ……オラ、正斗くんが一番だよ?」

「えっ?」

急にマルちゃんが近付いてきて、俺にそんな事を言う

えっ、ま…まさか告白

「オラのフアン1号は正斗くんだと思ってるし、その男の子が1号とは思ってないぞら!」

ああーなるほど

俺はフアン1号じゃないから拗ねてると思ってるのか

はは、悲しいな…

優しく頭を撫でるマルちゃん

俺は、その撫でている手を掴んだ

「ずいっ…」

「お、俺はそんな事を心配してない…」

「俺が心配しているのは…君に何かあったら俺は………」

俺はマルちゃんの顔に近付いて

どこことなくマルちゃんの顔が真っ赤のような気がするが
そんな事は気にしない

「おや？マル…食べているんだね」

急にマルちゃんのおばあちゃんの声が聞こえて

俺もマルちゃんもびっくりして

慌てて離れた

「う、うん…すっごく美味しいぞら」

「じゃ、じゃあ…俺はそろそろ帰るよ」

「そうかい、今日はありがとね…また遊びにおいで」

俺はおばあちゃんに挨拶して

マルちゃんの顔はろくに見れなかった

なんだか、マルちゃんも顔が赤かったような気がした…

「……なんだろ、オラ凄くドキドキする」

「あの時……何かを期待してた、正斗くん……わかんないぞら」

赤髪ツインテールのトラウマ（前編）

夏も近付いて、日に日に暑くなってきているこの頃

俺は駅まで歩いていたら、沼津まで行くには電車が不可欠

沼津に行く理由は欲しい物が近くにはなく

沼津まで行く必要があるからだ

そんな歩いていたら

身に覚えがある赤髪でツインテールの女の子が前を歩いていた

きつとあれはルビイちゃんだ

同じ方向だからきつと駅の近くに用事があるのだろう

俺は話し掛ける事にした

「ルビイちゃん！」

「……？」

俺は少し近付いて聞こえるぐらいの音量で話し掛けた

動きが止まって、少しチヨロチヨロしてから後ろを振り向いた

俺は振り向いてくれたルビイちゃんに手を振った

「……っ?!?」

「び、ピギイイイイ!!!」

俺に気付いたルビイちゃんはみるみる顔が真っ赤になって

普段の彼女からは想像出来ない、猛スピードで走り出して見失って

しまった

しまった…ルビイちゃんは男性が苦手だから

急に話し掛けるべきじゃあなかったか

俺は急いで、ルビイちゃんが走った方向に走った

「はあ……はあ」

「ど、どうしょ…木田くんにびっくりしちゃって逃げちゃった、ルビイ

…凄く嫌な子だ」

「ねえ君…1人かい？」

「えっ…？」

恐らく、ルビイちゃんが走ったのはこの辺りだと思いが
ルビイちゃんどこに居るんだろう

俺はルビイちゃんを探す為に周りを探した

「違うのかな…?」

ルビイちゃんが居そうな場所は探したが、見付からない
残るは公園の奥にある森ぐらいだ

そこに向かおうとした瞬間

「いやあああああ!!」

普段から聞いている声が聞こえた

しかも悲鳴だ、ルビイちゃんに何かがあつたのだ

俺は急いで向かった

「いやっ!!来ないで…男の人いやだ!!!」

「大人しくしてくれたら何もしないから!…じつとしてて」

奥からガサガサと音がする場所があり

そこに行く

男に今にも襲われそうになっている、ルビイちゃんが居た
ルビイちゃんは涙を流し、必死に抵抗している

男は息を荒くして、ルビイちゃんに夢中だった

「何をしてんだ!!お前ええ!」

俺は真つ先に男のお腹を蹴り

ルビイちゃんから離れた

男はめちやくちや弱く、すぐに気絶してしまった

俺は急いで、ルビイちゃんの所に駆け寄った

「ルビイちゃん大丈夫!」

「いやっ!!!来ないで…来ないで!!…お姉ちゃん、助けて」

「お姉ちゃん、お姉さん、お姉ちゃん」

ルビイちゃんは全く、俺を見ようとせず

自分を守るように丸くなって体を震わせていた

ダイヤさんに助けを求めながら

そこから、俺は警察と救急車を呼んだ

ルビイちゃんを襲った犯人は捕まり

ルビイちゃんは急いで、病院に連れて行かれた

事件の事を知った、マルちゃんやダイヤさん達がすぐ来てくれた

「正斗くん！ルビイちゃんは…」

「うん…今は病院の先生がルビイちゃんを落ち着かせてる」

「……ルビイちゃん」

病院の待合室でマルちゃんが聞いてきたので

俺はそう答えた

ダイヤさんや、ルビイちゃんのお母さん、お父さんも凄く心配そう
だ

「正斗さん…ルビイを…妹を助けてくれてありがとうございます」

「本当に…ありがとうございます」

ダイヤさんは俺に近付いて深々と頭を下げた

ダイヤさんの目からは涙を貯めていた、こんなダイヤさんは初めて
見た

「あの……ダイヤさん」

「もしよかったら…ルビイちゃんが男性恐怖症になった理由を教えてください
貰えますか…本当の理由を」

俺は決心をした、ルビイちゃんが男性が苦手な理由は

他にあるはずだと

「……」

「ここでは話せません、場所を移動しましょう」

ダイヤさんは悩んでいたが

周りを考えて場所を移動しようと言ったので

俺やマルちゃんも3人で病院の外に出た

「ここなら大丈夫でしょ……」

「……………この話はあんまり人には話したくありません、ルビイの大事な
話ですから…でもあなた方2人には話しても大丈夫と思いました」

「はい…」

ダイヤさんは決心をしたように俺達にそう言った
決して、他の人には話して欲しくない

ダイヤさんは言ったので俺達に頷いた

その内容は俺が想像してたより

酷い内容だった

「ルビイが中学に上がろうとしていた時期に…」

「複数の男性に…襲われたのですわ」

赤髪ツインテールのトラウマ（後編）

「えっ…ルビイちゃんが」

ダイヤさんが告げた言葉に

俺やマルちゃんはまだ驚いた

「そ、そんな事…オラ、全く知らなかったぞら」

「当たり前ですわ…そう簡単に人に話して良い内容ではないので」

「花丸さんや正斗さんにも嘘の理由を教えました」

確かに、男性に襲われた

つまりはレイプをされたって事だ

そんな事を親友だろうと簡単には教えられない

俺はそんな大変な事がルビイちゃんに起きていて

それを知らずにルビイちゃんに接していた俺が悔しくて悲しかった

「そうか…だからルビイちゃん」

「中学に入学からしばらく来なかったんだ」

「来なかったとゆうより、来れなかったのです」

「あんなルビイを二度と見たくありません…」

ダイヤさんは、あの頃のルビイちゃんを思い出しているのだろう

ダイヤさんの顔を見るだけでどれだけ大変だったか

どれだけ悲しかった、伝わるようだった

「ダイヤ!!ルビイが目を覚ましたって」

「…………ルビイ!!」

ダイヤさんのお母さんがやって来て、ルビイちゃんが目を覚ましたと伝えてきてくれた

ダイヤさんは誰よりも早く、病院の中に入った

俺もマルちゃんも急いで中に入って、ルビイちゃんの病室に向かう

「ルビイ!!!」

「お、お姉ちゃん…」

ダイヤさんは病室の扉を開けて、すぐにルビイちゃんを優しく抱き

締めた

ダイヤさんが小さい子が泣くみたいの声を出して泣いている、ホツとしたんだろう

安心出来たのだろう、たくさん泣いていた

「ルビィちゃん…良かったずら」

「ルビィちゃん…良かった」

「っ?!…はあ…はあ」

俺達も病室に入って、ルビィちゃんが起きていて

一安心した

しかし、ルビィちゃんが俺を見た瞬間

息が荒くなり

段々、苦しんできた

「過呼吸です！早く袋か何かを渡してあげてください」

「その君！悪いけど、出て行って」

「ルビィ!! ゆっくり呼吸して下さい」

ルビィちゃんにダイヤさんが袋を渡し

落ち着かせている

俺は看護婦さんに病室から追い出された

そうか…ルビィちゃんにとって、俺は怖い存在になっちゃったのか

トラウマを思い出す…怖い存在に

病室から、出ていく俺にルビィちゃんが手を伸ばしていたのは

後に知った

〜数日後〜

「ルビィちゃん！お見舞いに来たずら」

「花丸ちゃん…いらっしやい」

俺はこっそり、花丸ちゃんとお見舞いに来ている

俺が急に現れたら、また過呼吸になる可能性があるかも知れないので先にマルちゃんが行く事になった

「あのね、今日はクラスのみんなとAqoursのメンバーからの寄

せ書きと千羽鶴持ってきたぞら！」

「わあー！ありがと」

病室の中から楽しそうに話す2人

学校のクラスとA q o u r sメンバーからの寄せ書きを見ているのだろう

「あのねルビイちゃん」

「今日、正斗くんも来てるんだ…入れても大丈夫ずら？」

「えっ……うん、大丈夫」

マルちゃんは俺も来ていると伝えて

ルビイちゃんの許可がおりたのでゆつくりと病室の扉を開けて入るように伝えてくれた

「やあ、ルビイちゃん」

「き、木田くん……こんにちは」

俺が入ってきたら、ルビイちゃんの身体は少し震えていた

やっぱりまだ怖いのか、でもルビイちゃんは自分の震えを抑えようと手で抑えていた

「ご、ごめんなきい…木田くんは安心出来る人って」

「ルビイ分かってるんだけど、身体が…」

「ルビイちゃん、やっぱり俺」

「帰るわ」

「帰らないで!!ルビイなら……大丈夫だから」

あまりにも震えるルビイちゃんが見てられず

病室の扉を触ろうとしたら

ルビイちゃんが大きな声で止めた

そこからゆつくり、ゆつくりと震えが止まった

「ねっ？」

「大丈夫だったでしょ」

「ルビイちゃん……俺」

「あの時、君に話し掛けなかったら……本当にごめ「謝らないで」

「ルビイ知ってるよ」

「あの時、頭がパニックで何も見えなかったけど、木田が助けてくれた

時…声ちやんと聞こえてたよ？木田くんが助けてくれた」
「ルビイ…嬉しかった、ありがとう」

俺が最後まで言う前にルビイちゃんが話し出した

ルビイちゃんが満面の笑顔でお礼を俺に言ってくれた

その瞬間、俺は泣いてしまった

責められると思った

お前のせいだと、家族からも責められれと思った

ルビイちゃんの…彼女の笑顔に

俺は救われた

墮天使のドツキリ

「ルビィ、元気そうで良かったわ」

「正斗もびつくりしたでしょ、まさかルビィが目の前で熱中症で倒れるなんて」

「ああ…びつくりしたよ」

沼津市の駅近くの公園のベンチに

冷えたラムネを飲みながら、座って

墮天使（自称）の善子と話している

俺やマルちゃん以外のメンバーにはルビィちゃんが俺の

目の前で熱中症で倒れ、入院していたって事になっていた

今は無事に退院している

「ところで、ルビィが凄く大事そうにしていた」

「ちよつと可愛くないぬいぐるみあったんだけど、あれは何？」

「あ、あれは…：マルちゃんが俺に似てるからって」

「退院祝いにプレゼントしろって言うから…」

ルビィちゃんが退院すると知って

俺とマルちゃんは退院祝いのプレゼント探して

マルちゃんは可愛いポーチ

俺は悩んでいたら、マルちゃんはちよつと目付きが悪い

可愛くないペンギンのぬいぐるみを見付け

「これ、正斗さんに似てるからルビィちゃんにあげるすら！」

と言うから、買うことに決めた

正直俺は困惑した

「なるほどね…納得したわ」

「良いんじゃない？ルビィ自体は大事にしてるし」

「それなら良かったけどさ」

善子はラムネをひと口飲んでから

何かを思い出したみたいに自分の財布を取り出して

何かを取り出した

「これ…思い出したからあげるわ」

「えっ?」

財布から取り出された、物を受け取り

その何かを確認した

「ライブチケット?」

「握手券付き?」

チケットの内容を見たら、A q o u r s が野外でライブをやるらしく

その関係者席のチケットだ

そして、その特典に握手会に参加出来るらしく

メンバーが国木田花丸、高海千歌、津島善子

と書かれている

へえー、花丸ちゃんと握手出来るんだーやったー

「つて、なんで握手券!!!」

「しかも、全員顔馴染みじゃんか!!」

「別に良いじゃない、たまには」

「すら丸がびつくりする顔が見たいって理由だけどね」

なんやかんやで

俺はチケット受け取り

家に着いた

「あら、正斗」

「花丸ちゃんから、ライブの招待券あるけど、あんたも来るでしょ?」

「えっ? ああー俺は善子から貰ったから」

「それで行くよ」

母がキッチンに居て

テーブルに置かれた、マルちゃんから貰った

チケットが置かれていた

しかし、俺は善子から貰ったからな

今回はそれで行かせて貰うか…

〜ライブ当日〜

ライブ当日、マルちゃんの家族と俺の家族とで

関係者席に座り

周りを見たら、たくさんAqoursファンが居た

へえー、Aqoursの練習とかが聞いていたけど

凄いな

「みんなー!!盛り上がる準備は出来ていますかー!」

音楽が流れて

いよいよ、ライブが始まる

Aqoursのリーダー、高海千歌ちゃん

がファンに声を掛けて

曲が始まった

曲が終わり

メンバー紹介が始まり

ルビィちゃんが関係者席を見付けて、俺は手を振ったら

少し、照れながら手を振ってくれた

隣に居る、マルちゃんの肩を叩き

マルちゃんもこちらに気付いた

その時に

「花丸ちゃん、自己紹介!」

「ずらー!!い、い、いめんなさい」

千歌ちゃんの声で自分の出番に気付いて、慌てていた

ライブの終了後

握手会に参加する為に俺だけ

列に並びに行く

どうやら、握手会付きなのは俺だけだったらしい

列は流れるように進む

俺の出番、最初はマルちゃんらしい

「ありがとずら〜」

「よっ、マルちゃん」

ファンの人だと、思っているマルちゃんはアイドルスマイルで対応しているが

俺は普通に対応した

「ま、正斗くん!?!な、なんでずら」

「いやー、善子から貰ったチケットが握手券付きだったらしくて…参加した」

「も、もぉーだから善子ちゃん、ずっとニヤニヤしてたんだ」

「あとでお仕置きずら」

マルちゃんは善子にやられた事に怒って

頬を膨らませている

正直可愛い

「まあ、俺はおかげでマルちゃんの可愛らしい衣装や表情見れたから良かったけどね」

「……そんなの」

「正斗くんが頼んできたらいつでもやってあげるずら」

「えっ?」

ちよつと俺はイタズラっぽく笑うと

少し顔を赤くして

ボソツと言った、マルちゃんに俺もドキツとしてしまった

「も、もう時間ずら!」

「早く千歌ちゃんの所に行くずら」

俺はマルちゃんに押されて、千歌ちゃんが居る

隣の部屋に行った

千歌ちゃんには「ああー!正斗くん、久しぶりだねー!」と小さい頃から変わらない笑顔で対応された

ライブと衣装の感想を話すとめちやくちや嬉しそうだった

良かった

千歌ちゃんが終わり、善子の部屋に行った

「どうだった？ずら丸」

「善子はあとでお仕置きだとき」

「げっ!？」

ニヤニヤしながら聞いてきたので

マルちゃんが言っていた事を丸々教えた

「ま、まあ…正斗はこのヨハネに感謝する事ね」

「私のおかげで、ずら丸のアイドル姿見れたんだから！」

「そーだな」

「ヨハネ様のこんな可愛らしい姿も見れたんだからな、感謝するよ」

「っ!?!」

「ば、バカ言っていないで、早く出ていきなさい!!」

善子ちゃんは顔を真っ赤にして

出口を指さし、早く出て行けと言われて

俺は言われた通り出ていった

そのあと、家族とみんなで

楽屋に居るA q o u r sに会いに行つて

無事に帰った

文学少女と花火

A q o u r s は3年生の3人を入れて9人になったみたいだ
ルビイちゃんの姉、ダイヤさんと松浦果南さん

そして、久しぶりに帰ってきた小原鞠莉さん

3人とも小さい頃から知っているお姉さんだ

まあ、そんな9人になったA q o u r sの初ライブが

「花火大会?」

「うん!花火大会すら」

沼津の花火大会

それは狩野川花火大会

俺も小さい頃から馴染みのある

そんな花火大会から頼まれるとは

「凄いじゃん、みんなでまた見に行くよ」

「ありがと!あの……それでね」

少し恥ずかしそうに上目遣いでこちらを見てくる

な、なんだ…?

「ライブは花火大会のすぐにやるから、終わったたら」

「オラと一緒に屋台とか回ってほしい……すら」

ああ、なるほど

俺とマルちゃんは小さい頃から花火大会の時は2人で行っていた
からな

俺もマルちゃんと回れるなら嬉しい

「うん、今回も一緒に行こう?」

「うん!」

マルちゃんは嬉しそうに頷いた

喜んで貰えて良かった

そして

花火大会当日

「正斗〜!早くしないと花丸ちゃんのライブ始まっちゃうよ」

「わかってるよー」

マルちゃんの家族と俺の家族で

ライブを見に来た、周りには他のメンバーの家族や

ファンが居た

そして、ライブが始まり

くライブ後く

「いやー可愛かったわね、花丸ちゃん」

「悪い、お母さん…マルちゃんと一緒に祭り回る約束してるから行くよ」

俺はマルちゃんと約束した集合場所に向かう為

家族と別れた

集合場所は昔から決めている場所だ

少し早めに着いたら良いよな

「良かった、まだ居なかった」

場所に着いたら

まだマルちゃんは居なくて

少し身だしなみを整えて、相手を待つ

「お、お待たせずら…」

「ううん、大丈夫だよ……」

しばらくして、マルちゃんの声が聞こえて

相手の方を見たら、浴衣を着て

しっかりとメイクをしたマルちゃんが居た

「あんまり、じいとお見ないでほしいずら…」

「恥ずかしいよ……」

「ご、ごめん……凄く似合っていたから」

「……ありがと」

本当に似合っていたので

俺も少し緊張してしまい、マルちゃんの顔が見れなかった

マルちゃんも少しは緊張してるのかな？

「じゃあ、行こうか……」

「うん」

俺はにつこりと笑って

屋台の方に向かった

俺やマルちゃんを見守る存在に気付かず

「ふふ、流石ヨハネが頑張ってメイクしてあげたかいがあったわ」

「正斗も奴、照れてるわ：ね、ルビィ」

「……いいな、花丸ちゃん」

「一緒に行けて……」

俺もマルちゃんを羨む存在にも気付かず

「へえー、善子がメイクして、ルビィちゃんが浴衣決めてくれたんだ」

「うん、こんな可愛い浴衣：初めて着たすら」

ゆつくりと屋台を楽しみながら、

今日、着ている浴衣の事やライブの話をした

自分のスマホの画面を見て、そろそろ花火が始まる時間台が迫ってきた

「そろそろ、あの場所行こうか：マルちゃん」

「もうそんな時間ずらか、わかったよ」

毎年、花火が始まる前に

2人だけの穴場スポットに行く

そこなら人が居なくてゆつくりと花火が見れる

場所に着いて

マルちゃんの浴衣が汚れないようにシートを引いて

これではつちりだ

「あっ……始まったすらー！」

「……うん」

夜空を眺めると

綺麗な花火が打ち上がった

次々と打ち上がる、花火

「綺麗ずら〜」

花火に夢中になっているマルちゃん

俺はたまにマルちゃんの方を見る

マルちゃんの方が綺麗だよ

なんてたくさんカツコイイ台詞なんて

恥ずかしくて言えない

そんな事を考えていたら

あつとゆう間に花火が終わってしまった

「今年も綺麗だったね！」

「そうだね、綺麗だった……」

花火も終了し

シートを片付けて、帰りの準備をして

そろそろ帰ろうとした時

「来年も、一緒に見に行けたらいいね」

マルちゃんがにつこりと笑顔でそう言った

それを聞いた俺は……

「俺は……来年だけじゃあやだ」

「再来年も！ずっとずーと、マルちゃんと一緒に見に行きたい!!お互いがいいじゃん、ばあちゃんになっても」

「君と花火を見に行きたい!!」

………っ!??

お、俺なんて事言ってるんだ

ずっと見に行きたい?じいちゃん、ばあちゃんになっても見に行きたい?!

そ、それってプロポーズみたいじゃないか……

「ふふ……良いはずだよ?」

「正斗くんは寂しがり屋すら」

あれ?プロポーズだと思われてない?

えっ?嘘……俺

男として見られてない!??

「うわあああああ!!マルちゃんのバカああああー!!」

「えっ!?!どうしたずら」

「正斗くん!!」

俺は涙を流して、帰った

墮天使な不幸な1日

あの花火大会からしばらく経って

夏休みシーズン、高校野球も盛り上がりを見せる

俺は試合には出れないが先輩達の試合をしつかりと刻み込めたい
め見た

そんな事をして俺に人生で最大のピンチに陥る

今日はマルちゃんの家で善子、ルビィちゃんと夏休みの宿題を進める為の勉強会をひらくらしい

俺も参加が決まって、マルちゃんと家に居る

「正斗くん、いらっしやいー!」

「うん、先にマルちゃんの部屋に居るね」

花火大会以来、少し恥ずかしさもあるが普通に接している

マルちゃんの部屋は和風の落ち着いた部屋だ

俺はそんな畳の匂いとかが好きだ

いや、マルちゃんの匂いとかそんな変態みたいな事は考えてない

部屋に着いた俺は

机に置かれている、俺との小さい頃のと高校の制服を見せ合った写

真が飾られているのが目に入った

「へえー、飾ってくれているんだ」

なんとなく、周りを見ていると

「あら、先に居たのね…」

「うん、いらっしやい善子」

「ヨハネよ」と言いながら襖を閉めた

少し歩いていたら善子が躓きそうになって

俺は支えようとしたら俺までコケてしまい

「いたた……大丈夫か善子」

「う、うん……っ!?」

ん?なんだろう……この小さくてでも膨らみがあるもの

柔らかい

「なんの音ずら!? だいじょ……」

音を気付いたマルちゃんが部屋にやってきた

最初は心配そうな顔をしていたがすと顔が冷たくなった
な、なんだ？なんでそんな俺をゴミを見るような目で見るんだ
考えながら善子の方を見ると

俺は気付いた

「ば、バカ……」

顔を真っ赤にして、涙目になって見つめる善子

俺の手は善子の胸を触っていた

そして、俺が善子を押し倒している構図になっている

「だ、大丈夫？善子ちゃん、木田く!?」

「ルビイちゃんは見ちゃダメずら！変態が移るずら」

あとから来たルビイちゃんが心配そうに覗こうとしたら
とっさにマルちゃんが隠して、再び俺に冷たい視線を送る

あつ、終わった……

「申し訳ございませんでした」

マルちゃんの見解も解けて、俺は土下座をして

善子に謝った

「べ、別にいいわよ……私も悪い所あったし」

善子の顔はまだ少し顔が赤いが

許してくれた

ふう……これでなんとか勉強会が始められそうだな

「みんな、暑い中よく来てくれたわね」

「さあ、冷たい麦茶飲みなさい」

マルちゃんのおばさんが麦茶を持ってきてくれた

しかし、おばさんの手からは麦茶が入ったコップが離れてしまい
善子に麦茶が掛かってしまった

「きやつ…!?!」

「だ、大丈夫?善子」

「ご、ごめんね、すぐタオル持ってくるから」

お婆さんは慌てた様子でタオルを取りに行った

俺に善子の方を見ている

声を掛けようとした

「大丈夫か?よし…?!?!」

善子の服は白だったらしく

濡れた部分からは薄く下着見えてしまっている

や、やばい

「み、見るなあああー!!」

真つ赤になった善子の全速力の平手打ちが俺の顔をクリーン

ヒットした

俺はその瞬間

意識が失った

「うう……」

どれぐらいが経ったんだろう、でもかなりの時間は過ぎただろう

周りは静かだ

まだ意識がはつきりしないまま

俺は近くにある物を触ろうとした

ムニツ…: またしても俺は柔らかい物を掴んだ

今度はかなり大きな物だ…: 俺はその瞬間に自分の意識がはつきりした

「……………」

やっぱり…: 俺は

マルちゃんに膝枕をしてもらっているのに

マルちゃんの胸を触ってしまったらしい

ふっ…: 全てを悟った瞬間

俺は再び、意識が失った

赤髪ツインテールちゃんのヤキモチ

「スケベな正斗くんなんて知らないずらー！」

不幸な事故により、俺はマルちゃんを怒らせてしまい

次の日の一日中、無視をされた

今日も朝、マルちゃんがウチに来ていたので

挨拶をしたら

「おはよう、マルちゃん」

「……………ふん」

「スケベな人なんて知らないずら」

と言われてしまい

俺はどうしたらいいかと

考えていた

善子!!…いや

あいつにもやってしまったから合わす顔がない

だとしたら…もう1人

黒澤家

俺、1人で来るのは初めてだな

いつもはマルちゃんとか善子と来るから

なんだか緊張する、俺はインターホンを鳴らし

誰か出てくれるのを待った

「き、木田くん？」

この小動物みたいな弱い声の主は

今日、俺が話したいと思っっている人物だ

「ルビイちゃん？突然ごめん」

「ちよつとルビイちゃんと話したくて」

「わ、わかった…ちよつと待ってて」

インターホンが切れて

しばらく待つことにした

そしたら、扉が開いて

ルビイちゃんが出迎えてくれた

「ありがとルビイちゃん」

「あれ？今日はなんだか静かだね…」

「き、今日は…お父さんのお仕事の付き合いで」

「お姉ちゃん居なくて、ルビイ…：1人なんだ」

いつも、静かな所だが

人の気配が無いと言った方が正しいのだろうか

静かだ

人が居ない理由も聞いて、家に入り

ルビイちゃんの部屋まで案内してくれた

ルビイちゃんの部屋は女の子らしい

可愛らしい部屋だ、ぬいぐるみもたくさんあるし

大好きなスクールアイドルのポスターやグッズもある

「大事にしてくれてるんだ」

部屋のベッドに俺がプレゼントした

ぬいぐるみがあつた

大事にしてくれているみたいで良かった

「う、うん…木田くんがくれた物だから」

ルビイちゃんは恥ずかしそうに下を向いてしまったが

頷いてくれた、少しもじもじしていたが

ルビイちゃんはお菓子とジュースを持ってくると行って

部屋から出た

俺は用意してくれた座布団の上に座る

ルビイちゃんを待った

「お、お待たせ…木田くん」

「うん、ありがとう」

ルビイちゃんが帰ってきて

小さいテーブルにお菓子とジュースを置いた

「…：今日はどうしたの？」

「うん…：一昨日からマルちゃんに嫌われちゃってさ」

「花丸ちゃんと…」

俺はルビイちゃんにマルちゃんとの事を話した
詳しくは言えないが…

「どうしたら、機嫌直してくれるかな…」

「……………」

「ルビイちゃん？」

ルビイちゃんが下向いたまま

何も喋らない、どうしたのかな？気分悪いのか？

俺は少し近付いて、声を掛けた

「大丈夫？気分悪いの…」

「る……ルビイなら、木田くんにもっと」

「優しく出来るよ？花丸ちゃんより優しくする」

「だから……………!?!」

ルビイちゃんが急に顔を上げて

俺の顔をしっかりと見て言っている

しかし、ルビイちゃんが

話すのをやめた

何を言おうとしたのだろう

「ご、ごめん……………今のは忘れて」

「ルビイ…どうかしてたみたい」

「う、うん」

「素直に謝ったら、花丸ちゃんも許してくれるよ」

「花丸ちゃん、優しいから…」

ルビイちゃんは優しい笑顔で俺に

言ってくれた、それが1番良いよな…

よし、そうと決まったら謝りに行かなきゃ

「ルビイちゃんありがと」

「俺、行ってくるよ」

「うん、行ってらっしゃい」

俺は立ち上がり、ルビイちゃんの部屋から出て

家も出て、マルちゃんの家に向かった

俺が出ていったあと、1人になったルビイちゃんの気持ちを

俺は知らなかった

「ルビィ……最低だ」

「花丸ちゃんに嫉妬した、花丸ちゃんが羨ましかった……花丸ちゃんと仲が悪い時にルビィの気持ち伝えようとした……ルビィ、悪い子だ」

俺はマルちゃんの家の前まで来ていた

マルちゃんの部屋は2階にある

俺は声を出して、マルちゃんを呼んだ

「マルちゃん!!」

「あの時はごめん!俺……俺、寝ぼけてたからマルちゃんが近くに居たとは知らなかったんだ!だからごめん!!」

俺はマルちゃんが居るであろう

2階の部屋に話した、許してくれるだろうか

俺はドキドキしている

そしたら、マルちゃんの部屋の窓が開いた

「もおーあんまり大きな声で話したら、近所迷惑ずら」

「オラも……大人げなかったずら、ごめんなさい」

マルちゃんが出てきて

少し怒られたが許してくれたみたいだ

「つ、次からは気を付けるずらよ!」

「オラだって……びつくりしちゃうから」

「うん!」

俺とマルちゃんは仲直りが出来た

そのまま、マルちゃんの家でご飯を頂いて

家に帰った

文学少女、海に行く

「Aqoursのみんなで海の家をお手伝いするぞら」
「えっ?手伝い?」

夏休みの宿題を2人で片付ける時に
急にマルちゃんが言った一言

Aqoursのみんなで手伝いをする?
バイトでもするのか

「みんなでするってお金でも困ってるの?」

「違うぞら、ダイヤさんがAqoursで特訓するって言ってる時に
たまたま千歌ちゃんの海の家で手伝うって話が重なっただけぞら」

へえー、海の家で手伝いながら特訓か
大変だな…

いや…:待てよ、何もよくはないな

俺はふとよぎった、海の家

夏休み期間中、人がたくさん来る

Aqours、ナンパされる

「俺は絶対に許さない!!」

「ぞら!?!ど、どうしたの?」

「急にテーブル叩いて」

Aqoursのみんなは可愛い

可愛い女の子が集まっている所に男が来ないはずがない

もしナンパなんてされたらどうする

もし、怪しい事をされたらどうする

絶対に許さない!!

「マルちゃん:海の家に手伝う日教えて」

「な、なんでぞら?」

「俺も行くに決まってじゃん!!」

俺はマルちゃんから海の家に行く日を聞いて

その日のスケジュールを全て無しにした
そう、全てはマルちゃんを守る為だ

〜当日〜

「ずら丸…なんで正斗なんて連れて来たのよ」

「し、知らないずら…なんか急に行くって言い出して」

俺の後ろで何か言っている2人

ふっ、大丈夫だ…2人は俺が守る！

「ちよつと、正斗さん」

「はい？なんですか…ダイヤさま」

後ろからダイヤさんに呼ばれて

振り返ったら、ダイヤさんに頬を引っ張られて

俺は中に入れられた

「正斗さんはここでじいとしといて下さい！」

「貴方がお客を睨むから全くこないじゃないですか!!」

正座をさせられて、ダイヤさんの説教が始まった

確かに、海の家を初めてからずっと

男の人が来る度に睨んでいた

おかげで全く人が来ない、それで怒っていたのか

「す、すいませんでした」

「分かれば良いんです」

「中で曜さんや鞠莉さんの手伝いでもしてて下さい」

俺は黙って、曜ちゃんや鞠莉さんの手伝いをした

力運びをしたりと、なかなか楽しかった

しかし、不安は的中してしまった

「君達、可愛いねー！今から遊ばない？」

手伝いながら、男の声が聞こえた

何かなど中から見てもたら

マルちゃんと善子が声を掛けられていた

「えつと……困ります」

「そうよ！私達、今バイト中よ」

「良いじゃん、こんな所でバイトなんかしなくたって」

「俺達と良い所で遊ぼうぜ」

マルちゃんや善子の周りには男達が

3〜4人集まっていた

あいつら……

「困るぞら！オラ達……ここで手伝いを」

「ははは!!この子、ずらつて言ってるぜ」

「どこのババアだよ」

「しかもオラだってよ、おもしろええ！」

マルちゃんも善子も震えていた

マルちゃんの頬から涙が流れていた

それを見た瞬間、俺は……

「ちよつと貴方達!!いい加減に」

「俺の幼馴染みを泣かしてんじゃねえよ!!!」

ダイヤさんが止めようとしたが

先に俺が出ていたらしく、マルちゃんを笑った奴を殴った

そして俺とナンパした奴らによるケンカが始まった

「謝れ!!マルちゃんに謝れコノヤロー!!!」

「お巡りさん!こっちはです！」

曜ちゃんが警察を呼んでいたらしく、大きな声で呼んでいる

ナンパした奴は警察と聞いたら、すぐに逃げた

「ふうー、行ってくれたみたいだね……」

曜ちゃんが行ったのを確認して、警察は嘘だったらしい

俺は殴られた部分は痛いけど、マルちゃんがされた事に比べたら全然
だ

「マルちゃん、大丈夫……」

俺はマルちゃんが居る方に振り向こうとしたが

その瞬間にマルちゃんが抱き着いてきた

「へっ!?!」

「ま、ままま、マルちゃん」

抱き着かれた俺はびっくりして

変な声が出た、マルちゃんはさつきよりも強く抱き締め
離れないようにしている

「……………」

「……………よしよし」

何も喋らないマルちゃんに

俺は優しく頭を撫でた

善子は、果南ちゃんや鞠莉さんに慰められている

く帰り道く

「……………」

あの時からずっと

元気がないマルちゃん

やっぱりショックだったんだろうな

と思っていたがマルちゃんから口を開いた

「今日……………」

「……………ん?」

「今日はありがと……………」

「えつと……………その、助けてくれた時の正斗くんカッコ良かったぞら」

少し恥ずかしそうにしていたが

満面の笑顔になってくれたマルちゃん

やっぱり君には笑顔が一番似合うよ

赤髪ツインテールちゃんは悩む

「……………」

「えつと……ダイヤさん、これは一体」

俺は今、ルビイちゃんの家に居るわけなんだが

一体何故、俺が黒澤家に居るんだと訳を話すと

朝、いつもの様に出掛けようとしたら

急に黒い車が現れて中から黒スーツを着た厳つい人達が俺を車の中に入れて

連れて来られたのが黒澤家って訳だ

そして、今はルビイちゃんの部屋の前にダイヤさんと一緒に居る

「ルビイが1回も部屋から出てきませんの……」

ダイヤさんは心配そうに部屋の前に立っている

俺に状況を説明してくれた

どうやら、あの特訓以来

ルビイちゃんは1回も部屋から出てこないようだ

何故だ……？心配だな

「それで、俺は何をしたら」

「貴方になら、ルビイは喋ってくれればいいです」

「申し訳ないですが、ルビイの事をよろしくお願いします」

ダイヤさんからのお願いを俺は頷いて

ルビイちゃんの部屋の前に立ち

ノックをする

「ルビイちゃん……俺、正斗だけど」

「……………木田くん？」

ルビイちゃんの声が聞こえた

どうやら元気のようなだ、良かった

「ダイヤさんから聞いたよ……なんで部屋から出てこないの？大丈夫？」

「……………」

俺が聞いたら、黙ってしまった

俺にも話せないのかな？

「もし良かったら、俺に話してくれない？」

「だ、ダメー……木田くんには、話せられない」

ルビイちゃんは大きな声を出して

俺には話せないと言われた

えっ……なんだかショックだ

「そ、そうか……話せないか」

「る、ルビイの友達のお話なんだけど……」

「その子にはね、好きな人が居て……男の子で唯一話せる人で……大切な人なんだって、でもその大切な人には幼馴染みの子が居てその子とも友達」

「幼馴染みの子は多分だけど、その大切な人の事が大好きなんだって……る、じゃなくてその子にとって2人は大切な人、大切な友達……だからどうしたら良いのかなって」

「……」

落ち込んだ俺に

ルビイちゃんは友達の話話を話してくれた

なるほど、ルビイちゃんはその話を聞いて

悩んでいたのか、優しい子だな

「俺の意見だけど……ルビイちゃんの友達」

「すげー優しい子だね……友達と好きな人との間に悩んだりして、凄いや」

「俺なら我慢出来ないや……好きで居て良いと思うよ、自分の気持ちに嘘を付いたらダメだよ」

「っ……ひっ……」

中からルビイちゃんのすすり泣く声が聞こえた

えっ泣いてる!?

「ルビイちゃん!?大丈夫!?!」

「だ、大丈夫……ルビイなら、大丈夫」

「木田くんの気持ち……友達に教えるね」

「うん……そうしてあげて」

ルビイちゃんの問題はとりあえずは解決した

ルビイちゃんは部屋から出てきて、すぐさまお風呂に連れて行かれた

どんなに閉じこもっていたんだろう

俺を玄関まで迎えに来てくれたダイヤさん

でもダイヤさんの表情はどこか悲しげだ……

「じゃあ、俺……帰りますね」

「ええ、今日がありますがどうぞごさいました」

「ルビイは優しい子です……これからもよろしくお願いしますね」

「わかってます……ありがとうございます」

俺は玄関の扉を開け、ダイヤさんに頭を下げてからゆっくり閉めて家まで帰った

ダイヤさんはひっそりと独り言を呟いた

「これ以上……ルビイを苦しめるのはやめて頂きたいですわ」

「貴方はなんにもわかっていませんわ……なんにも」

墮天使は知っている

季節は夏を終え

二学期が始まった

部活とかだと、早い所は新しいメンツで練習をしたりする
ウチの野球も同じで俺も戦力に入れてもらえたりしているそんな
俺の練習試合をいつものように見に来てくれている

マルちゃん……と墮天使様だ

「あいつ、なんだか失礼な事考えてるような気がするわ……」

「そうずらか？」

新戦力での試合は凄く順調だ

怖いぐらいに、まあ俺が居ない間に

勝利の女神がいると言われているが、まさか

マルちゃんの事ではないだろうか……

そういえば……俺の許可なく

勝手に握手会とか始めてるよな

大体、マルちゃんもマルちゃんだ

優しいのは知ってるが、簡単に握手会とか始めるよな……

くっそー

「ムカつくー!!!」

「ホームランずらー!」

「……正斗も大変ね」

俺は溜まりに溜まった、イライラをバットに込めて
球に当てた、そしたら、ホームランで
勝利した

やはり、勝利の女神は存在した
ある意味

く試合後く

「ありがとうございますー!」

「へへ、(こちら)そ〜」

いつものように握手会が始まっていた
くっそー、みんなみんな

ニヤニヤしやがって

マルちゃんも断れよなー

「あんたも大変ね…」

「善子か…」

「ヨハネよ…ずら丸は良かれと思ってやってから」

「なかなか止めにくわよ」

「それはわかってるよ…」

俺は少し離れた所から善子と一緒に

握手会の様子を見ている

少し膨れた俺に話し掛ける

善子…

善子は堕天使とか言ってるけど、根は凄く優しい奴だ

俺は好きだな

「お待たせ…遅れたずら」

「あつ、ちよつと待ってて」

「ずら丸、来なさい」

しばらくしたら、握手会から帰ってきた

マルちゃん

善子は何かの話をするのか

マルちゃんを連れて、どこかに行ってしまった

「ずら丸、あんた…握手会も良いけど」

「たまには…その、正斗の事も構ってあげなさい」

「ずら？なんで…正斗くんの事なの？」

「うーん、なんて言えばいいのかしら」

「そーよ…正斗が知らない女子と仲良く話していたらどう思うのよ」

「……………」

「そ、それは…ちよつとモヤモヤするずら」

「あとね…」

2人とも、長く話しているんだな

俺は自分のカバンで座って

携帯をいじっていたら、2人とも帰ってきた

「お帰り、2人とも遅かったね」

「つい、熱く語っていたのよ」

善子がそう言ったので

俺は何を語ったんだろうと気はなつたが

また中二的な奴なんだろうと思っていた

「あんたはもうちよつと強引に行っても大丈夫だと思うわよ…」

「えっ？何の話だよ…」

「さあ？でも正斗にとつて悪い話じゃないのは確かよ」

善子が近付いて、ボソボソと俺に話し掛けてきて

意味あり気な事を言ってきた

悪い話じゃない？俺にとつて？

すげー気になるわ…

善子は俺やマルちゃんより先に歩いて行ってしまった

「我がリトルデーモン達には世話がかかるわ…」

「まあ…ずら丸も無意識とは言え、あんな風に思っていたとはね」

〜数分前〜

「善子ちゃん…オラ」

「最近、正斗くんを考えたら凄く胸の辺りがドキドキして苦しんだ、嬉しかったり悲しかったり」

「オラがオラじゃないみたいで…怖いぞら」

「ずら丸…それはあんたが一番知ってるはずよ」

「私はその気持ちがあんなのか知ってるけど、あんたには教えないわ

…答えは自分でよく考えなさい」

〜

俺はマルちゃんと一緒に歩いている

マルちゃんはずっと何かを考えてるようだ

どうしたんだろう？

「どうしたの、マルちゃん…ずっと考えてるけど」

「いや…善子ちゃんにある事を言われちゃって、それで考えていたずら」

「オラが一番知ってる事だつて言われて…なんだろうなって」

何を話していたんだろう

まあ内容は聞かないが、きつと

大事な話なんだろうな

「そうか…マルちゃんならきつと分かるよ」

俺はマルちゃんの頭を優しく撫でた

マルちゃんは少し止まって、どうな表情をしているかわかんなかったけど

すぐに追い付いてきて、凄く嬉しそうにしていた

マルちゃんが自分の気持ちに気付くのは

そう遠くなかった

文学少女、家出する

今日も部活が終わり

少し、暗くなるのが早くなった季節

俺はもう少しで家って所である物を見た

「……何をしてるの」

「………」

良く見る髪型に良く見る制服

間違いない、マルちゃんだ

俺の家の近くでしゃがみこんでいた

これは…ケンカしたのか

「マルちゃん…ケンカしたの?」

「………」

マルちゃんは黙ったまま、首を縦に振る

なるほど、だからか

マルちゃんはたまーに、おばさん達とケンカをして

俺の家に家出をする

まあ、家が近いのに家出と言うのか…

そして、1日過ぎれば

謝りに行くのがいつものパターンだ

「とりあえず、家に入りなよ」

「ここじゃあ寒いしね」

「お邪魔します…」

家に入れたら、母が電話をしている

多分、マルちゃんの家からだろう

俺は自分の部屋に向かい

マルちゃんも着いてきた

部屋に着いて、俺はマルちゃん用の座布団を用意し

俺は自分用の座布団に座った

「で?…今日の家出の理由は?」

「………オラが」

「オラが、楽しみにとっていた期間限定ののっぽパンを食べちゃった
ずら!!!」

そう、マルちゃんが家出する理由は
大体、食べ物関係だ

普段はおつとりしているマルちゃんが怒るのも食べ物関係だ

こんなのが半年に1回はある

「なるほど、のっぽパンを…誰が食べたの？」

「みんなずら…」

ああー、そうなんだ

大概はおじさんかおぼさんだが

みんなと来たか

「オラ、もう帰らないずら」

「もう、正斗くんの家族になるずら」

家は近いけどね

なんてツツコミはしない

こんなに拗ねてるマルちゃんも久しぶりだな

余程楽しみにしていたんだな

なんて思っていたら、母が部屋まで来て

お菓子を持ってきた

「これ、花丸ちゃんにあげなさい…好きでしょう？」

俺は母から受け取り

何かを確認したら

のっぽパン、期間限定：栗味

と書かれていた…マルちゃんが食べられたの

これなのは

まあ、マルちゃんには渡すけど

俺は拗ねているマルちゃんに近付いて

のっぽパンを差し出す

「これ、良かったらってお母さんが…」

「!?!」

「こ、これは…オラが食べたかったのっぽパンずら！」

やっぱり

さつきまで拗ねていたマルちゃんが目をキラキラさせて

嬉しそうに食べている

はは…わかりやすいな

「じゃあ…もうみんなの事を許してあげるよね」

「…：うん」

ゆっくり頷いたマルちゃん

良かった、解決出来た

もう7時か

晩御飯の時間だな

「晩御飯、ウチで食べるよね？」

「食べ終わってから家まで送るよ」

「ありがと！頂くぞら」

俺は嬉しそうにしているマルちゃんの頭を優しく撫でた

「な、なんぞら」

「オラ…子供じゃないぞら」

少し恥ずかしそうにしている

マルちゃん、俺は可愛いと思って

ずっと撫でてみた

「や、やめるぞら！髪の毛がぐしやぐしやになっちやうぞら」

少し、じゃれあつてからやめようとした瞬間

「もおー！やめるぞら!!」

マルちゃんが俺を押し倒す形になり

思っている以上にお互いの顔が近くになり

俺はめちやくちやドキドキした

お互いにすぐ離れた

「ご、ごめんぞら」

「ううん、大丈夫…」

お互いに耐えきれなくて

ご飯を食べに下に降りて

晩御飯を食べた

ご飯を食べ終わってから、俺はマルちゃんの家まで
送り

別れる所だ

「もう、ケンカしたらダメだよ?」

「う、うん…今日はありがとう」

「ま、またね…」

さっきの事もあり

マルちゃんは緊張しているのか

目を合わせてくれない

まあ、仕方ないか

「またね…バイバイ」

「バイバイ…あつ」

「待って!」

帰ろうとした

俺の腕をマルちゃんは捕まえてきた

「あ、あの…また頭撫でてほしい…ずら」

少し恥ずかしそうに

顔を赤くして、俺に言ってきた

マルちゃんにしたら、珍しく甘えにきている?

まあ、俺は嬉しいからするけど

「…よしよし」

「へへ…ありがとう、元気貰ったずら」

満足したのか、満面の笑顔でそう言っ

自分の扉まで歩いていった

そんな彼女を見て、俺は可愛いなと思って
綺麗な月を見ながら

俺は家まで帰った

墮天使のネット配信

今日、夜

マルちゃんは善子の家で泊まりに行っている
そして、善子なら連絡が来て
ネット配信をやるから見てほしいと言われた
何がなんでも見ろと言われて

パソコンで善子がやっているネット配信サイトまで来て
配信スタートされるまで待っている

夜7時からやるらしく

そろそろ始まるなど時間を確認して
待つ

「くくく、待たせたわね…リトルデーモン達」

「今宵もヨハネと一緒に墮天使しましょう」

良く見る、ヨハネ衣装を着て

墮天使ポーズを決めて話している

画面にはフアンの人達がコメントが流れている

人気あるんだなと思いつながら見る

「今日は私のリトルデーモン0号が来ているわ」

リトルデーモン0号？

俺の考えが正しければリトルデーモン0号ってのは

もしかして

「り、リトルデーモン0号…ハナエルず…じゃなくてです」

俺の予想通り

善子の家に泊まりに行ったマルちゃんが映っている

か、可愛い!!

じゃなくて、なんて衣装を着させているんだ

前にもこの衣装見た事あるな

前に、リトルデーモン衣装で着ていた奴だ

画面のコメントには可愛いなど

たくさん絶賛のコメントが来ている

「今日はリトルデーモン0号と一緒にスペシャルな事をやるわ！」

「よし……じゃなくてヨハネ様と一緒に頑張ります」

時々、ボロが出そうになるが

言い直している

善子の奴、可愛いマルちゃんを見せてくれて

ありがとう

「今日はスペシャル企画よ！ハナエルと一緒に色々な事を答えていくわ」

タイトル画面から場面が変わり

善子が寝転び、マルちゃんが膝枕をしている状態だ

なんて羨ましい

「じゃあ、早速答え行くわよ！ハナエル読みなさい！」

「はい、リトルネーム、リトルデーモン4号さんから頂きましたー」

「花丸ちゃん、善子ちゃん……今生放送しているんだね、がんばルビィだよ」

マルちゃんが読み終わってから画面が変わり

しばらくお待ち下さいと書かれている

い、今のはルビィちゃんからだよね……

「ちよつと！ルビィからのお便り読まないですよ！」

「善子ちゃんが読んでつて言うからオラ読んだだけじゃ！」

音声はそのまま

会話がバレバレだ

完全に放送事故じゃないか

しばらくしてから再び画面が変わり

「くく、ごめんなさいリトルデーモン達」

「次のお便りよ！」

「リトルネームリリースさんから頂きましたー」

「よっちゃん、宿題終わらせましたか？」

また場面が変わる

きつと、桜内さんからのだったんだな

善子の事をよつちちゃんと呼ぶのは桜内さんだけだ

「今度はリリーからじゃない！身内のばっかり!!」

「マルは知らないずらく」

また音声だけが残っていて

流れている、なんなんだ

この配信

はあー仕方ない…俺も送るか

「このヨハネを邪魔をする者達の妨害があつたけどもう大丈夫よ」

「さあ、次はこれよ！リトルネーム、幼馴染みは本好きから頂いたわ」

「ヨハネ様、ハナエルちゃんこんばんは、僕には好きな幼馴染みの女の子が居ます、なかなか告白する勇気がなく幼馴染みが僕の事が好きかどうかともわかりません、どうしたら良いでしょうか…」

さすがに気付かれないようにしたが

善子は少し気付いた感じかな

マルちゃんは、まあ気づいてなさそうだな

「リア充なお便りね、よしハナエル貴女が答えてあげなさい！」

「ま、マル？うーん…まだ恋とかした事ないからわかんないけど、もしマルがその幼馴染みなら嬉しいかな…：…だってこんなマルの事を好きになってくれたなんて幸せだよ、幼馴染みは本好きさんには是非頑張って告白するのをオススメず…：…じゃなくてです！」

「だって？頑張りなさい幼馴染みは本好き!!」

善子の奴、絶対に気付いてるな

わざとマルちゃんに読ませやがった

そこからどんどん進み

「では、今宵のパーティーは終わりよ」

「さらば、リトルデーモン達よ」

動画が終わり

時刻を確認したら9時を過ぎていた

2時間ぐらいしていたのか

凄いな

動画が終わり

しばらくしてから善子からLINEがきた

「……うるせえ」

そこにはあの衣装を着て、ピースをしているマルちゃんの画像付きで

「頑張りなさい！このヨハネが付いてるわ」

と書かれていた

俺は良い友達を持った

赤髪ツインテールちゃんは頑張る

「き、木田くん！ごめんね」

「遅れちゃった…」

「ううん、大丈夫だよ」

今日はルビィちゃんとお出かけをする日

3日前にルビィちゃんからLINEが来て

お出かけをする事が決まった

「その服、ルビィちゃんらしくて良いね」

「似合ってるよ」

「へへ…ありがと」

ルビィちゃんは嬉しそうに笑っている

ルビィちゃんが笑っているとこっちも嬉しくなる

そんな所もルビィちゃんの魅力だろうな

少し話をしてから、沼津まで電車で向かった

「今日は何を買いに行くの？」

「う、うん…今日はA q o u r sの衣装の材料と…あと、ルビィが欲しい服」

電車の中で、今日の買い物内容を聞いた
なるほど、服か

俺はルビィちゃんからA q o u r s内での出来事や普段の出来事
などを聞いて楽しく過ごし

あつとゆう間に沼津に着いた

「少し早いけど、ご飯どうかな？」

「うん、ルビィは構わないよ」

時刻は11時30分、お昼には少し早いが

ご飯を食べに行く事にした

ハンバーガーショップが目にとまり

そこにする事にした

「妹さんに、ハッピーセットはいかがですか？」

「えっ…」

店員さんにメニューを注文したら
笑顔でルビイちゃんを俺の妹と勘違いしたんだろう
そう言ってきた

「いや…妹じゃなくて友達なんです」

「……うう」

「も、申し訳ございませぬ!!」

確かに俺とルビイちゃんの身長差は
結構あるが、まさか兄妹と間違われるとは
さすがにびっくりした

そんな事がありながらもご飯を済ませて
買い物を開始する事にした

「あのね、これとこれの材料が欲しくて」

「どこかにないかな」

ルビイちゃんは曜ちゃんが描いたであろう
衣装のイメージイラストが描かれた、スケッチブックを見せてくれ
た

なるほど、こんなのが欲しいのか

とりあえず、ありそうなお店を見つけたので
中に入ってみる

「あつ、木田くんあったよー!」

ルビイちゃんが探していたら

思ったのが見つかったらしく、教えてくれた

「そっか、良かったね」

ルビイちゃんが材料を買って

お店の外で待つ事にした

しばらくしてからルビイちゃんがお店の外に出てきた
俺とルビイちゃんは材料の買い物続け
最後の買い物を終えた

「よし、あとはルビイちゃんの欲しい服だよね」

「う、うん……実はね」

「木田くん…選んでほしいなって」

ルビイちゃんは少し恥ずかしそうに

頼んできた

俺に選んでほしいのか

責任重大だな…

「いいけど…俺あんまりオシャレじゃないよ？」

「それでも、選んでほしい…」

ルビイちゃんに再度確認して

やっぱり選んでほしいみたいだ

よし、頼まれちゃったからには可愛いものを選んでやる！

俺は色んな店に行つて

ルビイちゃんに合う服を選んだ

しかし…

「ごめん…やっぱり俺には難しい」

「はは、仕方ないよ…ルビイこそわがままでごめんね？」

ルビイちゃんは寂しそうな顔を一瞬した

俺はしっかりと再度選ばないと思った

俺はふと、アクセサリー屋が気になった

俺はそのアクセサリー屋の物の一つをルビイちゃんに見せた

「ルビイちゃん…これどうかな？」

「えっ…ネックレス？」

真ん中に小さな宝石が埋められていて

シンプルな奴だ

「その宝石はルビーだよ」

アクセサリー屋の店員が宝石の名前を教えてくれた

「……よし」

「俺、これをルビイちゃんのプレゼントするよ！服じゃないけど許してくれる？」

「うん…嬉しい」

「ルビイ…すっごく嬉しい」

俺はそのネックレスを買い

ルビイちゃんにプレゼントした

ルビイちゃんが思っていた、服じゃなかったけど
凄く嬉しそうだ

良かった、沼津から内浦まで帰ってきた

俺はルビイちゃんを家まで送り

ルビイちゃんが家に入る前に俺の方に振り向いて

「えっと……あの、今日はありがとう」

「ま……まさ、正斗くん」

ルビイちゃんは少し暗い外でも

わかるぐらい顔が真っ赤になっていて

俺の下の名前を呼んでから、すぐに家の中に入った

「初めて、名前で呼んでくれたな……」

俺は少し照れ臭くなって

家まで帰った

文学少女、誕生日を祝う

「もうちょっとしたら、ルビィちゃんの誕生日ずらー！」

俺の部屋でワクワクしながら

親友の誕生日を楽しみにしている

9月21日はルビィちゃんの誕生日

俺とマルちゃんは毎年、何かプレゼントをあげている

今年は善子を入れて何かプレゼントしようと思った

今日はそんな会議中だ

「はは、マルちゃんはルビィちゃんの誕生日が近くなるとテンション上がるね」

「今年はリリーの誕生日もあるしね」

「梨子さんの誕生日も考えてるぞら！今日はオラ達で個人であげるルビィちゃんプレゼント会議だよ！」

今年のマルちゃんはなんだか凄く楽しそうだな

いつもより張り切ってるように見える

「わ、わかったわよ…リトルデーモン4号の為にこのヨハネがスペシャルなプレゼントを考えるわよ!!」

善子もやる気を出して

3人でお互いの意見を出し合って

プレゼントは決まった

「これでルビィちゃん喜んでくれるかな」

「ふふ、このヨハネが選んだのよ…間違いないわ」

「大丈夫だよ、ルビィちゃんなら喜んでくれるさ」

俺達は

喜んでくれるか不安だけど

きつと大丈夫、今日は会議が終わり

俺が代表して、買い物をする事に決まった

「よし…これならルビィちゃんも喜んでくれるだろう」

休みの日に俺はプレゼントを買いに沼津まで行き

少し大きめな袋を持って内浦まで帰ってきた

「あれ？ルビイちゃん…？」

頑張つてウチまで持つて帰ろうと考えていた時に

黒い車がたくさん止まっていて

たくさんのスーツを着た人の中に

ルビイちゃんが居た

やばいと思つたが、こつちには気付いてなく

大丈夫だろうと思つたが

ルビイちゃんは少し暗い顔をしているように見えた

ルビイちゃんが車の中に入って

たくさん止まっていて車はあつとゆう間に居なくなつた

「あれって…黒澤家の車なんだろうか」

「すげーなやつぱり」

この時の俺は

そんな風に軽く考えていたが

まさかあんな展開になろうとは思っていなかった

「正斗く電話に出て！」

「はーい」

家に帰ってきて

部屋でプレゼントを隠し終わつて

ゆつくりしていたらウチの電話が鳴り、母に出るように言われたので

電話を出す為に部屋から出てきて電話に出た

「もしもし？」

「あつ、正斗くん…丁度良かったぞら」

電話に出たら、マルちゃんの声が聞こえた

なるほど、マルちゃんは自分の携帯が無いから家から掛けたのか

今度買うように言つてやろう

「マルちゃんか、どうしたの？」

「うん、実はね…最近ルビイちゃんの家に電話掛けても行つてみても誰も出てくれないぞら」

「そうなんだ…珍しいね」

マルちゃんからの電話も家に行っても誰も出ないのは珍しい
何かあったのかな…

俺はふと、前に見た暗い表情のルビィちゃんを思い出した
嫌な予感がした、俺はマルちゃんと電話しながら

自分のスマホでルビィちゃんにLINEを試してみた

「忙しいのかな…」

「きつとそうだよ…あそこは名家だしね」

心配そうにしているマルちゃんを慰めようとしたが

俺のスマホのLINEから、ルビィちゃんからの返事が来た

「えっ……嘘」

“ 今までありがとう…もう二度と会えないかも”

俺が思っていた

返事とは全く違う返事が来てしまった

赤髪ツインテールちゃんの想い（前半）

「な、なんだよ……これ」

スマホの画面を見て

メッセージの意味が分からなかった

「ごめん、マルちゃん」

「俺、用事が出来た」

俺はルビィちゃんの意味を聞くために家まで行こうと

思い、マルちゃんとの電話を切り

急いで用意をし、家を出て

家まで向かった

俺は走りながら考えた

ルビィちゃんから送られてきたメッセージの意味を

なんで、あんな寂しい事を言うんだよ

なんだよ、あれ

ルビィちゃん

ルビィちゃんの家の前からやつと着いた

そこには先客が居て

和風の家には少し目立つ、金髪の女性が居た

「鞠莉さん？」

「?……正斗」

そこには、鞠莉さんが居た

小さい頃から良く知っているメンバーの1人だ

なんで、鞠莉さんが居るんだ

「なんでこんな所に鞠莉さんが……」

「あなたの様子からして、あなたと私の目的は一緒だと思うわ」

いつも明るい鞠莉からは想像出来ないぐらいに真剣な顔をしてい
る

鞠莉さんはポケットからある封筒を出てきた

俺に渡してきたのでその封筒に書かれた

字を見て、びっくりした

「退学届け……」

「今朝、ダイヤがやって来て」

「渡されたのよ……黒澤ルビイの退学届けを」

「ルビイちゃんの!?!」

「なんで、ダイヤさんが」

「ルビイちゃんの退学届けを？」

「やっぱり何かあるんだ、家で」

「何かが……」

「あなた達……」

家の扉が開き、よく聞く声が聞こえた

振り向くとダイヤさんが居た

鞠莉さんはダイヤさんに真つ先に向かい

突っかかるように胸ぐらを掴む

「あの封筒は何?」

「説明をして」

「……」

ダイヤさんは言いづらそうに

している

ダイヤさんでも言いづらい事なのか

「ダイヤさん……お願いします」

「説明してください」

「分かりましたわ……」

「ここでは話せないなので近くの公園に行きましょう」

ダイヤさんは鞠莉さんの手を振り払い

近くの公園まで3人で向かう

ダイヤさんの背中から伝わりのは少し悲しく見えた

「ここなら良いでしょうか」

「単刀直入に言わせてもらうと、ルビイは結婚するんです」

公園に着いて、ダイヤさんから伝えられたのは

衝撃的だった

ルビイちゃんが…結婚？

えっ……なんで

「ルビイは今年で16ですわ」

「世間では結婚出来る歳…お父様はお得意様の息子さんとの結婚させると決めました」

「政略結婚ね…」

「そんな理由で大切な生徒の退学は認めないわ…これは理事長としての発言よ」

「お、俺も認めたくないです!」

「なんで、ルビイちゃんがそんな理由で離れないとダメなんですか! ルビイちゃんは!? ルビイちゃんはなんて言っているんですか!」

政略結婚

俺には難しい話だ

けど、ルビイちゃんにとって苦しく、辛いものだと

俺でもわかる

「私だって反対をしました!」

「でも…出来なかった、私では止められなかった、私だって……辛いのです」

ダイヤさんが珍しく声を荒あげ

涙を流している、そっか

ダイヤさんだって、辛いよな

辛いはずがないよな……だって

たった1人の大切な妹だもんな

鞠莉さんは自分のハンカチを出して

ダイヤさんの涙を拭いてあげている

「お、俺が言います!」

「俺がなんとか説得します!!」

「あなたが…?」

「ほんとに?」

ダイヤさんの涙を見て

とっさに出た発言

2人は半信半疑で見られている
あれ？俺
信用されてない？

赤髪ツインテールちゃんの想い（後半）

「……………」

黒澤家…沼津市の中でも名家だ

小原家と一二を争う、財力を持っている

名家の事情なんて俺には難しくてわからない

でも、友達が頑張っている

目標に向かってる

そんな理由で諦めないとダメなんておかしい

「はぁ……………よし！」

俺は深呼吸をして

決心をしてから家の扉を開いた

そこには黒いスーツを着た

いかつい人達が俺を待っていたらしく

俺は自分でもわかるぐらいに

顔が青ざめて血の気が引いた

「はは……………失礼しま」

今日はちよつと帰ろうと

扉を閉めようとした瞬間

スーツの1人に腕を掴まれて

中に入れられて、どこかに連れられた

「いたっ!!……………いつっ」

俺はどこ広い部屋にほおりこまれた

打ってしまった所を抑えながら

周りを見渡す、ここはどこだ

「木田くん……………」

俺が今、1番聞きたかった声だ

俺がこの家に来た理由

本人の気持ちも聞きたかった

俺は声がした方向を向いた

「ルビィちゃん……………」

下を向いて、申し訳なさそうな顔をしている
ルビイちゃんの横にはお父さんが居た

この人がルビイちゃんを嫁に行かそうとしている

張本人

「久しぶりだね、木田くん」

「お久しぶりです、おじさん」

襖が空いた

ダイヤさんと鞠莉さんもやってきた

「うむ…ダイヤ、お前か」

「木田くんや小原のお嬢さんに話したのは」

「……………」

あのダイヤさんも少し怯えているようだ

さすが、名家の大黒柱

威厳が違う

でもそんな事で諦めたらダメだろう

「あの！ルビイちゃんの結婚、やめてくれませんか！」

「何故だ？確かに君には大きな貸しがある」

「だが、これは我が黒澤家の今後の為なんだ…無関係な君が首を突っ込んで良い話じゃない」

確かに俺は無関係だ

ルビイちゃんの未来をもしかしたら無茶苦茶にあるかも知れない

でも、あのスクールアイドルをやっている楽しそうな君を失っていないのか？

今の君からは楽しそうには見えない

今の君からは……………助けてって

伝わってくる

「確かに俺は無関係なんです…でも」

「貴方が知らないルビイちゃんを俺は知っています、ルビイちゃんは今頑張ってアイドルをしています！自分が大好きな物になれた、今……………ルビイちゃんは輝いています」

「彼女から……………ルビイちゃんからスクールアイドルと友達を取らない

「であげて下さい」

「……………」

「私からもお願いします、今…彼女は学生生活で今一番楽しい時期でしょう」

「1番輝いている…そんな時間を奪ってあげないで下さい」

俺と鞠莉さんはお父さんの前で頭を下げた

お父さんはどんな顔をしているだろう

ルビイちゃんはどんな顔をしているだろうか

「ならん……………」

「この結婚は既に決まっている事だ、相手の方も楽しみにしている今更変更は出来ない…話が以上なら帰ってくれ」

「ちよつ……………待って下さいい！」

「くつ、ダイヤはお父さん似って事がわかったわ」

お父さんはスーツの人に俺と鞠莉さんを帰すように指示し

スーツの人達に抑えられて暴れるがビクともしない

「ルビイちゃん!!ルビイちゃんの気持ちは…君の気持ちを聞いてない
!」

「お願いだ!!俺達と……………会わないなんて口にしないでくれ!!!ルビイちゃん!」

俺の言葉を聞いて

涙を流す、ルビイちゃん

「ひっ……………やだ……………」

「木田…くん……………達と、会わないの…やだ」

ルビイちゃんの言葉にお父さんは歩きを止まり

ルビイちゃんの言葉を聞く

「どうゆう事だ…?ルビイ」

「ルビイ…もつと、スクールアイドルしたい」

「もつともつと……………友達と仲良くしたい、今の友達と離れたくない」

「お父様……………私からもお願い致します」

「ルビイを…せめて今だけは自由にさせて下さい」

「……………」

「…わかった、向こうにはルビイが卒業するまでは待てと言っておこう」

ルビイちゃんとダイヤさんが頭を下げ

お父さんはしばらく考えて

ルビイちゃんが卒業するまでは自由にして良いと許可が出た

「や、やったあああああ!!!」

「ohーやりますター!!!」

俺と鞠莉さんはスーツの人から解放されて

喜んだ

これでルビイちゃんとまた一緒に遊べる

まだ一緒に居られる

なんて喜んでいたら

ルビイちゃんから俺に抱きついてきた

「る、ルビイちゃん!?!」

「……………」

「正斗くん……………」

ルビイちゃんは涙を流して俺にお礼を言っている

ありがとうを言いたいのは俺の方だよ

俺はルビイちゃんの頭を優しく撫でた

「正斗さん……………」

「ルビイをそんな風にして良いなど許可をした覚えはありませんわよ?」

物凄くドスが聞いた

声で俺に話しかけてきたダイヤさん

周りには抱き着いているルビイちゃん以外

居なくなっている

「はは……………」

黒澤家に俺の悲鳴が

響き渡った

墮天使とリリー

ルビイちゃんの結婚騒動を無事に解決し
誕生日を祝え、そこからしばらく経った

ある日

俺は善子に1人呼ばれて、家までやってきた

「いらつしやい、入りなさい」

扉が開いたら、善子が出迎えてくれた

俺は中に入り、善子に案内されて、部屋に入って
待つてくれと言われたので

先に入った

「あつ、こんにちは」

「こ、こんにちは……えつと桜内さん」

そこには、マルちゃんでもルビイちゃんでもない
今年から内浦に引越してきた

桜内梨子さん、千歌ちゃんと同い年だ

俺とは全く接点が無く

俺はマルちゃんや善子達から話を聞くだけで

どんな人なのか、わからない

まさか桜内さんが居るなんて、善子の奴…

「この間のプレゼントありがと…花丸ちゃんと選んでくれたんだよ
ね」

「あつ、いえ……マルちゃんから絵を描くのが好きって聞いていたん
で、マルちゃんと選びました」

桜内さんはたまに練習試合をみんなで来てくれるだけで

ゆっくりと話した事がない

少し、緊張するな

「マルちゃんや善子からいつも聞いてます…A q o u r sの作曲とか
してるんですよね」

「凄いです」

「私も花丸ちゃん達から聞いているわ…」

「練習試合凄かった」

東京からやってきた、女性

どんな人なんだろうと少し気にはなっていた
どことなく、マルちゃんに似ている

清楚で優しそうな

「あんだ、ずら丸にチクるわよ」

「うわっ!?よ……善子」

なんて考えていたら

耳元で善子が囁いてきてびっくりした

「ヨハネよ……」

「なーに、リリーの前だとデレデレしているのよ……スケベ」

「だ、誰がスケベだ!!しよーがないだろう、今まで話してなかったんだ、緊張するよ」

「ふふ、ごめんなさい」

「ほんとに仲がいいんだね」

桜内さんが笑っている

そんなに仲が良く見えるのかな……

「私ね、ここに来るまでは……凄く不安だった」

「地味な私が上手くやれるのかって、みんなは小さい頃から知ってる顔でそんな所に急に私がやってきて良いのかなって……」

「大丈夫ですよ……確かにみんな、小さい頃から知ってるメンバーだからって急に知らない所からやってきた人を除け者にするような人は誰もいませんよ」

「むしろ、みんな興味が湧いて寄ってくるぐらいです……桜内さんも最近わかってきたでしょ?」

俺が聞いたら、黙って頷く桜内さん

良かった、楽しそうで

そして、良い人だ

「正斗、あんだ……せっかくだから桜内じゃなくて下の名前で呼びなさいよ」

「Aqoursのメンバーは全員下の名前で呼んでるくせに」

「えっ、でも…まだ話して間がないのに」

「私は構わないよ…？みんな呼んでくれてるし」

うーん、本人がせっかく良いと言ってくれてるし
呼んで良いんだろうな

俺もそう呼ぶか

「分かりました…：梨子さん」

「はい！木田くん」

優しい笑顔で言ってくれた梨子さん

なるほど、これが大都会東京の女性か

「だから、デレデレすんな!!」

「いたっ?!?!何すんだよ」

「何よさっきから見てたら、ニヤニヤして」

「ちよっと、ずら丸に雰囲気か似てて大人のお姉さんだからってデレデレして!」

どこからか持ってきた

ハリセンで俺は頭を叩かれて説教された

確かにマルちゃんに少し似ている、そして大人のお姉さんって感じがして

落ち着ける、否定が出来ない

桜内梨子さん、凄い人だ

結局、俺はそこからも

善子にめちやくちやハリセンで叩かれて続け
何で呼ばれたのかわからずじまいに終わった

文学少女のいらいら

「……………」

梨子さんと距離が少し近付いた

次の日

今日はマルちゃんに呼ばれて

マルちゃんの家に行く

しかし、マルちゃんは一切喋らない

黙々とのつぽパンを食べている

何故だ、何かしたのか？

なんで、こんなに機嫌が悪いんだ…

「昨日、善子ちゃんから連絡きたぞら…」

「梨子さんと仲良くしてたって……………」

あ、あんの堕天使いいいいいい！！！！

本当にチクリやがった

いや、別にいやらしい意味じゃないんだ

落ち着いて、誤解を解けば

「ち、違うんだマルちゃん」

「何か勘違いしてるかもだけど、僕はただ梨子さんと話した事がないから話をしたくって」

「梨子さん？」

「前、オラと話をしてた時は桜内さんだったぞらよ？なんで急に梨子さんって呼んでるの…」

マルちゃんの目付きが更に鋭くなり

今まで見た中でかなり怒っている事がわかる

やばい、本格的に勘違いしている

「もういいぞら…………マルみたいなの、田舎者で訛りが酷い女の子なんて興味ないぞらね」

「梨子さんみたいな綺麗で都会育ちの女の子と仲良くすれば良いよ……………」

マルちゃんが立ち上がり

部屋から出ていきそうになったので
俺は急いでマルちゃんの手を掴んだ

「待って！」

「マルちゃん……君は何か勘違いしているよ」

「離してよ……」

「オラより梨子さんと仲良くしたら良いぞら」

マルちゃんは俺の手を振り払おうとしているが

力の差で振り払えない

マルちゃんの顔を見ようと、

顔を見せないようにしているマルちゃんの顔を

見ようとした

「マルちゃん……泣いてるの？」

「オラもわかんないぞら……」

「なんでこんなにイライラしているのか、正斗くんが言っている事が信じられなくて、梨子さんにすっごく嫌な気持ちを持つてる……なんで……こんなに苦しいの」

涙を流しているマルちゃん

マルちゃんは涙を拭いて

自分の気持ちに分からなくて戸惑っている

マルちゃん……そんなに

「マルちゃんごめん……」

「でも、本当に何にもないから……君が思ってるような事はないから」

俺は優しくマルちゃんを抱き締め

頭を撫でた

こんな事で落ち着くとは思えないが、今はこれが一番なんじゃないかと思う

「オラもごめんなさい……凄く面倒な事しちゃったぞら」

「オラ……どうかしちやっただぞら」

「大丈夫だよ……ゆっくり落ち着いてくれたら」

落ち着くまで、俺はマルちゃんを抱き締め

頭を撫でた

しばらくして落ち着いたのかゆっくり離れて
俺がやった事が恥ずかしくなった

「ご、ごめんー!」

「急にあんな事しちゃって」

「ふふ、大丈夫すら」

「おかげで落ち着けたし」

マルちゃんはいつもの笑顔を浮かべてくれた
良かった、いつもの笑顔だ

俺はそこからマルちゃんの家で

昼飯を頂き

昼からマルちゃんと一緒に出掛ける事にした

ここからまた

新しい展開がある事が

俺やマルちゃんはまだ知らない

墮天使、犬を拾う

「凄い雨だな…早く帰らないと」

今日は生憎の雨、学校の帰り道

俺は傘をさしながら駅に向かってる

今日は風も強いなー歩くだけでも大変だ

そんな事を考えながら進んでいると

見覚えのある人物を見付けた

あれは…善子？

何をやっているのだろう

じいときていると何かを拾ったように見えた

何か落としただけなんだろうと思

俺は近付いて話し掛ける事にした

「善子？」

「ひゃあっ!?…な、ななな…何よ！」

俺が善子に近付いて

声を掛けただけでびっくりし、慌てて

制服の中に何かを隠した

「お前…何か隠したな」

「べ、別に何も隠してないわよ」

善子はそう言っているが

明らかに服の中でその何かが動いている

生き物か？

「動物か？」

「だから、なんの事よ！」

「ワン！」

服の中で動いていた物がわかった瞬間だ

中には犬が入っている

俺は黙ったまま善子を見る

善子は顔を一切合わせない

それでも俺はじいとき見た

「お願い！私の代わりに面倒を見て」

「私はマンションだから犬とか飼えないの！だからお願い！」

善子は俺の顔を見て

犬を見せて、お願いをしてきた

「……」

犬も純粹な目でこちらを見てくる

はあ、俺はこうゆうを見たら

断れないな

「わかった、飼い主が見つかるまでな！」

「!!わかったわ！ありがとう」

「良かったわね！ライラプス」

善子は嬉しそうに笑って

犬を優しく抱き締めていた

ん？ライラプス…って犬の名前なのか？

「ライラプスって犬の名前か？」

「ええ！ギリシャ神話に出てくる犬と同じ名前よ！カツコイイでしよう」

そのあと

ギリシャ神話について長々と語られて

俺は風邪を引いた

〜2日後〜

「よし、やっと熱が下がったぞらね」

「うう、マルちゃんごめん…」

俺は自分の布団の中で寝て

マルちゃんに看病してもらっている

風邪を引いている間はマルちゃんのお寺で

ライラプスを見て貰っている

「あつ、そうだ…来る前にチラシが配られていて」

「迷子の犬らしいんだけど、善子ちゃんの犬に似てるぞら」

マルちゃんが自分のスクールバッグから

チラシを出して俺に見せてきた

俺はチラシの犬を見て

確かにライラプスに似ている

やっぱり迷子だったのか

「マルちゃん、善子に連絡して」

「この事教えてあげよう」

俺は、マルちゃんに善子に報告するように
伝えて

チラシに飼い主の電話番号が書かれていて

俺はそこに連絡をした

「あんこー！良かった」

「ありがとうございます、あんこを見付けてくれて」

「いえいえ、飼い主さんが見つかって良かったです」

「ありがとうー！お兄ちゃん、お姉ちゃん」

善子と一緒に飼い主の家に着いて

ライラプス、改めてあんこは飼い主の元に帰った

小さな女の子が飼い主だったのか

どことなく、あんこも嬉しそうだな

飼い主達は家の中に入ってしまった

「で……いつまで、落ち込んでいるんだよ」

「だって……ライラプスは私がやっとな会えた、使い魔」

「……よし、俺が何か奢る！」

「だから、元気を出してさ」

「じゃあ……最近出来た、激辛ラーメン奢りなさい」

「はいはい」

落ち込んでいるんだ

善子の頭を優しく撫でて

何かを奢ると言って

2人で行く事に決めた

赤髪ツインテールちゃんと約束

「さて〜帰って何をしようか…」

部活が終わり、学校の校門まで歩いていたら

何やら、騒がしい

何かあったのかな…?

俺は校門前に溜まっている人盛りに向かった

「可愛い〜!」

「やっぱり本物は可愛いね」

女子が盛り上がっていて

人か動物が居るのか?

「Aquorsのルビイちゃんがんに会えるなんてラッキー」

へえー、ルビイちゃんが居るのか

凄いな…

ルビイちゃん!?!

俺はルビイちゃんが居ると知り

慌てて、人盛りの中からルビイちゃんを探した

「ルビイちゃん!大丈夫か」

「き、木田くん…助けてー」

ルビイちゃんに声を掛けたら

か細い声で俺を呼ぶ声が聞こえて

必死に探して

ルビイちゃんの手を見付けて、手を握った

「ぴっ……ぴぎいいいいい!?!」

俺に手を握られて

びつくりしたのか、ルビイちゃんは思い切り声を出して

さつきまで居た、人が一気に下がり

俺は今のうちだと思い、ルビイちゃんを連れて

落ち着ける場所まで行った

「ふう〜ここまで来たら大丈夫だろう」

「あ、あの……木田くん」

「手……」

「あつ……ごめん」

ルビイちゃんは少し恥ずかしそうに握っていた手のことを言ったので

俺は慌てて手を離す

「今日はなんで来たの？1人？」

「ううん、お姉ちゃん達と来てる」

ルビイちゃんが指をさした場所に

黒い車が止まっについて

ダイヤさんも居た

「あつ……今日は来た理由はね」

「これを木田くんに渡したくて」

ルビイちゃんは自分の財布の中から

ある物を出てきた

俺はそれを貰い、見てみた

「ラブライブ地区大会……」

「うん、これで勝ったら……ラブライブの決勝に行けるんだ」

「良かったら、見に来て」

ルビイちゃんはこの大会で勝利したら

ラブライブの決勝に行けると

「もちろん！見に行くよ」

「良かった……そ、それでね」

「もし、ラブライブの地区大会で勝って、決勝も勝って……学校が存続出来たら、聞いてほしい事があるんだ」

「うん……わかった」

ルビイちゃんは少し恥ずかしそうに

話したい事があると聞いて

俺は頷いた

ルビイちゃんの頭を俺はゆっくり撫でた

「頑張つてね…ルビイちゃん」

「へへ…うん」

「あのね…大会の時にまた頭を撫でてほしい」
「撫でるだけならいつでもやってあげるよ…」

く大会当口く

「いよいよだね…」

「うん…緊張する」

俺は関係者席の所からステージを見つめる
ルビイちゃんとマルちゃんを見付けた

「大丈夫だよ、2人なら」

「ひゃっ!？」

「ぴぎっ!？」

急に2人に声を掛けて

びっくりさせた

そんなにびっくりする？

「もおーびっくりさせないでほしいぞら!」

「ご、ごめん…」

「る、ルビイも…さすがにやめてほしいかな」

2人から怒られてしまった

二度とやらない

俺はそう誓った

「お詫びって訳じゃないけど」

「頑張つてね…2人とも、応援してるから」

2人の頭を撫でて

ニコツと笑う俺

マルちゃんは満更でもなさそうしていて
ルビイちゃんは嬉しそうにしてくれた

「もちろん、頑張るぞら」

「見ててね、正斗くん」

「うん!学校みんなの為に頑張ルビイ!」

2人は自分の楽屋に戻り
俺はそんな2人を見届けて
自分の席に座って
ライブが始まる

そして

Aqoursは
ラブライブ決勝に進めた
しかし……

文学少女と廃校

「えっ…学校に泊まる?」

「うん…学校の入学希望者がなかなか伸びなくて」

「鞠莉ちゃんのお父さんに明日の朝5時まで待ってもらえるようになったから、みんなで泊まる事にしたんだ」

ラブライブ地区大会で勝ち

Aqoursの知名度は一気に上がり、動画再生数も上がり

あとは学校の入学希望者が増えるのみ

今日はそんな入学希望最終日

Aqoursのみんなで学校に泊まる事を

マルちゃんから聞いた俺

伸ばしてもらったって事は伸び悩んでいるのかな…

「正斗くん……」

「ん…?」

「学校……残せるかな」

携帯の向こう側から聞こえる

マルちゃんの不安そうな声

俺はこんな時、なんて声を掛けたら良いんだろう

大丈夫?残せるよ?

違うと俺は思った

「……………」

「頑張ったよ…マルちゃん達は」

「ふふ…なんぞらそれ」

少し笑ってくれたマルちゃん

やっぱり、君には笑っていてほしいな

「あつ、善子ちゃん達と買い物に行かないとダメだからもう切るぞら」

「また明日…バイバイ」

「うん、バイバイ」

マルちゃんは善子達と行く

買い物を思い出して
電話を切る事にした

「……頑張れみんな」

俺は電話が切れたあと

自分の携帯の待ち受けにしている

マルちゃんの写真を見る

どうか、マルちゃんやみんなの

学校が残りますように…

俺はそんな事を願いながら

眠りについた

く翌朝く

「正斗ー！正斗!!」

「んん……なーに？」

俺はお母さんの声に起こされて

まだ眠たい体を起こし

お母さんが居る、下の階に降りて

用事を聞いた

「花丸ちゃんを迎えに行つてあげな」

「向こうは朝は忙しいからね」

「わかったよ……」

マルちゃんを迎えに行く事になり

準備をして

学校まで向かう事になった

学校まではバスに乗り

学校の近くに着いて

そこから坂を上がり

歩いた

そろそろ学校が見えてきたその時
学校の校門前に誰かが座っている

まさか…

「やっぱり…マルちゃんだったか」

「……正斗くん」

座っている人物に近付いたら

やっぱりマルちゃんだった

座っているマルちゃんが顔を上げたら

目が赤い…顔も腫れている

俺は黙って、隣に座る

「……ダメだったぞら」

「学校…：存続出来なかった」

「………」

隣に座る俺に

あれからの結果を聞かされた

「学校みんなに合わせる顔が無いぞら…」

俺はマルちゃんの頭を撫でた

学校を存続させる為に頑張ってきた

マルちゃん達、あともうちよつとつて所で

出来なかった

「大丈夫だよ、マルちゃん」

「確かに学校は存続出来なかったけど、マルちゃん達にはまだ出来る事はあるよ」

「ラブライブって大会にAqours…：浦の星女学院って学校があったんだよって名前を刻める、マルちゃん達が輝いた奇跡を残せるよ」

「……オラ達が出る事」

「オラ…：残したい、学校の名前、Aqoursの名前…：ラブライブに残したいぞら!!」

マルちゃんは俺が

言った言葉に勇気が出たのか

元気になってくれた

大丈夫、みんななら出来るよ

最後まで輝けるよ

「よし……帰るか」

「マルちゃん」

「うん！」

赤髪ツインテールとSaint Snow

「なんで、俺まで……」

「正斗くん、早く来るずら〜！」

「ここは沼津いや

北海道、何故こんな所に俺達が居るのかと言われたら

Aqoursが北海道で開催されるスクールアイドルのイベントに招待されたらしく

Aqoursの護衛兼マネージャーとして、何故か俺が選ばれた

今は観光をしていて

1年生のメンツと回っている

しかし、寒い…流石北海道

「ここで休憩するずら〜！」

「うわ〜！どれも美味しそうだね」

3人は和風な店の前に置かれている

メニューを見ていて、どれにするか選んでいる

「俺は暖かい奴でいいや…早く入ろう」

俺は先に店の中に入り

なるべく寒くない所を探して、そこに座る

「いらっしやいませ…何名様でしょうか？」

「4人です、席大丈夫ですか？」

「はい、構いませんよ」

店は和風なわりに

若い店員さんが居るんだな

歳は近そうだし、偉いなー

「あつ……」

「……あなた達は」

あとから入ってきたマルちゃん達が

店員さんを見て固まった

店員さんもマルちゃんを見て、知ってる様子だ

えっ、知り合い

「姉様、どうしたの…?」

「Aqours…」

店の奥からもう1人の店員さんが出てきた
どうやら姉妹のようだ

何やらただならぬ雰囲気だな…

「えっ!?東京で会った凄いスクールアイドルが」

「あの2人なの!」

「ええ…まさかこんな所で会うなんて」

「凄い偶然すら…」

とりあえず、席に座り

お互いの好きな物を頼み

食べながら話を聞いたら

少し前にAqoursが6人だった頃に

東京で会った2人組の凄いスクールアイドルに会っていて

今、その2人と再会したのだ

「Aqoursの皆さん、改めて決勝進出おめでとうございます」

「決勝戦で会うのが楽しみですね」

S a i n t S n o w

それが彼女達、スクールアイドルの名前

鹿角聖良

鹿角理亞

による姉妹ユニット

今、俺達に話し掛けてるのが

姉、聖良さん

「まるで勝つたみたいない言い方ね」

「当たり前です…Aqoursの皆さんが変わったみたい」

「私達、S a i n t S n o wも変わりましたから…」

「……」

「何よ……」

「ぴぎっ…ぐめんなやい」

そして、聖良さんの後ろで

ルビイちゃんを威嚇しているのが妹

鹿角理亞

俺達と同一年だ

「明日、大会楽しみにしてて下さい」

「お代が結構です…サービスしますね」

A q o u r s は凄いのをライバルにしてたんだなと

俺は初めて知った

そして、俺達は集合時間をすっかり忘れていて

慌てて、みんなが居る所に戻り

ダイヤさん達にこっぴどく叱られた

↳翌日

「さあ、昨日あんなに強く出たんだから」

「とくと拜見しようじゃない」

関係者席にA q o u r s のみんなで座り

善子はそんな事を言いながら座った

いよいよ始まる大会

俺達が見たのは

想像していたのと違う物だった

「まさか、S a i n t S n o w…あんな事になるなんて」

「姉妹でやる最後だったのに…」

S a i n t S n o w が出番の時

理亞さんの方が緊張していたのか

動けなくなり

結果、敗退した

「……………最後、姉妹として」

俺の隣に座っていたルビイちゃんが
ボソツと呟き

お店のテーブルに濡れていて
ルビイちゃんを見ると

涙を流していて

「ルビイちゃん…泣いてるの?」

「えっ……ち、違うの」

「別に…泣いてる訳じゃ……っ」

ルビイちゃんは必死に涙を拭いたが

それでも涙が止まらず

耐えられなかったのか

お店を出て行ってしまった

俺とダイヤさんはルビイちゃんを探す事にした

ルビイちゃん

どうしちゃったの…

赤髪ツインテールちゃんの決意

ルビイちゃんが店を飛び出してしまい

A q o u r sで探す事にした

きつと、遠くには行かないだろうと

みんなで話していたが、不安だ

見知らぬ街で迷子になったら大変だ

俺達は探した

「マルちゃん、見付かった?」

「見付からないぞら…ルビイちゃんどこだろう」

一緒に探しているマルちゃんに聞いても見つかってなく
違う場所に移動中

見覚えがある赤髪の女の子がベンチに座り

下を向いていた

「あれ?ルビイちゃんじゃないかな…」

「あつ、本当だ…ルビイちゃんぞら」

ルビイちゃんだとわかって

近付いたら、そこにダイヤさんが居て

2人で何やら話している

俺とマルちゃんは気付かれないように

じいと待った

「何を話しているんだろう…ルビイちゃんとダイヤさん」

「わかんないけど…きつと大事な話だよ」

しばらく待つてから

俺とマルちゃんの携帯が鳴り

ダイヤさんからみんなへ一斉メール

ルビイちゃんが見付かったって内容だ

「まあ、俺達は知ってるけどね」

↳ 数時間後

俺達は、宿泊しているホテルに戻り

各々の部屋で明日、静岡に帰る準備をしたり
休息を楽しんでいる

俺はもちろん

1人部屋で過ごして

キャリーバッグに、荷物を入れたりした

コンコン

俺の部屋の扉から

ノックする音が聞こえた

誰だろうと思ひ返事をした

「はい、誰？」

「き、木田くん…ルビイなんだけど」

扉の向こう側からルビイちゃんの声が聞こえた

こんな時間にどうしたんだろう

俺は扉を開けた

「ルビイちゃん？どうしたの…」

「えつと…あのね」

「ルビイと付き合ってほしいの」

へっ？

付き合う…？

く外く

「ごめんね？お姉ちゃん…ルビイが1人だと不安がると思って…」

多分だけど、俺と一緒にの方が

不安だと思うが、それは口にはしない

「大丈夫だよ…とどこでどこに向かうの？」

「うん、理亞ちゃんの所に行こうと思って」

理亞ちゃん

なるほど…何か、ルビイちゃんには考えがあつて

行くんだね、そんな事を考えていたら

S a i n t | S n o w がやっているお店に着いた

そこには店を締める準備をしている理亜ちゃんが居た

「あなた達…」

「ごめんね…こんな時間に」

「ちよつと良いかな？」

あとはルビイちゃんに任せるとして

俺はどうしよ、中に入るか

寒いし

「ごめんなさい、お店は今日はもう…」

「あつ…あなたはマネージャーの…」

「まあ、正確にはただ付いてきただけの国木田花丸の幼馴染みだけだね…」

店の中に入り

聖良さんは俺の事を覚えていてくれていたらしい

マネージャーさんではないがな

「今日はごめんなさい…あんな結果になってしまい」

「大丈夫です…メンバーの1人が変わるきつかけが出来たみたいですよ」

「きつと、理亜ちゃんも変わるはずですよ」

「それって…」

「そのうち分かると思います」

ルビイちゃん達が帰ってくるまで

店の中でゆっくりして

聖良さんが熱いお茶を出してくれて

飲んで過ごした

しばらくしてからルビイちゃん達が帰ってきた

俺とルビイちゃんはホテルに戻る為に

店をあとにした

「木田くん…明日、お願いがあるんだ」

歩いてる時に

ルビイちゃんから話しかけてきて

そんな事を言われた

Awaken the power (前編)

「えっ?残る?」

「じ、実は、理亜ちゃんが寂しいって言ってるみたいで」

「ルビィ達だけでも残ろうかなって思ってる」

「それなら私達も残ろうか...?」

「いや、理亜ちゃんマル達の事がめっちゃ好きみたいでマル達だけで良いと言ってるすら!」

空港行きのバス停の前で

俺とマルちゃん達は他のメンバーに

北海道に残ると伝えた

しかし、理由それでいいのか?

怪しんでないだろうか...

「わかった!それなら仕方ないね」

「私達だけでも帰ろうか」

千歌ちゃんはマルちゃん達の言うことを信じてくれて

1年生と俺以外のメンバーにそう言ってくれた

「正斗くん...花丸ちゃん達の事よろしくね」

「...うん、任せて」

空港行きのバスが来て

千歌ちゃん達がそれぞれ乗る

最後に千歌ちゃんが乗ろうとして

俺が居る方向に振り返り

そう言った

千歌ちゃんは凄いな...

何かするって気付かれてるな

あれは...

「ふう...みんなを騙してるみたいで心が痛いぞら」

「そうね...でもルビィが提案した案を実行するには仕方ないわ」

「うん...お姉ちゃんが居なくてもルビィだけでも大丈夫だよって所を見せない」と

「……ルビイと理亞ちゃんで」

「さてと…理亞ちゃんの所に行こうか」

2年生、3年生を見送ったあと

このあとの事を話して

理亞ちゃん達の店に行く事にした

ルビイちゃん達が計画した事

それは

ダイヤさんや聖良さん

が心配しないように、残されたルビイちゃん達だけでも

ライブを成功させて、安心させる為だ

俺も残れば安心してくれるからと残ったが

そんな事言われなくても残ったけどね

「い、いらっしやい」

「上がって…」

理亞ちゃん達の店に着いて

理亞ちゃんの部屋に案内された

俺達は中に入り、ルビイちゃん達は曲の事について

話し合った

「あの…ちよつと良いですか?」

部屋の扉がノックされて

聖良さんの声がした

理亞ちゃんが返事をした

「姉様、どうしたの?」

「いえ…正斗さんはどうするのかなと思って…」

「あつ…そう言えば考えてなかったな」

「もし良かったら…使ってない部屋があるのでそこを使つて下さい」

「ありがとうございます!」

マルちゃん達は理亞ちゃんの部屋で寝るとして

俺まで一緒に寝る訳には行かないからな

考えてなかった…聖良さんが使ってない部屋があると

聞いてそこで俺は寝る事にした
寝れるようにお布団などを用意してくれるようだ
有り難い

「あつ、俺ちよつと…トイレ借りるね」

「ああ、部屋を出て左にあるわ…」

「ありがとう」

俺はトイレの場所を覚えてもらい

部屋を出てトイレに向かった

「ねえ……ルビィは正斗の事が好きなの？」

「えっ!?ど……どどど、どうして？」

「いや…あんた、正斗を見る目が違うから」

「………うん、好き」

「………っ」

「………そう、好き好きってオーラが私には見えたわ」

トイレを済ませて

理亞ちゃんの部屋から話し声が聞こえる

盛り上がってるようだな

俺は入る前にノックをしようとしたら

聖良さんから話しかけてきた

「お布団の用意が出来ました、いつでも寝に行ってくださいね」

「ありがとうございます聖良さん」

「あんなに楽しそうな理亞久しぶりに見ました」

「これも正斗さんが来てくれたおかげです」

「俺は何もしていません…全部ルビィちゃん達がしてる事です」

楽しそうな声が響く部屋の扉を見て

嬉しそうにしている聖良さん

性格は違うけど

ダイヤさんと聖良さんは似ているよな

そんな事を俺は思った

俺は理亞ちゃんの部屋には入らず

布団を用意してくれた部屋に行くだけで
伝えて

部屋に行った

俺は部屋に入り、布団にダイブして

ゆっくりした

しばらくしてから

部屋の扉をノックする事が聞こえて

聖良さんかなと思ひ、扉を開けたら

マルちゃんが居た

「あれ？マルちゃん…どうしたの？」

「…また、胸の辺りが苦しいすら」

「さっきから…オラは嫌な事ばかり考えてるすら」

マルちゃんは悩んだ顔で

そう言っている

何があつたのかな…でも聞くのは変だよな

聞いて欲しくない事かもだし

「梨子さんの時もそうだったすら…オラ」

「自分が怖いすら…どうして」

今にも泣きそうなマルちゃん

俺は黙ってマルちゃんの頭を撫でた

ただ黙って撫でた

そんなやり取りをしている俺達の近くで

もう1人居たとは、俺やマルちゃんは気付かなかつた

「…言えないよ、気持ち伝えるなんて」

「だって…花丸ちゃんも…きつと」

Awaken the power (後編)

昨日から、俺やマルちゃん達は

北海道の理亞ちゃん達がやっているお店に泊まらせてもらい
そんな俺は空いている部屋に布団を用意してもらい

そこで寝ている

「んん……んん？」

俺は少し寝苦しさを覚えて

寝ぼけてはいるが目を開けて

違和感がある、所を見る

「すう……すう……」

「………!?!?」

俺は自分の目を疑った

布団の中を捲り上げたら、マルちゃんが俺に引っ付いて寝ているか
らだ

えっ?なんで……なんで寝ているの

軽くパニックになっていたり

部屋の扉からノックする音が聞こえた

「正斗?起きてる?朝起きたら」

「ずら丸居ないからあんた知らな……」

ノックをしたのは善子で

善子は俺に話しながら扉を開けてしまい

俺とマルちゃんの状態を見てしまい固まっている

「善子ちゃん、どうし……」

ルビィちゃんも一緒に居たらしく

善子の様子がおかしいのに気づいて

中を見てしまい

同じく固まってしまった

「んん………うるさいずら」

「………!?!?」

周りが騒がしいのに気付いて

目が覚めたマルちゃん

自分が置かれている状況にびっくりしている様子

「ず、ずら丸、あんたまさか……」

「は、ははは……花丸ちゃんが」

マルちゃんは善子やルビィちゃんを見て

少し引いている善子と今にも気絶しそうなルビィちゃんを見て

軽くパニックになっている

「ち、違わずら……こ、これは」

「正斗くんに連れ込まれたずら!!」

「いや違うから?!?!いくらマルちゃんでも怒るよ!!」

マルちゃんとはんでもない事を口にして

俺は必死に誤解を解いた

真相はマルちゃんが寝ぼけて

俺の部屋に行き、寝てしまったらしい

〜三日後〜

ルビィちゃん達や理亜ちゃんは

クリスマスイベントのエントリーしにオーディションを受けたり

ラジオに出演したりした

俺はもちろん付いて行つた

そんな事したら

三日目になっていて

流石遅過ぎると

LINEがたくさん来ているが

俺はマルちゃん達にそろそろ呼んでも良いかと確認したら

OKと出たので

ダイヤさんと呼んでほしいと千歌ちゃん達に連絡した

〜更に翌日〜

「お姉ちゃん達、びっくりしてくれるかな……?」

「大丈夫ずら!ルビィちゃん達、ばっちりずら」

夜、ダイヤさん達と待ち合わせしている場所に先に着いて

びつくりさせようと準備をしている所だ

ルビイちゃんは少し不安そうだけど

マルちゃんが元気づけている

しばらく待っていたら

ダイヤさん、聖良さんがやってきた

「お姉ちゃん!」

「姉様!」

ルビイと理亞ちゃんは一緒に出て

今回のライブのチケットを2人に渡し

「私達のライブ、見に来てください!!」

「ルビイちゃん…」

「あつ、木田くん…」

ライブ終了後

俺はみんなの楽屋に行こうとしたら

1人、椅子に座り

休憩しているルビイちゃんが居た

「お疲れ様…凄く良かった」

「うん…ありがと」

俺はルビイちゃんの隣に座り

話し掛けた

「そういえばさ…前に話していた」

「聞いて欲しい事があるって言ってたじゃん?あれって何?」

「えっ……あ、あれは」

「えつと…」

俺は前にルビイちゃんが言っていた事を

改めて聞いてみようと思ってみた

少し困っている様子だ

なんだろう…まさか困るような事をされるのか!?

「……………本当は廃校が無くなってからって思っていたけど、それも無理になっちゃったから今言うね」

「……………ルビィね、木田くんが」

「あつ、こんな所に居たずら」

「遅いわよ、ルビィに正斗」

ルビィちゃんが言おうとした所に

2人が来た

ルビィちゃんは何もなかったみたい

少し悲しそうな顔をしていたように見えた

2人の所に行き、自分の荷物を持った

俺も自分の荷物を持って

みんなと一緒に内浦に帰った

墮天使の正月

「あけましておめでとうございます」

年末が終わり

新しい年が始まった

俺は家族と一緒に毎年、マルちゃんのお寺に行き
初詣をする

マルちゃんもおじさん達のお手伝いをしたりして
忙しそうだ

俺も初詣が終わると手伝ったりしている

不純だと思われるだろうが

マルちゃんの着物姿が見れるから俺的には幸せだ

「毎年ありがとね…手伝ってくれて」

「いやいや、俺は別に良いんだけどさ」

内浦の人口が少ないとはいえ

やはり忙しい時は忙しい

俺はマルちゃんの言われた通りに作業をしていると外から

よく知っている2人の声が聞こえた

「ずら丸達居るかしら…?」

「多分、忙しいんだよ…お客さんも居てるし」

善子とルビィちゃんだ

2人も来てくれたんだな

マルちゃんに2人が来ていると伝えると

「えっ、2人も来てるずら?」

「ちよつと待ってて、お父さんに休んでいいか聞いてくるずら」
嬉しそうな顔をして

おじさんに休憩をしてくれるのか聞きに行つた

マルちゃんはしばらくしたら

帰ってきて

休憩をしてくれると言われたそうだ

俺とマルちゃんは早速、2人を探しに行く事にした

「あつ、居たずら」

「何？探しに来てくれたの？」

しばらく探していたら

特徴的な髪型の2人が居て

間違いなく善子とルビイちゃんだと気付いた

「ああ、作業をしていたら2人が見えたからさ」

「おじさんに休憩もらったんだ」

「あつ、花丸ちゃん、木田くん」

「あけましておめでとうございます」

善子とルビイちゃんに探しに来た理由を話して

ルビイちゃんが無かを思い出して

まだ挨拶をしてないと気付き、お互いに挨拶をした

「今年もよろしくね、みんな」

ルビイちゃんがそう言うのと

みんなで頷いた

「そういえば、ルビイちゃんと善子は普通に私服なんだね」

「当たり前じゃない、着物なんて動きづらいわよ…」

「ルビイはさつきまで着てたよ、また帰ったら着るけどね」

各々の着てない理由を聞いて

なるほどなど頷いた

まあ、やっぱり一番似合うのはマルちゃんだよなと

1人納得する俺

「良かったわね…ずら丸の見れて」

「なっ……?!?まあな」

善子は俺の心が読めたのだった

タイミングで小声で話しかけてきて

驚いた

「あと、たまにはルビイのもの褒めてあげなさいよ?」

「えっ?う、うん…」

善子が珍しくルビイちゃんの事を話してきて

ルビイちゃんをチラッと見ると

ヘアピンを付けていて、可愛いものだ
ルビイちゃんらしいな

「ルビイちゃん、可愛いの付けているよね」

「えっ…あ、ありがとう」

俺はヘアピンの事をルビイちゃんに話したら
下を向いてしまった

あれ？間違えた？

しかし、どこことなく顔が赤く見える
どうしたんだろう

「ルビイちゃん？大丈夫？顔赤いけど」

「ピ……ピギイイイイイイイ!!!」

下を向いたルビイちゃんに顔を合わせる為に

近付いたら

ルビイちゃんの顔が真っ赤なトマト並に真っ赤になり

ルビイちゃんは逃走してしまった

「えっ!?ちよっ……ルビイちゃん」

「あんた、褒めろとは行っただけど、あそこまでしろとは行ってないわよ
!」

「ルビイちゃん!?危ないぞらよ!」

逃走してしまったルビイちゃんに驚いて

3人でルビイちゃんを追い掛ける事にした

「あつ、善子も似合ってるな…その服」

「っ……き、急にずるいわよ」

俺は善子の方に振り向いて

服の事を褒めた

善子は下を向いて顔を少し赤くして

何かボソツと言っていたが

聞こえなかった

「えっ?なんて言ったの?」

「なんでもないわよ！ほらルビイを探すわよ」

善子は俺の背中を叩いて

先に探しに行った

俺も追いかけて探しに行った

しばらくしてから、ルビイちゃんが居た場所は

マルちゃんのお寺の下に居た

文学少女のバレンタイン

「おはよ〜」

「おはよう」

朝、高校の靴箱を俺は開けたら

2〜3個チョコの箱が入っていた

なるほど、今日はバレンタインだったのか

今日の日を思い出していたら

友人が近付いてきた

「正斗〜お前何個貰っ……」

「あっ……」

俺が手にしている2〜3個のチョコを見付けて

すぐさま、俺の胸ぐらを掴んできた

いや、ごめん……お前がそこまで気にしていたとは

ほんとにごめん

「……」

「おい……哀れな目で俺を見るな」

そこから、俺は

結構なチョコを貰い

袋に入れて、持って帰る事にした

男子からは殺意の目で見られていたが

気にしたらダメだ

沼津の駅に着いて

改札を出る前に、良く見る奴が居た

「げっ……」

「あっ……て露骨に嫌な顔をするな！」

善子は凄く嫌そうな顔をしていて

わりと傷付くな

「ごめんごめん……寄りによってあんたに会うなんて思っただけよ」

それはそれで傷付くよ……

なんて思っている俺に

善子は自分のカバンから可愛らしいラッピングされた袋を渡してきた

「何これ？」

「何って、チョコよチョコ！あんたそんなに貰っついて気付いてないの？」

「いやいや、それは分かるけど…善子から貰えるとは思ってなくて」

「何よそれ…あんたに渡そうってルビィやずら丸と話し合っつて、お互いの手作りにしようと思ったのよ」

ああー、そうなのか

手作りチョコか…手作りチョコ!??

俺は理解するのが遅れてやってきて

善子の顔を2度見した

「そんな事聞いてないし！」

「そりゃ、事前に知ってたらあんた鼻の下を伸ばすでしょう？つまりないじゃない」

うう、確かに

そんな手作りチョコを貰えると事前に知っていたら

そんな顔をしてしまいそうだ

それは善子の言う通りだ…

俺は自分の携帯で時間を確認して

そろそろ電車が来る時間だなと思

善子と別れる事にした

「あつ、チョコありがとな！大事にするよ」

「チョコなのに、大事にしてどうするのよ…バカね」

俺は急いで、電車に乗り

内浦に帰ってきた

家に向かって帰っていると

赤髪の女の子が

待っていた

「き、木田くん…おかえりなさい」

「ルビィちゃん…ただいま」

ルビイちゃんは何かを隠している
緊張しているのかもじもじしている

「あのね……これ受け取って下さい！」

ルビイちゃんはピンクの可愛らしいものでラッピングされた袋を
差し出してきた

善子のはラッピングのカラーが違ったから
各々でしてくれたんだな

有難い

「ありがと……善子から聞いたよ、俺にチョコ作ってくれたんだよね」

「えっ……善子ちゃん話しちゃったの!？」

善子から聞いたと聞いてびっくりしている

ルビイちゃん、えっ……秘密だったのかよ

何を話してるんだ

ルビイちゃんは少しアワアワしているな

話題を変えるか

「これ……友チョコって奴だよね」

「嬉しいな、大事にするよ」

「ち、違うよ……！ルビイのは違う」

「ちよつとだけ……特別なチョコだよ」

ルビイちゃんは自分で言ったすぐに顔を真っ赤になり

近くに止まっていた、黒い車に乗り

帰ってしまった

ちよつと特別なチョコか……

嬉しい

俺は再び家に向かって帰った

少し遅れてしまったけど

無事に帰ってきた

俺の家の前にマルちゃんが居た

「遅いぞら……」

「ごめんごめん……少し話したりしててさ」

少し不機嫌な顔をしているマルちゃん
謝ったら仕方ないなって顔をしてくれた
良かった、そこまで怒ってないみたいだ

「これ……マル、チョコとか作るの初めてで」

「ルビイちゃんや善子ちゃんに手伝って貰って作ったんだ……良かったら受け取ってすら」

「もちろん受け取るよ」

「マルちゃんの初めての手作りなんだもん」

緊張した感じで差し出してきた

マルちゃんのチョコを受け取った

へへ、マルちゃんの手作りか嬉しいな

「あつ……マルちゃんも女の子だもん、他の奴にも渡してるよな」

「………そんな事ないすら！」

「確かに千歌ちゃん達には渡したりしたすら……でも男の子は……正斗くん以外渡してないよ」

マルちゃんは俺の顔を見て

俺以外の男には渡してないと言われた

えっ……そうなんだ

ちよつと嬉しいな

「な、何ニヤニヤしてるすら！」

「早く家の中に入ってご飯とか食べるすら!!」

顔を真っ赤にしたマルちゃんは必死に

俺の背中を押して家の中に入れようとした

俺は黙って家の中に入り

マルちゃんと一緒に晩飯を食べた

その夜

俺は3人から貰ったチョコをゆつくりと食べて味わった

墮天使の昔話

俺とマルちゃんは善子の家で遊びに来ている
いつもなら、ルビイちゃんも居るのだが

今日は家の用事があるらしく

3人で遊ぶ事になった

俺と善子でゲームをやっている所で

マルちゃんは善子が読んでいる本を漁っていた

「あつ……懐かしいの見付けたぞら」

「ん？何を見付けたのよ……？」

マルちゃんは嬉しそうな声で

何かを見付けた

善子は気になってゲームをしながらマルちゃんに聞いている

「幼稚園のアルバムぞら」

「ぶっ!?!…仕舞いなさいそんな物!!」

マルちゃんが嬉しそうにアルバムの表紙を見せている

善子はびっくりして、俺とのゲームを中断して

マルちゃんが持っているアルバムを奪おうとしている

「いやぞら！せつかくだからみんなで見たいぞら」

「うう……もつと奥に隠すべきだったわ……」

「本当に懐かしいなー幼稚園か」

俺も幼稚園のアルバムを見て

懐かしくなつて、俺も見たくなつた

善子も諦めたのか、座つて渋々見る事にした

「あつ……先生懐かしい」

マルちゃんがページを開いて

俺達が居た、組のページを探して

見付け、懐かしくなつた

「マルちゃんも善子も小さいなー当たり前前だけど」

「そうゆう正斗も小さいわよ……」

「まあ、一番大きくなったのは……」
「ずらっ？」

アルバムのまだ小さい子供の自分達を見てけて
懐かしくなった

この3人の中で一番成長したマルちゃんを善子と一緒に見た

いや……何がとは言わないが

そんな事は置いといて

アルバムを1枚1枚めくっていると

ある1つの写真を見付けた

「あっ……」

「どうしたのよ……？」

「いや……この時、珍しく俺とマルちゃんがケンカして善子が困って
泣いちゃって」

「それを見た俺達も泣いちゃった時だなんて」

「そんな事あったずらっ」

「し、知らないわよそんなの!!」

何故こんな所をアルバムに入れたんだと思うが

懐かしい……

ケンカした理由は今でも覚えている

よく考えたらくだらない理由だけだな……

〜幼稚園の時〜

「まさどくんー！」

「ん？なくに？まるちゃん」

「もうせんせえーがかえってきなさいって」

「いってたずら」

その時は幼稚園の遊び場で遊んでいた

俺達はそろそろ中に入らないとダメな時に

俺はたくさんの物で遊んでいた

今となったら手伝ってもらった方が早く終わるだろうにと思うが

あの時の俺は男の子だから1人でなんでも出来ると思っていた

「うん……わかった」

「てつだうずらく!」

「あつ! だいじょうだよ、まるちゃんもたなくていいよ」

「えっ? でもおともだちがこまっていたら、てつだいなさいってせんせーがいつてるずら…」

「だいじょうだよ! ぼくはおとこのこだからだいじょうなの!」

5歳の男の子でそんなに持てるわけでもないのに

頑なにマルちゃんには持たさないようにした俺に

ついにマルちゃんも怒った

「もおー! おらがまさとくんのおてつだいたいなの!」

「もたせてよー!」

「いーやーだー!!」

「ま、まさとくん、はなまるちゃんもお……おちついて」

そこに善子がやってきて

2人を止めようにも止められない

まあ、完全に夢中だったからな

「おらももつの一!!」

「もたせない一!!」

「うう……け、けんか……だめ」

「ふたりともけんかやだー!!!」

この時、善子の大きな声と泣いた事にびつくりした

その時に先生もやってきて、俺やマルちゃんは善子を泣かしてし

まった事に罪悪感が現れた

そして2人で泣いてしまった…

〜現在〜

「あの時の善子ちゃんはいいい子ずらく」

「む、昔の話よ……」

「まあ、そんな3人がまたこうやって集まって遊んでいるから凄いな……」

アルバムの最後まで見た俺達は

ゆつくり元の場所に戻すと

善子はこう言った

「ねえ……今、写真撮らない？」

「せっかくだし」

「オラ大賛成すら！」

「うん、撮ろうか！」

またこうやって

集められた、幼稚園だった頃の俺達に教えてやりたいな

また集まれるよって

こうやって、俺達の

思い出が増えていく

赤髪ツインテールちゃん、家出する

学校から帰ってきて

俺は家の前に赤髪ツインテールの友人らしき人物が座っている
このシチュエーション、前にもあったな…

なんて考えながら座っている友人に話し掛けてみる

「る、ルビィちゃん…?」

「……木田くん?」

やっぱりルビィちゃんだ

少し泣いていたのか、涙目になっている

なんとなく、予想出来る理由を聞いてみる

「ダイヤさんと何かあったの?」

「……お姉ちゃんの」

「お姉ちゃんの………スイートポテト食べちゃった」

お、思ってる以上に

く……くならない理由だった!??

「そのスイートポテトね…お姉ちゃんのクラスメイトから貰ったみたいだ」

「それを楽しみにしてて…名前まで書いてた」

そこまでしてる奴を何故に食べちゃったんだ

ルビィちゃん…

マルちゃんといい、なんで食い意地をはっているんだ

「お姉ちゃん凄く悲しそうな顔してた…」

「ルビィ………とんでもないしちやっただなって思って…木田くんの所に来ました」

そ、そうなんですか……

外も暗くなってきたし、ルビィちゃんを帰すわけには行かないし

とりあえず、家に入れるか

「外も暗くなってきたし、ルビィちゃん」

「ウチに入りなよ」

「えっ………?」

「木田くんの……お家に？」

ルビイちゃんはみるみる顔が真っ赤になっていく

あ、あれ？ルビイちゃん？

真っ赤になってそのまま動かなくなった

俺はまさかと思い

ルビイちゃんを確認したら…気絶している

俺は気絶しているルビイちゃんをおんぶして

家に入った

ルビイちゃんをおんぶしたまま、自分の部屋に入り

ベッドに寝かした

とりあえず、マルちゃんにだけでも連絡するか

と思い、携帯を確認したら

「電話が……20件!？」

自分の目を疑った

自分の携帯にこんなに電話が来るはずがない

一体誰からか、確認をした

「あつ……ダイヤさんだ」

やっぱりルビイちゃん

ダイヤさんには黙って出て行ったのか

こんなに掛けているのだからめちやくちや心配しているだろう

俺は電話を掛けてみる

「正斗さああああん!!!ルビイがああああ!!!」

すぐに掛かり

普段のダイヤさんから想像出来ない

泣き声で俺の名前を呼ぶ

「遅くなってすいません…ルビイちゃんなら大丈夫ですよ」

「今は疲れているのか寝ていますから…」

「ほ、ほんとですか?!?!なら今すぐ迎えに行きますわ!!」

「あつ…それならちよっと待ってあげて下さい」

「ルビイちゃんにはしつかり言っておきますから…明日には帰します」

俺はダイヤさんを納得させて
電話を切る

そのあと、マルちゃんにも連絡した

「そうなんだ…ルビイちゃんなら大丈夫すら」

「しつかり謝られるよ…」

「うん…そうだね」

マルちゃんの電話を切り

ルビイちゃんが起きたようだ

「あつ…起きたんだね、ルビイちゃん」

「んん…木田くん？」

「へっ…!??!」

ルビイちゃんが起きて、目を擦りながら

周りを見て、自分が寝ていたベッドを見た

「き、木田くんの…ベッド？」

「ぴ…ピギイイイイ!!」

「ちよつ…ルビイちゃん!?!」

俺のベッドで寝ていたのがびっくりしたのか

飛び起きて、階段でルビイちゃんが落ちてしまい

凄いい音がした

「いたた…」

「大丈夫!?ルビイちゃん」

お尻を打ったのか、お尻をさすっている

俺は慌ててルビイちゃんに聞く

「だ、大丈夫…ごめんなさい」

「ルビイ…ドジだから」

「大丈夫だよ…」

「ルビイちゃんなら謝られるよ…しつかり謝って、ダイヤさんを安心
させてあげて」

ルビイちゃんは黙って頷いた

その日は

俺の家で泊まり

朝早くに、俺が黒澤家までルビイちゃんを送った

「お姉ちゃん!!」

「ルビイ!!」

家の前にダイヤさんが待っていた

ルビイちゃんはダイヤさんを見付けて、すぐに抱き着いた

「お姉ちゃん……ごめんなさい、ルビイ」

「お姉ちゃんが楽しみにしてたの食べちゃって、あんなに楽しみにしてたの知らなくて……ごめんなさい」

「もう大丈夫ですわ……あなたが無事で何よりです」

「……あなたが私を食べちゃうのはいつもの事ですし……もうすぐ食べられなくなるのは寂しいですが」

そうか……ダイヤさんは

卒業したら東京の大学に行っちゃんだよな

寂しくなるな……

「……あなたまで泣いてどうするのですか」

ダイヤさんが俺を見て

泣いていると言われて驚いた

俺……泣いていたのか

なんで……なんで泣いているんだよ

「仕方ない殿方ですわ……ほら泣きやみなさい」

ダイヤさんは優しく俺の頭を撫でてくれた

今まで撫でてくれた中で一番優しくかった気がする

「俺……寂しいです」

「ダイヤさん……」

「わかっていますわ……わかっています」

今日だけは

ダイヤさんに甘えてもいいよな

文学少女、合併先の学校

「……………」

今日は卒業式の準備をしている
季節は春、出会いと別れの季節だ
3年生の先輩達にはお世話になった人も居る
寂しくないと言われたら嘘になる

でも、俺はやっぱりダイヤさんや果南さん達と別れる方が辛いな

「コラー！準備をサボらない」

「いたっ…って渡辺先輩か」

なんて俺が考え事をしていたら

後ろから卒業式の設備やスケジュールが書かれた紙を丸め俺の頭を叩いてきた人を見たら

渡辺月先輩…

曜ちゃんの従姉妹だ

実は最近まで知らなくて

曜ちゃんと同じ名字の人が居るんだなぐらいにさ思ってた

「渡辺先輩か〜じゃないよ…何を考えているかはわかんないけど、今は目の前の事をちゃんとしないと」

「わかってますよ…ちゃんとします」

渡辺先輩に言われて

目の前の事をちゃんとしようと思いを進めた

「ふう〜疲れた」

「お疲れ様！」

準備が無事進み、あとは明日のリハーサル

明後日の本番のみとなった

俺が体育館の扉で座っていたら、渡辺先輩もやってきた

「あれ？生徒会長の仕事は終わりですか？」

「うん、ささっさと終わらせたよ」

ささっさと…流石

曜ちゃんの従姉妹…仕事の速さとコミュ力の化け物

「あつ…木田くんに言わないとダメな事があつたんだつた」

「えっ？俺ですか？」

急に思い出したみたいに

俺に伝えたい事があるらしい、なんだ

まさか、僕の代わりに生徒代表で読めとか言わないよな

「曜ちゃん達ね、ウチの学校に来るから」

「えっ？曜ちゃん達って…浦の星女学院と合併ってウチなんですか！？」

〈数時間後〉

あれから数時間後

俺は家まで歩いていた

まさか、浦の星女学院の生徒がウチに来るのか

って事はマルちゃんも来るのか

そっか……久しぶりに一緒に学校に行けるのか

「あつ！正斗くん！」

家の前にマルちゃんが待っていた

マルちゃん達は学校の閉校祭を開催し、A q o u r sとしては無事にラブライブに優勝し

浦の星女学院の名前をラブライブの歴史に刻む事が出来た

あとは3年生達との別れのみ

「今日は遅かったずらね、正斗くんの学校も卒業式の準備ずらか？」

「そうなんだよね…明後日には卒業式だからさ」

「そういえば…マルちゃんは合併先の学校って知ってる？」

「えっ？そういえば知らないすら…沼津のどこだろう」

マルちゃんに聞いてみたら

どうやら知らないようだ、まあどっち道

知るんだから教えてあげるか

「俺と同じ学校らしいよ」

「……正斗くんの学校ずら？オラ…正斗くんと同じ学校に通えるずら？」

同じ学校だとしり

鳩が豆鉄砲を食らったみたいな顔をしている

びっくりしているな…そりゃそうか

俺もびっくりだ

「うん、久しぶりにマルちゃんと一緒に行けるよ…」

「……………」

俺は頷いて

マルちゃんの頭を優しく撫でてあげた

しかしマルちゃんは下を向いて何も言わない

あれ？嬉しくないのかな……

「へへ…そっか、オラ凄く嬉しいぞら」

「やと…正斗くんをそばで応援出来るね」

マルちゃんは満面の笑みで嬉しそうに言ってくれた

そのあと、両手で俺の頭を撫でていた手を握り

そばで応援出来ると言ってくれた

そうだね…久しぶりに応援してもらえるよ

「…2年生からよろしくね」

「うん、よろしく」

俺とマルちゃんはお互いに笑い合つて

俺の家に入り

一緒に晩御飯を食べた

どうやら、俺の卒業式とマルちゃんの浦の星女学院の卒業式は1日

違いで

マルちゃんの方が遅いらしい

浦の星女学院の卒業式行けそうだな…

なんて考えた、俺

墮天使は善い子

学校の卒業式を終えて

これから春休み、しばらくは自由の身だ

学校は午前中に終わり

今日は海を見に来ている

バスから降りて、砂浜を見たら

誰かが先に居る

あの髪型は…

「善子〜」

「ん？げっ…正斗」

やっぱり善子…

って露骨に嫌な顔をするなよ

「何をしているんだよ…マルちゃん達とは一緒じゃないんだな」

「…別に良いじゃない、1人になっても」

少し元気が無い善子

どうしたのだろうか…

あっ…なるほど

「3年生が卒業するのが寂しいのか…？」

「っ…」

「なんでわかるのよ…」

俺が聞いた言葉に反応した

やっぱり当たっていたか…

「いや…善子がこんな状態になるの」

「幼稚園でも見たなって…」

「…し、仕方ないじゃない…寂しいんだから」

善子は少し涙目になっていて

本当に寂しいそうだな…

案外寂しがり屋だからな…

幼稚園の卒業式でもめっちゃ泣いていたもんなー

「…で、他のメンバーに知られたくないから1人になっていたと…」

「そうよ…そしたらあんたが来たのよ」

俺は善子の隣に座り

一緒に海を見る事にした

「……」

「………な、何よ…何か喋りなさいよ」

「いやー流石善い子の善子だなと思っていてさ」

「……私はAqoursのメンバーが大好き…こんな私を受け入れてくれたAqoursが大好き、ずら丸だってルビィだって…あのメンバーが大好き」

「ずっと一緒に居たかった…もつとずっと居たかった」

善子はどんどん涙を流し鼻水も出している

鼻声で話している

「………あつ」

「俺以上に今の善子にぴったりな人達がやってきたよ」

俺は少し後ろを振り向いたら

今の善子にはぴったりなメンツが来た

俺はゆっくり善子から離れて

そのメンツに任せた

「ん？それってどうゆう意味なのよ」

「………っ」

「ごめんね、善子…寂しくさせて」

泣いている善子を優しく抱き締めたのは

果南さんだ

他に鞠莉さん、ダイヤさんも居た

「まさか、善子さんが一番ダメとは思いませんでしたわ…」

「大丈夫よ善子…もしあなたが会いたいと思ってくれるならマリィ達はすぐにでもあなたに会いに行くわ、どんな理由があってもね」

ダイヤさんも鞠莉さんも優しく善子を抱き締めた

「うう…約束だからね！もし約束破ったら堕天使の名のもと…許さないんだからね」

「………ヨハネを寂しくさせないでよ、バカ3年生」

果南さん達はゆっくり離れて

善子も立ち上がり、3年生の方を振り向いて指をさして
許さないと伝えた

「……………大好き」

「…離れちゃっても3年生と過ごした日々をヨハネは忘れない、大好きな日々だから大好きな3人だから」

「私も善子と過ごした日を忘れないよ」

「忘れてくても忘れられないですわ…あなたのような方は…私も好きですわ」

「イツエース！マリーも善子と過ごした日々を忘れないわ…もちろんユニットもね」

〜数分後〜

善子と3年生との会話は

終わり

俺は再び善子の隣に行く

「良かったな……………」

「ええ…スツキリしたわ」

善子は俺を見てにっこり笑った

俺も一緒に笑った

「あつ善子ちゃん居たずら〜！」

「善子ちゃん！」

善子を探していた

マルちゃんもルビィちゃんがやってきた

善子も俺もきつと同じ気持ちだろう

このメンバーで今以上に素敵な思い出を作っていこうと
きつと…このメンバーなら大丈夫だと

赤髪ツインテールとお姉ちゃん

「あつ、正斗くん来たぞら」

「マルちゃん、どうしたの…その顔、ペンキなんて付けて」
「えっ…あつ、実は最後にみんなで書いてたんだ」

浦の星女学院の卒業式を見に来て

マルちゃんが待っていてくれていて、顔を見たら
黄色いペンキが付いている

どうやら最後の記念にみんなで書いていたらしい

俺はマルちゃんと一緒に学校の中に入り

中庭にやってきた

「おお…凄いね、虹だ」

「うん…オラ達頑張ったぞら」

Aqoursのみんなで書いたであろう虹

俺は記念にスマホで写真を撮った

ついでにマルちゃんも写真を撮った

「ずらっ!? な、なんでオラも撮ったぞら!!」

「いやー綺麗な顔してたなって思って」

「ううー!!今すぐ消すぞら! スマホ貸してほしいぞら」

マルちゃんが顔を真っ赤にして

俺を追いかけて来る、正直可愛いなと思った

恥ずかしがるマルちゃんが…

「ちよつと…何をイチャイチャしてるのよ、二人で」

夢中だったから善子達

みんなの事に気付かなかった、い…いつの間に居たんだ

「正斗くん久しぶりだね!」

「あぁー、久しぶり!元氣してた?」

マルちゃんのクラスメイト達とは内浦で小学校からの付き合いで
懐かしい

いつの間にか、俺の周りは女子だらけになった

こ、これが世に言うハーレム

「正斗くん！そうすぐ卒業式始まるぞら…行くぞらよ」

顔が少し怒っているマルちゃんに

無理矢理腕を引っ張られて

連れて行かれた

「ま、マルちゃん…もう大丈夫だから」

「正斗くんはモテモテずらね…みんなに言われてさ」

マルちゃんは俺の顔を一切見ずに話す

やばい…怒っちゃってるな

「俺はマルちゃんと話してる時が一番楽しいよ…」

「ほんとに？」

「本当だよ…マルちゃんが一番だよ」

「…正斗くんはズルいぞら」

俺はにつこり笑い

マルちゃんに言ってあげた

ボソツとマルちゃんが何か言ったような気がするが

気のせいだろう

俺とマルちゃんです卒業式がある体育館に行き

俺は卒業式の入口から卒業式を見守っている事にした

そして卒業式が始まった

〜卒業式終了〜

卒業式が終わり

学校に残る者、帰る者、遊びに行く者と

各々のやりたい事をしている

俺はマルちゃんに飲み物を買っていくと伝えて

歩いていたら先程まで居た、中庭に

ルビイちゃんとダイヤさんが居た

「……………」

静かだ

きつと、卒業式が終わって寂しいのだろうか

いつも明るく仲がいい感じには見えない

「ルビイなら大丈夫ですわ…」

「きつと……私が居なくなつて、気持ちを伝えられますわ」
「……うん」

少し離れた距離だから何を話しているのか
分からないでも……ダイヤさんは優しく微笑んで

ルビイちゃんを撫でている

「花丸さんにも負けたらダメですよ？ルビイはルビイなりの魅力を教
えてあげなさい……」

「うん……うん」

ルビイちゃんは段々大粒の涙を流し始めた

ダイヤさんは優しく抱き締めた

これ以上は見たら野暮だよな

俺はゆつくり気付かれないようにマルちゃんの所に戻つた

「お姉ちゃん……お姉ちゃん」

「ルビイ……大好きだよ、頑張つてね」

「ええ……私も大好きですわ、ルビイ」

ルビイちゃんの泣き声が静かな学校に響き渡つた

まるで学校が泣いているようだ

終わりじゃない

ここから生まれた始まりの始まりだ

また新しい物語が

俺やマルちゃんを待っているだろう

さようなら、ダイヤさん、果南さん

鞠莉さん

さよなら……浦の星女学院

そしてありがとう

第1部く完く

第2部

文学少女、新しい学校に行く

「正斗くん、起きるぞら〜」

「うう…もうちよつと」

「ダメぞら！今日から学校ぞらよ」

寝ている俺に体を揺らして起こしてくる

マルちゃん、そう今日からマルちゃん達は俺が通っている学校に登校するのだ

俺はゆつくり起きて、一緒に階段を降りて

朝ごはんを食べる

「マルちゃん、新しい制服似合ってるね」

「へへ、ありがと…嬉しいぞら」

マルちゃんも俺達が着ている制服に変わり

いつも見ていた、浦女の制服じゃなくなったのが少し寂しい

朝ごはんも食べ終わり

学校行く準備をして、そろそろ行く事にする

「二人とも、気を付けて行ってらっしゃい」

「うん、行ってくるよ」

「行ってくるぞら〜！」

小学校以来、一緒の学校には行けなかったな

まさか、高校で一緒の学校に行ける日が来るとは

すげー嬉しいな…

なんて、内心喜んでいるが

マルちゃん自身はどうなんだろうと気になる

俺はチラツとマルちゃんを見てみた

「昔を思い出すね…こうやって一緒に歩いてると」

「オラ…凄く嬉しいぞら」

俺の気持ちに気付いてか知らずか

嬉しそうに話をしてくれるマルちゃん

良かった、一緒の気持ちなんだな

そんな話をしながらあつとゆう間に駅に着いて

沼津まで電車で向かう

内浦とはいえ、朝はやはり人は多い

俺はマルちゃんを扉の方にやり

仲良く話す

1年生の時は1人で毎日通っていたが

マルちゃんと一緒だとこんなにも楽しいんだな

沼津に着いたら

駅に降りて改札を出たら

善子が待っていた

「善子ちゃん、おはようずらく」

「おはよ、善子」

「ヨハネよ!!あとおはよ」

挨拶といつものやり取りをしてから

3人で学校まで向かう事にした

そして、学校に着いた

「じゃあ、俺は先に行ってるから」

「多分、浦女のみんなは集まっている所があるだろうし」

「え、ええ…」

「ま、正斗くん…またね」

いざっ学校に着いて

たくさんの人が集まる学校だ

浦の星女学院って比較的に少ない所から来た

マルちゃん達には緊張するだろうな

少し心配するが大丈夫だろう

俺は自分がどこのクラスになるのだろうかと気になった

クラス発表が飾られている所に行った

「あつ、木田！お前…俺と一緒のA組だとさ」

「えっ、マジか…一緒なんだな」

野球部が一緒の友達にクラスを教えてもらい

一緒にクラスになれた事を嬉しくなった
仲がいい奴とクラスが一緒になるのは嬉しい

「なあ…浦の星女学院の皆さんはどこに行くんだろうな…」

「あぁーどうなんだろうな…」

「俺は花丸ちゃんが来てくれたら、感動しちゃうなー」

マルちゃんが同じクラスか…

そんなの俺だって思っている

マルちゃんと同じクラスで同じ勉強をし

隣の席だったら嬉しいな

など考えながら

体育館で長い校長先生の話を聞いたり

今年からやってきた浦の星女学院からの挨拶

代表は千歌ちゃんがやっていた

なんでも一番似合ってるからだそうだ

話も終わり、各々のクラスに行き

新しいクラスメイト、新しい先生と仲良くなろうと

している中

俺は自分の席に座り、窓側の席ってゆう

最高の所を喜んでいた

しばらくするとクラスの先生がやってきて

「えーと、いきなりだけど」

「みんなも知ってるように浦の星女学院の生徒さん達がウチの学校に
来ている、ウチのクラスに3人ぐらい入る事になった…入りなさ
い」

はいと明らかに緊張している返事をし

中に入ってきた3人に俺は驚いた

「えーと、浦の星女学院から来ました、お…じゃなくて私は国木田花
丸です」

「津島善子…」

「く、黒澤ルビィ…です」

赤髪ツインテールと新しいAqours

「ねえねえ、君達ってAqoursの子達だよね！」

今日は学校は午前中に終わり

クラスの女子全員はマルちゃん達、3人に話し掛けている
凄い状況だ

男子は男子で誰が好みかって話になっている

「俺、花丸ちゃんかな…」

「ほら……背は小さいけど胸はある……」

「……………」

俺の隣の男子2人がマルちゃんの話をしている

こいつ……マルちゃんの身体が目当てだと……

「なんか急に悪寒が……」

「えっ？大丈夫かよ……」

俺が近くにいるのに

マルちゃんの事を話すからだ

マルちゃんは誰にも渡さない

もみくちやにされる前に3人を助けるか……

「ごめん、俺……3人を案内しないとダメだからさ」

俺は女子達に話して

案内したいと伝えて3人を無事に連れ出す

「ふう……助かったすら」

「さ、流石都会のリア充達……半端なかったわ」

「うゆ……ルビィ疲れちゃった」

3人は質問攻めに疲れたのかふらふらしている

俺は3人をグラウンドに連れて、野球部に連れてきた

「ここは正斗くんの野球部すら」

「ここなら顔なじみが多いから落ち着けるだろー?」

「あつ、花丸ちゃん達だー!」

マルちゃん達は俺の野球の試合をよく見に来るので
野球部の全員が知っている

スクールアイドルが応援してくれるとだけで
全員がやる気を出す

まさに勝利の女神達だ

「今年から花丸ちゃん達がうちの学校に来てくれて嬉しいよ…勝利の女神達がこんな近くに居るんだから」

「なあ、新キャプテン」

「ま、まあ……」

「えっ？正斗……野球部のキャプテンなの？」

同級生の部員が俺を見て新キャプテンと言ってくる

そう、今年の新キャプテンは俺なのだ

まあ正直俺に務まるのか分からないけど

頑張るさ

3人の中で善子だけがびっくりしている

お前には言ってなかったな

「そーいや、善子には言ってなかったな」

「なんでよっ!!」

「そーいや、3年生が居なくなっちゃったけど」

「Aqoursは続けるの？」

3年生の先輩がAqoursの事を聞いてきた

ルビィちゃんが先輩にこう言った

「もちろん続けます!」

「それがお姉ちゃん達と約束した事ですから!」

ダイヤさん達とAqoursを続ける事

それが約束した事

周りはもちろん嬉しそうにしていた

よし、俺達も頑張らないとな

「よーし!俺達も頑張るぞー!」

「今年からマルちゃん達が居るからな!!尚更頑張るぞ」

キャプテンの俺が大きな声でそう言う

部員全員がやる気を出した

今日は軽い練習だけを

早めに切り上げた

マルちゃん達も俺達の練習を見学し

一緒に帰った

駅で電車を待っていたら

野球部のマネージャーの谷崎百瀬がやってきた

「あつ…正斗お疲れ」

「おう、お疲れ」

「ん？この子達は？」

「ああー今日からウチの学校に来た、俺の幼なじみだよ」

百瀬にマルちゃん達を紹介した

マルちゃん達は軽く頭を下げて

自己紹介した

「谷崎百瀬です！よろしくね」

「花丸ちゃん…」

この出会いがまさかあんな事になるとは

この時の俺は考えてもいなかった

谷崎百瀬

「よろしくず……じゃなくてよろしくね」

「うん！」

百瀬とマルちゃんが握手を交わした

良かった、百瀬も良い奴だからな

百瀬とは中学の頃からの友達で

高校もたまたま一緒に受験する事がわかり

高校も一緒になった

中学の野球部のマネージャーをやってくれて、高校でもやってくれて有難い

「俺、ちよつとトイレ行つてくるよ……」

電車が来る時間を見て

まだ余裕があるとわかり

俺はトイレに行こうと思った

「はい」

「分かったずらく」

俺はみんなに行く事を伝えて

手を振って、向かった

「ちつ……正斗が居ないのに、いつまでも繋がらないでよ、田舎者」

「えっ……」

「正斗の幼なじみだからどんな子なのか気になって見に来たら……まさかこんな子だったなんてね」

「た、谷崎さん……どうしたの？」

「何？正斗が居ないのに……愛想良くしても仕方ないじゃない」

ふう〜

トイレから出てきた俺は

みんなが居る所に戻った

そしたら、百瀬以外の二人がびっくりした表情のまま
動かない

ん？どうしたんだよ

みんな

「木田くん…もしかしてしら」やだ〜!!黒澤さん、お腹痛いの？大変ト
イレ行かないと〜!!!」

ルビイちゃんが俺に何かを言おうとしたが

百瀬が口を塞いでトイレに連れ込んだ

な、なんなんだ…

数分後に再び帰ってきた二人とも

ようやく電車がやってきたので

一緒に乗り

先に百瀬が降りて

内浦まで帰ってきた

「ふう〜、疲れたな…帰ろうか」

「う、うん」

さつきからマルちゃんの元気がない

そうか…初めての学校だから疲れたんだな

きつとそうだ

今日は早く休もう

〜翌日〜

「おっはよ〜正斗!」

「おはよ、百瀬」

「おはよう、国木田さん」

「お、おはよ…」

学校の校門近くを歩いていたら

百瀬がやってきた

相も変わらず、マルちゃんは元気ない

気になるな…

学校の中に入り靴を履き替えて階段を上る

自分達のクラスに入り百瀬とは違うクラスなので別れた

「あの谷崎さんって人…なんだか怪しいわね」

「えっ？なんでそう思うんだよ…善子」

「うーん…上手くは言えないけど、裏がありそうな感じ？」

百瀬に裏かゝ

まあ善子のいつもの厨二病のあれだろうな…

俺は自分の席に座り、準備をする

授業が終え

皆、部活活動に勤しむ

Aqoursのみんなは学校の屋上で練習をするらしく

たまに上を見ると、マルちゃん達が見える

あつ、マルちゃんらしき人がこつちを見てるな

俺はマルちゃんに手を振ってみる

マルちゃんも気付いてくれたらしく

手を振ってくれている

「どこ見てるの？正斗…」

「ん？…あそこにマルちゃん達居たからさ」

「ふうくん…」

「ほら！キャプテンなんだからしつかりみんなを見なきゃ」

百瀬に言われて、俺は部員の見事にした

「……………べー」

「……………」

部活が終わり

校門で待つてくれているマルちゃん達と合流して

帰る事にした

「さあ、帰るか」

「あつ…………お、オラ本屋に用事思い出したから、先に帰っていいよ」
明らかにわざとらしく

マルちゃんが先に行ってしまった

「ほら、行きなさいよ……あんたが行くから意味があるんだから」
「行ってあげて、木田くん」

俺は善子やルビィちゃんに言われた通り

マルちゃんを追いかける事にした

最近、マルちゃんは元気なかった

どうしたんだよ……マルちゃん

涙の理由

「マルちゃん!!待ってよー!」

俺は走るマルちゃんを追い掛けている

昨日から様子がおかしかった

いつもはたくさん食べるご飯を食べなかった

いつも可愛らしい笑顔を見せてくれるのに見せてくれなかった…

元気で優しいマルちゃんが居なかった

なんで…マルちゃん

「マルちゃんー!やつと…捕まえた」

「離してほしいぞら…」

俺はようやくマルちゃんに追い付いて

手を強く握って離さないようにした

それでも振り払おうとするマルちゃん

俺の顔を一切見ない

こんなのマルちゃんじゃないよ…

「マルちゃん、昨日からどうしたの?」

「なんでもないぞら…離してよ…」

下を向いたままのマルちゃんの下から

何かぽたぽたと落ちている

体を震わせている、泣いている?

「マルちゃん…何かあったのか話して」
「うっさい!!!」

俺はマルちゃんの顔を無理矢理上げて

見たら、大粒の涙を流していた

その時にマルちゃんは今まで聞いた事がないぐらい

大きな声で俺に怒り

俺はびっくりしてその瞬間にまたマルちゃんは逃げてしまった

「あらら〜?2人とも喧嘩しちゃったの…?」

「百瀬……何か知ってるのか？」

「私は何も知らないよ…？国木田さんが機嫌悪いだけじゃないの？」

「マルちゃんは機嫌が悪いだけであんな事しない!!」

「お前と知り合ってからだよな…何か知らないか？」

「たまたま通りかかった百瀬が俺に近付いてきた」

百瀬なら何か知らないのか

彼女と知り合ってからマルちゃんがおかしい

しかし、百瀬自体は話してくれそうにないか…

「知らないよ……私はただ」

「このままだったら…正斗が離れちゃうよって話したただだよ」

百瀬は普段から変わらない笑顔で

俺に言った

何を言ってるんだ…俺がマルちゃんから離れる訳ないだろう

俺は……マルちゃんの事が

「どこ行くの…？」

「私より国木田さんを選ぶの？」

マルちゃんを追いかけようとするとした

俺の制服の袖を掴む百瀬

俺は百瀬が掴んでいる袖を離して

黙ってマルちゃんを追い掛けた

「……………ちっ」

俺はマルちゃんを流したが

どこにも居ない

しばらくしてから善子からのLINEで

既に帰っていて家に居ると来ていた

えっ!?家なのか

良かった……

俺は既に家に居ると言う事に安心した

マルちゃんに何かあったら、俺は…

いやだ

俺も内浦に帰ってきて

そのまま、マルちゃんの家に戻ってきた

「えっ？会いたくない？」

「ええ…マルちゃん、自分の部屋から出てこなくて…」

「喧嘩でもしちゃったのかい？」

マルちゃんのおばあちゃんに会いたいと伝えたら

マルちゃんが拒否をしていると言われた

おばあちゃんも心配そうだ…無理矢理でも行くか

「ごめん…喧嘩しちゃってさ」

「今から謝りに行くからいいよね」

「早く仲直りしてね？」

俺は家へ上がり

マルちゃんが居る部屋まで行く

部屋にはプレートがあり

マルちゃんの部屋と書かれている

俺はノックをした

「マルちゃん…俺、正斗」

当然、返事がない

どうしても俺は知りたい

マルちゃんが元気ないのはやだ…

「昨日から元気ないのさ…」

「百瀬に何か言われたの？」

「なんにもないすら…谷崎さんは悪くないすら」

部屋の中からマルちゃんの声が聞こえた

良かった…返事が聞けた

「じゃあ、なんで…？」

「オラが…オラが田舎者だから」

「変な訛りもするし…女の子なのにオラって言っちゃうし、そんなマルと一緒に居たら、正斗くんまで田舎者扱いされちゃうすら…そんなのいやすら」

だんだん、声が鼻声になっている

泣いているのか…そんな事

俺はそんな事……

俺は思い切りマルちゃんのドアを開けて
少し壊してしまった

あとで修理代だそう

「ずらっ!?ま……正斗くん」

「バカ!!俺はそんな事は気にしない!もし周りの奴らがそんな事を言うなら俺が言っただけあげる!」

「マルちゃんは世界で1番可愛い!って……俺は、そんなマルちゃんだから一緒に居たんだよ、これからもずっと」

俺はマルちゃんをゆっくり抱き締めた

周りの奴らがバカにしても

俺だけは絶対に離れない

俺がそんなの許さない

マルちゃんは…世界で1番だよ

「ほんとに?ほんとに離れないずらか?」

「沼津には色んな可愛い女の子居るずらよ?それなのにマルちゃんと一緒に居てくれるずら?」

「当たり前だよ!俺はマルちゃんが1番だよ」

「ふふ……ありがとう」

ようやく見れた

彼女の笑顔は

これまで見た中で1番可愛らしかった…

優しいクラスメイト

「おはよー」

朝、学校に登校し

クラスの中に入った

俺は自分の席に座ると

友達2人が俺の傍にやってきた

「正斗お前！花丸ちゃんを泣かしたって本当か!!」

「俺、見たぞ、泣いて走った花丸ちゃんをお前が追い掛けるのを」

「ちよっ、なんだよそれ!」

昨日のやり取りを見られていたのか

まずい…俺が本当にマルちゃんを泣かしたみたいになる

「えー!木田くん酷い…国木田さん、可愛らしいのに泣かせるなんて!」

「木田くんがそんな人だったなんて」

「えっ……ま、マルが可愛い?」

俺達のやり取りを見ていた女子が近付いて

マルちゃんの肩に手を置いて

俺を見て、怒っている

自分が可愛いと言われてびっくりしているマルちゃん

「うん!国木田さんは可愛いよ?実は私、Aqoursのライブとか見に行ったり、ネットで動画とか見てたんだよ?」

「私も!津島さんとか黒澤さんとか見てたよ!」

「ま、マル……すぐオラとか、ずらって言っちゃうよ?それでも?」

「ふふ…大丈夫だよ?国木田さんはそこが可愛いと思うよ……私凄く嬉しかったんだ、あのAqoursがウチの学校に来てくれるんだって」

「…うう…ひっ……っ」

二人はマルちゃんや善子達にそう言った

クラスの全員が頷いていた

マルちゃんは嬉しかったのか、涙を流していた

「く、国木田さん!?!ご…ごめんね?なんか変な事言ったかな?」

「違うぞら…オラ、嬉しくて…凄く不安だったから」

「昨日…正斗くんにも励ましてもらって、今日…みんなにそう言っ
てもらえるなんて思ってた」

涙を流す、マルちゃんにびっくりして

慌てていたがマルちゃんが自分で涙を拭いて

この涙は嬉し涙で昨日の事も違うと言ってくれた

「だから言っただろう?マルちゃんは可愛いつてさ…」

「へへ…正斗くんが言ってた通りぞら」

俺は優しくマルちゃんの頭を撫でて

涙を優しく拭いてあげた

「コラー!イチヤイチヤすんじやないよ!嫌味が正斗!」

「国木田さんを取らないでよ!木田くん!!」

俺とマルちゃんのやり取りを見た

クラス全員が、俺をマルちゃんから離して

男子全員が俺を袋叩きしにきた

女子はマルちゃんを抱き締めて優しくしていた

な、なんで俺だけ…

「……………」

クラスの中を誰かが見てたような気がした

百瀬に似ていたような…

まあいつか

くお昼時間く

マルちゃん達はクラスの女子とお昼を食べる事が決まり

俺は1人で屋上にて弁当を食べる

母とマルちゃんが作ってくれた弁当

美味しい

「だ〜れだ!」

「百瀬…」

「へへー当たり」

急に視界が暗くなり

声が聞こえてすぐに分かった

百瀬は俺の前に来て笑っていた

「百瀬……お前がマルちゃんに変な事を言っただんな」

「……変な事じゃないよ、事実だよ」

「なんで、マルちゃんにあんな事言っただんな……マルちゃんは何もしてないだろう」

「あるよ……私は正斗が好きなの」

「だから国木田さんが邪魔なの……正斗の目には私が映っていない、映っているのは国木田さんだから……その瞳に私しか映さないようにしようとしているだけ」

俺が百瀬に聞いたら

百瀬は表情を変えず、ゆっくり近付いて

両手で俺の頬を触り

じいと俺を見た

百瀬は俺が好き……

だからって……マルちゃんを泣かせるなよ

「百瀬の気持ちは分かった……でも」

「だからってマルちゃんを泣かせるなよ」

「……ふふ、怒った正斗もカッコイイな」

「まだ私は諦めないよ……まだ邪魔な奴が居るしね、またね」

百瀬を睨むように見た俺に

百瀬は微笑んでいた

また俺に近付いて、俺の頬にキスをして

屋上をあとにした

俺は……百瀬には仲良くしてほしいだけなのに

俺はキスされた頬を触り

ゆっくり青空を見上げた

公表

あれから、百瀬からの絡みがない
怖いぐらいに

ウチの野球部にも後輩が入部してきた
やはり、あのA q o u r sのメンバーがこの学校に入ると噂があっ
たように

入学を希望した人がたくさん居るらしい

「あの〜」

「ん?どうした?」

部活が終わり、後片付けをしている時に

後輩の1人が話しかけて来た

「木田先輩は花丸ちゃんと幼馴染みなんですか?」

「……………」

「えっ?せ…先輩?」

「いや…どうしてそう思うんだ?」

「実は…フアンの中に国木田花丸ちゃんには野球部のリア充幼馴染み
が居るってプチ炎上してて」

フアンの中にそんな事が!?

ま、まあ…A q o u r sのライブにも毎回参加してたし

でもそんな事が…………

「なるほど…………でなんで俺って思ったんだ?」

「はい…………花丸ちゃんと写る先輩が写っていて」

俺は後輩のスマホ画面から写真を確認した

間違いない…俺だ

てか、いつの間に撮られたんだ!?

怖いな

「ちなみに花丸ちゃんを泣かしたって写真もあります…」

ぎやああああ!!あの時も撮られていたのかよ

ネット怖い

「は、ははは…………マジかよ」

「あつー！正斗くん居た!!」

俺が内心恐怖に怯えていると

千歌ちゃんの声が聞こえた

振り向けばAqoursメンバー全員が集まっ
ていて

なんとなく、察した

「あの……非情に申し上げにくんだけど」

「大丈夫です……しばらくの間、マルちゃんと一緒に歩かない方が
良い
んでしよう」

梨子さんが言いくそうに言っているが

俺は死んだ魚のような目で空を見上げて

了承した

「本当にごめんね！まさか、こんな事になるなんて」

曜ちゃんも謝っていた

マルちゃんはどうしたんだろうとチラッとマルちゃんを見た

「……」

「仕方ないわよ……あんな書き込み気にする事ないわ」

下を向いて、元気がない

善子やルビイが励ましている

「書き込み？……なんか書かれたのか？」

「じ、実は……Aqoursの動画に今回の木田さんと花丸ちゃんの
事を悪く書いてるのが目立ってて」

善子の発言に気になった部分もあり

俺は聞いてみたら

ルビイちゃんが言いくそうに

Aqoursの動画に書かれているコメントを見せてくれた

ビッチ丸とか男が居るのかよ

とか、そりゃ好き勝手に書かれている

「……………ごめんマルちゃん」

「俺がちゃんとマルちゃんの事を考えていたら」

「そ、そんな事ないよ…正斗くんは悪くないぞら」

「ねえ…このまま公表したらどう？」

「国木田花丸には男の幼馴染みが居るって」

全員が黙ってしまつて

沈黙があり、その沈黙を破つたのは

善子の発言

えっ？公表

「公表つて…何をしたら良いんだよ」

「ちよつと、危険だけど、生放送したらいいんじゃない？」

「Aqoursの動画サイトから」

善子は普段、Aqoursの動画が使っている

ビデオカメラを持って話す

そして、俺とAqoursのメンバーは

生放送の準備し

いよいよ生放送が始まる

「わかつてくれるかな…みんな」

「大丈夫だよ…俺もAqoursのみんなも居るよ」

「始めるわよ！」

〜数日後〜

「何を讀んでるの？マルちゃん」

「あつ正斗くん…オラと正斗くんの事を書いてくれたファンレターがあつたから讀んでいたぞら」

生放送で俺の事を公表し

あつとゆう間に有名人になつてしまつた

俺

たまにAqoursのファンレターに俺のも入っている

たまに俺の花丸ちゃんをよくも

み
たい
な
内
容
が
あ
る
が
ま
あ
：
結
果
オ
ー
ラ
イ
だ

蘇るトラウマ

「はは…そうなんだ…」

朝、学校に着いた俺達は

学校の下駄箱から自分の上履きを出して履き替えた

ルビイちゃんはじいと固まって動かない

どうしたんだろう？

「ルビイちゃん？」

「っ!?!…なんでもないよ！さあ行こうよ」

俺の声にビクツとなり

慌てたように上履きを履いて

教室に向かった

どうしたんだろう…

「…はあ……はあ」

「なんで……こんなのが」

今日1日

ルビイちゃんが俺やマルちゃん達を避けるようにどこかに行く

下駄箱に何かを見付けてからだよな

何かあったんだらうか…

「ルビイちゃん…」

「き、木田くん…」

放課後、また急ぐようにどこかに行こうとする

ルビイちゃんに俺は先回りをし

ルビイちゃんを止めた

やっぱりどこかおかしい

「る、ルビイ…早くトイレに行きたいんだ、木田くんそこをどいてくれ
たら嬉しいな…」

「…ルビイちゃん、何か隠してない？」

「今朝の下駄箱からずつと…」

「わ、わかんないよ…ルビイなんの事かさっぱり」

いつもより、俺の顔を見ないルビイちゃん

それに目が泳いでいるし

何か隠してる…

「ごめんなさい…本当になんにもないから!!」

ルビイちゃんが俺を押し退けて

教室から出て行こうとした

その時にカバンから手紙が落ちた

ん?なんだこれ…

「っ?!木田くん…見ちゃダメ!!!」

手紙の中身を見たら

まだダイヤさんが居た時

ルビイちゃんの過去を聞いた…

ルビイちゃんが男性恐怖症になってしまった原因

男性からの強姦事件

手紙の中には昔の新聞が貼られているだけ

なんだ…これ

ルビイちゃんは慌てて、俺の手から手紙を奪い

急いでどこかに行ってしまった

俺は慌ててルビイちゃんを追い掛けた

「はあ…はあ…おえっ」

ルビイちゃんは公園に居た

公園の給湯器で吐いていた

俺はゆっくり近づこうとすると

「来ないでっ!!!!せっかく…忘れかけていたのに、なんで…なんで」

ルビイちゃんは自分の身体を両手で抱き締めるようにし

震えていた

ルビイちゃんのトラウマ

「酷いよ……あんまりだよ」

大粒の涙を流して

この手紙を出した、犯人に言っている

ルビイちゃんを黙って見る事しか俺には出来ない

何も出来ない自分が憎いそして

犯人を絶対に許さない

こんなの、人間がやる事じゃない……

「まさか、正斗も居るとは……想定外だけどまあいつか」

公園の奥から聞き覚えのある声が聞こえた

百瀬だ……

まさか、お前が

「谷崎さん……なんで」

「ふふ……手紙を出した犯人知りたんだよよね？」

「それ私なんだよ？しかし……びつくりしたわ、まさか現役スクールアイドルが昔男にレイ「やめろ!!!」百瀬……お前、自分が何をしているのかわかってるのか」

百瀬が最後まで喋ろうとしたが俺が怒鳴って

言わせないにした

ルビイちゃんが身体をガタガタと震え始めた

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
……」

「これ以上、酷い事しないでよ……いやあああああああ!!!」

ルビイちゃんがブツブツと謝って

昔の記憶を思い出してしまった

ルビイちゃんは涙を流し暴れ出した

俺は急いで救急車を呼ぶ事にした

百瀬の事は許せないが今はルビイちゃんだ

「ルビイちゃん!!大丈夫だよ!今はそんな人居ないから!!」

「いや!いやああああああ!!男の人怖い!来ないでよ!!ルビイに近付かないで……ルビイで酷い事しないで!!!」

俺だと認識出来ないほどにルビイちゃんは酷い状態だ

どうしたら……ルビイちゃん

「……大丈夫!!俺はルビイちゃんに酷い事しないから、大丈夫だから

……大丈夫」

「……き……だ……くん」

ルビイちゃんに優しく抱き締めた俺

ルビイちゃんはさっきまで暴れていたが

落ちてきてきて気を失った

しばらくしてから救急車が来て

ルビイちゃんは病院に運ばれた

百瀬の想い

「……………」

ルビイちゃんが病院に運ばれて

ルビイちゃんのお母さんやお父さんがやってきた

もちろん、マルちゃんや善子達もやってきた

俺は病院の外に行こうと一旦外に出て

既に暗くなってしまうた空を見上げていた

「まくさと♪」

「百瀬……お前、よく来れたな」

ひよっこりと現れたのは

百瀬だ

悪気なさそうな顔をして俺の顔を見ている

「言ったじゃん、まだ邪魔な奴が居るって」

「でも、まさかあんな過去があったなんてね……正直私もびっくりだよ

……昔のトラウマを思い出して、黒澤ルビイは潰れたわ」

百瀬は淡々と話して

最後になっこり笑った

俺は無言で百瀬の胸ぐらを掴んだ

「はは、正斗が私を見てくれてる……あの国木田でも黒澤でもない」

「私だけを見てくれてる……」

「お前……何がしたいんだよ」

「決まってるよ……正斗を私の物にしたいからよ」

「私は正斗が好きなの、愛してる……それを邪魔するあいつらが憎い
だけだよ」

歪んでいる

正直に俺は思った

こいつはおかしい……

「……正斗くん」

自分の名前を呼ぶ声に振り向くと

そこにはマルちゃんが居た

なんてタイミングだよ

この状況はまずい

「なんで……谷崎さんも居るぞら？」

「ああ、正斗話してなかったんだ……」

「教えてあげるわ……それは黒澤さんを壊したのは私だからよ」

「えっ……」

「黒澤さんにこれを送って、私が思い出させてあげたの……」

「あの時の快感を……」

マルちゃんは自分で持っていたカバンを落とし

しばらく動かなかった、マルちゃんが再び動き出して

百瀬の頬をビンタした

「最低ずら!!ルビイちゃんがあなたに何をしたずら……どんな理由だろうとマルはあなたを許さない!!」

マルちゃんに涙を流して

百瀬を睨んでいた、こんなに怒ってりマルちゃんは初めて見た

「いつてえな……お前さえ居なければ!!!お前さえ……居なかったら」

「私は正斗と付き合えたんだ……私は幸せになれたんだ」

百瀬もマルちゃんにビンタをし

胸ぐらを掴み、怒鳴って

涙を流している

「なんで……なんで」

「正斗はお前を選んだんだよ……正斗の事を想っていたのは私なのに、正斗の事をただの幼馴染みとしか思っていないお前なんか」

胸ぐらを掴んでいた手は

次第に離れて、マルちゃんの顔に涙が流れている

百瀬の気持ち……

俺が近づこうとしたがマルちゃんが喋り始めた

「正斗くんを想ってるなら、なんで真っ向勝負しないぞらか」

「なんでこんな卑怯な事ばかりするぞら……こんな卑怯な事しかない谷崎さんに正斗くんは渡せないぞら、マルは……オラは絶対に許さない」

百瀬はマルちゃんから離れて、急いで

暗闇に消えてしまった

あつ……百瀬の奴、ちやつかり俺がマルちゃんが好きってちくりや
がった

まさか、こんな形でバレるとは…悲しい

「正斗くん…」

「な…何？」

「オラ…幼馴染みとしてそこまで想ってくれてるなんて嬉しかったぞ
らー！」

「正斗くんはマルを守るから任せてね！」

俺はふらつと倒れて

寝てしまった

まあ、そんな落ちだよな…

理亞の気持ち

「まさどくん! まつて〜!」

「まるちゃんはやくはやく〜!」

「ずらっ!?」

「まるちゃん!? だいじょうぶ…?」

あれ? これは小さい頃の俺やマルちゃんだ

なんでこんなの思い出しているんだろう

「うう… いたいずら〜!!!」

「な、なかないで! まるちゃん」

「ぼく、おかあさんからいつもいたくなくなるまほうをかけてもらう

んだ! それをまるちゃんにもしてあげるよ」

「ひっ… いたくなくなるずら…?」

「うん! いたいのでいたいのでとんでいけ〜!!」

「ねっ? いたくないでしょ?」

「うわ〜! ほんとずら! まさどくんすごい」

あれ…?

なんか… どんどん離れていくような…

「と…くん!」

「まさ…くん!!」

誰だ? 俺を呼ぶのは…

まる…ちゃん?

「正斗くん!!」

「んん…マ…ルちゃん」

「良かった… 良かったずら」

段々意識がハッキリしてきた

どうやら、俺は気を失い

病室に居るようだ…

マルちゃんに抱き着かれた

「ま、マルちゃん… 大丈夫だから、離れて」

「あ、うん…ごめんずら」

「まったく…あんたまで倒れないでよね」

「はは、まったくだ…」

マルちゃんも善子にも心配掛けちゃったな

俺が倒れる前の事を頭の中で整理をした

ココ最近、本当に色んな事が起こってるからな…

なんて考えていたら、病室の扉が開いた

「理亞ちゃん!？」

「なんで…理亞が居るのよ」

「今日はたまたま、沼津まで行く用事があって…せっかくだからルビイ達に会おうと思って……」

「そしたら、国木田花丸からルビイが倒れたって連絡きて…」

「理亞ちゃん、すつごく心配そうな顔してたよね〜!」

理亞ちゃんはSaint Snowを解散してから

新しいスクールアイドルを始めたらしい

主にルビイちゃんと仲良く連絡を取り合ってるらしく

俺もルビイちゃんから聞いている

で理亞ちゃんの後ろからひよっこり顔を出している女の子が

理亞ちゃんの新しいスクールアイドルの相方

中宮律華

話には聞いていたけど初めて会うな…

「ちよつと…律華、私そんな顔してないから!」

「あれれ〜? 国木田さんから連絡きてすぐに走って向かった癖に」

「あつ…理亞ちゃんの新しいスクールアイドルのメンバーずら」

「うんそうだよ…私は中宮律華、Aqoursの皆さんの話は理亞ちゃんたくさん聞いてるよ」

律華ちゃんか、明るい子みたいだな

凄く仲良さそうだし、良かったな

理亞ちゃん

なんて、俺が考えていたら理亞ちゃんが近付いてきた

「先に謝るわ…ごめんなさい」

「えっ…？」

理亞ちゃんが先に謝ると言ってから

すぐに俺の頬にビンタをした

何が起こったのか、一瞬分からなかったが

理亞ちゃんの気持ちがなんとなくわかった気がした

「あちゃ…やっちゃったよ」

「り、理亞ちゃん!？」

「あんたのせいよ…ルビイがこんなに傷付いているのは…あんたはルビイがどれだけ自分の気持ちを隠してあんたに接してるのかわかる？」

「あんたや国木田花丸の気持ちを知ってて!!ルビイは気持ちを隠してるの…それなのに、あんたはルビイが苦しんでる時に助けもしない!最低よ!!あんたなんて…!!!」

理亞ちゃんは俺の胸ぐらを掴み

大粒の涙を流し、俺に向かって叫んだ

ルビイちゃんの気持ち？俺やマルちゃんの…？

俺は…ルビイちゃんに何もしてあげられていないのか…

「はあ……………はあ」

「言い過ぎたわ…ごめんなさい、でも私はあんたを許さない、私はルビイの所に行くわ」

「ま、まったね〜」

「…正斗くん…」

俺は周りの音が聞こえなかった

それほどシヨックがデカかった

俺はルビイちゃんの気持ちがわかってるつもりだった

俺がルビイちゃんを苦しませていたのか…

俺は…ルビイちゃんを助けられなかった

告白

夜も遅くなり、マルちゃんは善子の家に泊まり事になり

俺は病院で1日だけ入院する事になった

理亞ちゃん達は泊まるホテルに行つてしまった

俺は理亞ちゃんに言われた言葉を未だに引きずっていた

「はぁ……」

「なんて顔をしてるのですか……」

「……ダイヤさん」

下を向いて、落ち込んでいたら

懐かしい声が聞こえた

病室の扉の前には東京の大学に行つた

ダイヤさんが居た

「マルちゃんの連絡見たんですね……」

「ええ……慌てて電車に乗つて、こんな時間になってしまいましたわ」

「……俺、理亞ちゃんに言われちゃいました」

「ルビィちゃんの気持ちを気付いていない、ルビィちゃんが苦しんでいるのに助けなかった……って」

俺はダイヤさんに理亞ちゃんに言われた事を話していた

自然とダイヤさんに相談していた

昔からダイヤさんには弱音や相談したっけ……

「俺……最低なんですかね」

「確かに……ルビィの姉としては」

「理亞さんの気持ちには共感出来ますわ、正斗さんは少々乙女心のお勉強が必要ですわ」

「うう……」

ダイヤさんの言葉1つ1つがグサグサと刺さる音がした

やっぱり俺は……

「ですが……そんなあなたをルビィは心から信頼しています、男性恐怖症なルビィが唯一話せる殿方……私は正斗さんが最低な人とは思いませんわ」

「理亞さんも、ルビイが倒れたショックでパニックになっただけですわ…」

「そう…：…なんですかね」

ダイヤさんは優しくルビイちゃんにするみたいに

俺の頭を撫でてくれた

たまに見せてくれる優しい笑顔のダイヤさん

俺は好きだな

「これを言ってしまったら、ルビイに怒られてしまいますが…家であなたの名前を呼ぶ練習をしていたんですよルビイは」

「ルビイちゃんが…」

俺が知らないルビイ

そうか…：…そこまで俺の事を

「行きますか…？」

「はい…：…今すぐルビイちゃんに会いたいです」

「…：…ルビイを悲しませたら許しませんからね」

俺はベッドから降りて

病室から出ていき、ルビイちゃんが居る

病室に行った

黒澤ルビイと書かれた病室

ここにルビイちゃんが居る

俺はゆっくりと扉を開けて

中に入った

まだ寝てしまっているルビイちゃん

「ルビイちゃん…：…俺、君が思ってるほど優しい人間じゃないんだ」

「君の気持ちも知らなかった…：…君が苦しい思いをしてたのに気付けなかった」

「今回の事もそうだ…：…怒ったのはマルちゃんであって俺は何もしてない」

「ま…：…とくん」

俺が椅子に座り

眠るルビイちゃんに1人で話した

涙が出てきた、そんな時にルビイちゃんの声が聞こえた

ルビイちゃんの顔を見たら、ゆっくりと目を開けた

「ルビイちゃん……」

「正斗……くん」

「良かった……ほんとに良かった」

「ルビイね……正斗くんと夢見てたんだ」

「正斗くんと買い物に行ったり、正斗くんと映画見たり、正斗くんと色々な所に行った……正斗くんと付き合ってる夢」

「……」

「ルビイね……好きだよ」

「正斗くんの事大好きだよ……」

「……」

「……ごめん、俺はマルちゃんが好きなんだ」

ルビイちゃんの告白を俺は断った

俺はまたルビイちゃんを傷付けてしまったのかな……

「知ってたよ……正斗くんはルビイの事見てくれてないって、確かに苦しかった……辛かった」

「でもね……ルビイの大好きな2人だったから、正斗くんと花丸ちゃん大好きな2人だから心から応援したいと思った……」

「でも……俺は君が思ってるような人じゃあ……」

「そんな事ないよ？ルビイにとって正斗くんは最高に優しくてカッコイイ人だよ……」

「だって……今もこうしてルビイとお話してくれる、ルビイの為に涙を流してくれる」

ルビイは小さな手で

僕の頬を触り、涙を拭いてくれる

ルビイちゃん……ありがとう

「ルビイの為に思うなら……花丸ちゃんを幸せにしてあげて……？」
「もし良かったら……1番最初に教えて？」

「もちろんだよ……1番最初に教える」

「絶対に幸せにする……だから泣かないで」

ルビイちゃんも涙を流していた

俺もルビイちゃんの涙を拭いてあげた

「あれ？おかしいな……ルビイ、悲しくないのに」

「ルビイ……フラれるのわかったのに、なんで……こんなに苦しいの、こんなに悲しいの」

「うう……うわああああ」

ルビイの頭を優しく撫でてあげた

今日だけ、俺はルビイちゃんを優しく抱き締めた

ありがとう、ルビイちゃん

ごめんね……絶対に花丸ちゃんを幸せにするから

君に何かあったら、絶対に助けに行くから

約束の甲子園

あれから数日が経ち

ルビイちゃんも無事に退院出来た

今日は久しぶりの登校だ

「おはよう、ルビイちゃん」

「うんーおはよう正斗くん」

告白してからのルビイちゃんは

なんだかスッキリした顔をしていた

気にしてないかと気になったが

元気そうで良かった…あと俺の事を下の名前で呼ぶようになった

いつも木田くんと呼ばれていたからなんだか寂しい

「ねえ…ルビイの奴、なんだか明るくなったわよね」

「そうだな…」

善子が隣に来て、耳元で言ってきた

マルちゃんや善子には言っていないのか

告白したの…ルビイちゃんっぽいな

俺も俺で頑張らないとな…

いよいよ、俺とマルちゃんの約束を果たす為の季節がやってきた

全国高等学校野球選手権大会、

6月から7月までの大会に勝ち抜いた高校のみが出場出来る

夏の定番、そこで勝ち抜いて甲子園で優勝する

優勝して、マルちゃんに告白するんだ

「ルビイちゃんには、感謝してもし切れないな」

「今年も頑張らないとな！」

「まあ、よく分からないけど…頑張りなさい」

（数日後）

甲子園出場を決める大事な大会

各都道府県一校のみ決まる

負けたら1発でおしまい…

正直怖い、でも俺はやるんだ

俺が連れていくと言ったんだ、やってやるさ

「い、いよいよだな…」

「……よし！今年も甲子園に出場する為に頑張るぞ!!」

毎年思うけど

やっぱり緊張するな…

俺はマルちゃん達が居ないか客席を見渡した

俺の名前を大きく書かれた、旗を振っている

俺の父、母も来ている

俺の家族の近くにマルちゃん達も居た

俺はマルちゃんに手を振った

「あっ！花丸ちゃん見つけー！花丸ちゃん!!」

野球部の友人も見付けて

手を振った、マルちゃんも俺達に気付いて

振ってくれた

あれ？良く見たら

善子もルビイちゃん達も居る

ダイヤさんも居る!?

はは…これはますます、やる気が出てきたよ

〜数時間後〜

「ふう…」

今日から数日掛けて、甲子園出場を目指す

今日はとりあえず勝てた

メンバーの調子も良かった、このまま行けば…

「お疲れ様♪」

「うわっ…!?!な、なんだマルちゃんか」

下を向いて考え事をしていた俺に

冷たい物が急に頬に付けられてびっくりした

俺はパツと見たら、マルちゃんが居た

手にはジュースを持っていた

「ふふ…正斗くん大活躍してたずら」

「ありがと…そりゃそうだよ、約束があるんだから」

「うん…」

マルちゃんは俺の隣に座り

今日の感想を言ってくれた

俺はマルちゃんから貰った缶ジュースを開けて

飲んだ

「よし！明日も試合あるから帰ろうか」

「うん、今日はオラの家でご馳走ずら！」

「へへ、それは嬉しいな」

俺とマルちゃんは立ち上がり

一緒に帰る事にした

晩御飯は家族全員でマルちゃんの家にお邪魔して

ご馳走を食べた

マルちゃんの手料理もあって

美味かったな…

そこからの俺達は

順調に試合に勝っていき

無事に甲子園出場の権利を勝ち取った

文学少女、恋に気付く

正斗くん達、野球部が甲子園出場が決まり
みんなでお祝いをしたずら

正斗くんは本当に嬉しそうでオラまで嬉しくなっちゃうな

オラもオラで新しいA q o u r sでライブ出場を目指さな
きや

今日から新しい曲とダンスのフォーメーションの練習ずら！

屋上でみんなで最初にストレッチをした

オラは千歌ちゃんと組む事にしたずら

1年生の頃からずっと

正斗くんの事を考えたら、モヤモヤしたり

ワクワクしちゃう：誰かと話したら凄く嫌だし

話し掛けてくれたら嬉しくなっちゃう

なんでなんだろう：昔はこんな気持ちなかったのに

オラ：おかしいのかな

「は…まるちゃん！」

「花丸ちゃん!!」

「ずらっ!?!」

気付いたら、千歌ちゃんの顔がすぐ近くにあっただずら

オラは思わず、びっくりしちやって

コケちゃったずら

「だ、大丈夫!?!」

「もう、しっかりしなさいよ、ずら丸」

千歌ちゃんはコケたオラを心配して

すぐに手を差し出してくれた

善子には言い返す言葉もないずら…

「うう…(´▽`)めんなさい」

「あっ！花丸ちゃんに聞きたい事があったんだよね!」

「花丸ちゃんって正斗くんの事好きなの?」

差し出してくれた千歌ちゃんの手をオラは繋いで

オラは立ち上がり
千歌ちゃんが思い出したようにオラを見て
聞いてきた
えっ？オラが……正斗くんを？
好き？……好きって
あの好き？男性と女性が意識しちゃう
あの？……オラ
正斗くんの事……好きなんだ

「っ?!」

オラは自分でもわかつちやうぐらいに顔を真っ赤ずら
そうなんだ…この気持ち、今までの感情は
オラが正斗くんの事が好きだからなんだ
な、なんだか凄く恥ずかしい……
何故か、千歌ちゃんが
善子ちゃん達から怒られているけど、なんでだろう
あつ……でも

マルが好きだけで正斗くんは他の子が好きなんじゃあ……
「……………」

「あれ？花丸ちゃん、急に悲しそうな顔になっちゃった…」
そこからのオラはそれが気になって
練習が見に入らなかつたずら…

く練習終わりく

「あつ、マルちゃん！」

「正斗く……っ!!」

練習終わり、帰ろうとしたら
後ろから正斗くんの声が聞こえた
オラは嬉しかったけど、さっきの
他の子が好きかもってモヤモヤした気持ちが出てきて
正斗くんを無視して走って帰ってしまった
ごめんね、正斗くん…ごめんなさい

次の日も、その次の日も

オラは練習はミスをし

正斗くんを無視し続けてしまった

マル、悪い子だ：本当なのか確認したら良いのに
逃げ続けて、練習もちやんと出来ない

1人、自分の教室の椅子に座り
外を見ていたずら

「花丸ちゃん…」

「ルビイちゃん…」

オラを呼ぶ親しみある声の方を向いたら

ルビイちゃんが居たずら

ルビイちゃんはとても優しい笑顔でオラを見て

オラの前の椅子に座った

「花丸ちゃん…どうしたの？最近元気無いね」

「う、うん…：実はオラ凄く不安なんだ」

「不安？」

ルビイちゃんに聞かれて

オラは自分の気持ちを言った

「正斗くんね…：マルが好きだからだけで正斗くんは他の子が好きなん
じゃないかな…：って、不安なんだ」

「えっ?」

「ほら、マル…：地味だしすぐ方言言っちゃうし…：ルビイちゃんみたい
に可愛くてオシヤレじゃないし、善子ちゃんみたいに綺麗じゃない
し…：だからお、ずらっ!」

オラが下を向いて、正斗くんの事を話していたら

オラのデコに痛みが走ったずら

びっくりしてデコを触って

前を向いたらルビイちゃんがデコピンのポーズしていた

「バカだよ花丸ちゃん!!花丸ちゃんは凄く可愛いよルビイや善子ちや
んから見てもね」

「ルビィね……好きな人居たんだ、凄く好きな人……その人は好きな女の子が居て、ルビィの事は友達としか見てくれなかった……その女の子もその人が好きだった、両想いでルビィが入る隙間なんてなかった……でもルビィは2人が大好きなんだ、大好きな2人が付き合ったらルビィ凄く幸せだよ」

ルビィちゃんの瞳に涙が流れていた

大粒の涙……ルビィちゃんが好きな人って

まさか……

「ルビィちゃん……それってま「だから！花丸ちゃんは自分の気持ちに嘘を付かないで……素直になって良いんだよ……」

「大丈夫……正斗くんは花丸ちゃんを受け入れてくれる、正斗くんの隣に居れるのは花丸ちゃんしか居ないよ……」

ルビィちゃんがマルの両頬を触り

優しく微笑み、抱き締めてくれた

落ち着く、ルビィちゃんの優しさに

ルビィちゃんの温もりに

「ルビィちゃん……オラ、正斗くんの所に行ってくるぞら」

「うん、頑張ルビィだよー」

オラは椅子から立ち上がり

ルビィちゃんに正斗くんの所に行くと言えた

ルビィちゃんの気持ち、オラは忘れないよ

マルは宇宙で1番良い友達を持ったぞら

「正斗くーん!!!」

「えっ……ま、マルちゃん」

校門の前で帰ろうとしていた正斗くん

オラは大きな声で正斗くんを呼ぶ

正斗くんはびっくりした顔をしたけど

急いでオラの所に来てくれた

「あの……今までごめんね！無視とかしちゃって」

「いや、大丈夫だよ……マルちゃんも何かあったんだよね」

「それで…正斗くんに伝えたい事があるんだ！凄く大事な事…今すぐ言いたいけど、せつかくだからマルと約束した甲子園で優勝したら教えるぞら！」

「お、俺も！甲子園で優勝したらマルちゃんに伝えたい事があるんだ…大事な事を」

「じゃあ、それも約束すらね♪」

オラと正斗くんはお互いに伝えたい事を言っ

甲子園で優勝したらお互いに伝えると約束したずら

あの時と同じように指切りげんまんをした

オラと正斗くんの約束が守れますように…

百瀬の過去

「ホームランずらく!!!」

全国高等学校野球選手権大会

ここで有名になれば

プロの世界で活躍出来るかもしれない

夢のある大会だ

俺は今、幼馴染みとの約束を果たす為に優勝を目指す

もう二度と彼女を泣かさない

ただそれだけだ!!

順調に試合を勝ち進む

準決勝まで勝ち進めた

「お疲れ様、正斗くん」

「ありがと、マルちゃん…」

季節は夏

めちゃくちゃ暑い、水分補給をすぐしないと

熱中症とかで倒れてしまいそうだ

俺はマルちゃんから貰った、スポーツドリンクを飲む

「客席から見てたずら…凄かった」

「うん、みんな凄いよ…流石勝利の女神様達が居るだけあるよ」

「ふふ…みんなが頑張ってるからだよ」

「明日も頑張ってるね? 正斗くん」

マルちゃんは笑顔で笑って

エールをくれた

よし、あともうちよつとだ! 気を許さずに頑張るぞ!!

〜準決勝〜

「キャプテン木田正斗くん率いる沼津高校、決勝戦進出!!!」

「やったね花丸ちゃん!!」

「うん…うん…」

試合は少々危なかったけど

みんなが頑張ってくれたおかげで
決勝まで行けた

あと1つだ！あと1つで

約束が果たせるよ

マルちゃん

俺は客席に居る、マルちゃんを見付けて

笑顔でピースした

マルちゃんも少し涙目になっていたが

ピースしてくれた

「……………いよいよだ」

君に告白する

そして幸せにしてみせる！

〜試合終了後〜

「ちよつと、話があるんだけど」

「百瀬…」

試合が終わり

みんなが晩御飯を食べ終わってから、帰ろうと準備をしていたら

百瀬が話し掛けてきた

あの日以来、話し掛けて来なかった百瀬

久しぶりだな…

俺は頷いて

百瀬に付いていく事にした

「ここなら良いかな…」

「百瀬…………お前、よく俺を呼べたな…俺はお前を「知ってるわよ…あんな事して許して下さいなんて流石に言わないわ…私がした事は許されない事なんだもん」

少し離れた所に公園があり

そこで話す事にした

「覚えてる？私と正斗が初めて会った時の事…」

「ああー中学生の時だったな…お前が不良って呼ばれていた時代な」

懐かしいな

俺と百瀬の出会い…たまたま俺が体育館裏に来てた時だ

〜中学時代〜

「はあームカつく…あいつ」

「谷崎さんだよな…？ダメだろう、中学生がタバコなんて」

「はあー？お前誰？私に気軽に話し掛けないでよ、気持ち悪い」

体育館裏に煙が見えたので覗いたら

同じクラスだった百瀬が居た、当時の百瀬は

不良少女で沼津一危ない奴だと、有名だった

周りからは関わるなと言われたけど

関わってしまったのだ

「俺はお前と同じクラスの木田正斗だ…クラスメイトがタバコを吸っていたら止めたくなるだろう」

「どんだけ、悪い奴だか知らないけど…女の子なんだからさ」

「…変な奴」

それが百瀬との初めての会話

そこから俺は百瀬に話し掛けたりした

まあ、百瀬本人はすげー嫌がっていたけど

ある日、俺と百瀬がある程度仲良くなった時だ

「なあ…木田」

「ん？なんだよ…」

「なんで…私に話し掛けるんだよ、私と一緒に居たら木田まで危ない噂が」

「そんなの関係ないよ…周りがどう思うが、俺はお前と仲良くしたいんだよ…それだけだ」

ある日

世間は夏休み

俺は沼津で買い物をして

夜になったので帰ろうとしていたら

百瀬に似た奴がおじさんと一緒にホテルに入ろうとしていた

おいおい…マジか

「谷崎!!」

「っ……………木田」

「お前……誰だよ、その人…どこに入ろうとしているんだよ」

「ああく？なんだお前……今から百瀬ちゃん百瀬ちゃんは百瀬ちゃんママみたいに身体を売るんだよ！たくさん売ってどこか分からない男の遺伝子を持った子供が出来るまでな!!」

百瀬は自分の過去を話したからない

あんまり、しつこく言うのも可哀想だと

深くは行かなかった

まさか、そんな事が…

「やめろ!!木田にそんな話を聞かせるな!」

「うっせえな!今から俺に抱かれるビッチは黙ってるろ!!!」

おじさんは百瀬を思い切り、グーで殴った

俺は殴られた、百瀬を見てプチと切れた

「何をしてんだお前!!!」

俺はおじさんを殴り

おじさんが怯んだ隙に百瀬を連れてどこかに逃げた

「離してよ、木田!私の過去を知ってなんでお前が怒るんだよ」

「お前は!!!もつと自分を大切にしろ、お前はお前の道を歩けば良いだろう…お前のお母さんの真似しなくたって」

「っ…………お前に何がわかるんだよ、お前みたいにぬくぬくと温かい家庭があつて周りに優しくされた人間に唯一の家族の母親から見捨てられた私の気持ちかわかるのか!!誰も私を見てくれない!誰も私を怒ってくれない!!!」

「俺が見てやる!俺がお前を見てやる…だからあんな真似をする

な」

くく

それから百瀬は不良を辞めて

今に至る

「あの日から正斗は私の事を見てくれた」

「私には正斗がいるから大丈夫……これからも、なのに正斗には幼馴染みが居た……あんな地味な奴が正斗の幼馴染み？ふざけないで！私知らない正斗をあいつが知ってる？それが1番ムカついたわ……だから私はあいつを潰そうとしたの」

「……………ごめん百瀬」

「えっ？何を謝るのよ……私は正斗の大切な人を潰すって言ったのよ？なんで正斗が謝るのよ……ふざけないでよ!!」

「お前をそんな風にしたのは俺だ」

「もつと、気を使えたら良かったな……」

「やめてよ……謝るのは私の方だよ」

「私……………わた……………ごめんなさい、ごめん……………なさい」

俺は百瀬がここまで気持ち強く俺を想っていた

俺はそれに気付かず、ここまでなるまで気付いてやれなかった

ごめんな、百瀬……………しつかり気付いてやれなくて

ごめん

俺は優しく百瀬の頭を撫でた

「やめてよ……優しくしないで」

「おね……………がい……」

「……………ごめんな」

百瀬は大粒の涙を流し

俺の前で泣いた

今までの事

全てを償えるとは思ってはいないが
償える分は償うと本人が言った

そして

物語は終わりを迎えようとしている

野球少年と文学少女、恋の結末

「えっ？同じ日？」

「うん、ラブライブの地区大会も同じ日みたいで…」

大阪のホテルから自分のスマホでマルちゃんのスマホに電話をしている

「どうやら、俺の甲子園決勝とラブライブの地区大会が一緒の日らしく」

俺のは最悪見に行けないかもしれないらしい

「も、もし早く終わったらなんとかするから正斗くんは自分ののしっかり集中するぞら！」

「うん…マルちゃんもね、おやすみなさい」

俺は電話を切り

すぐにしゃがんで落ち込んだ

せつかくなら最初から最後まで見て欲しかった

まあ、マルちゃんはマルちゃんです大事な事があるからと自分で納得するしかないか…

マルちゃんが居ないのは残念だけど、明日は優勝したってマルちゃんをびつくりさせてやる！

俺はそう決意し

自分の部屋に戻り、ベッドで寝た

～甲子園決勝～

今日は決勝戦

今までの試合とは違い

観覧席にはたくさんの方が居る

やばい、これが決勝の雰囲気なのか

すげー緊張してきたな…

「おいおい、正斗…お前が緊張するなよ」

「大丈夫！いつも通りに頑張ろうぜ！」

「はは…そうだな」

俺は良い仲間を持ったな…

よし！頑張るか！！

試合は点の取り合いの接戦だ

向こうが取ったらこっちも取る

熱い試合だ

しかし、こっちのミスで

3点も許してしまった

そこから点数は進まず

9回裏、泣いても笑っても最後だ

点数はこっちが5点で向こうが8点

ウチの攻撃で一塁、二塁、三塁ともに似て

俺が打てばさよならホームランだ

大丈夫、出来る：俺なら出来る

俺はバットを持ち

バッターボックスに立つ

やばいなこんなに緊張するんだな：今までの中で一番緊張してる

やれる、俺なら出来る

しかし、俺は

上手く、振れず

ストライクを2回貫つてしまった

あと1回、あと1回だけしかない

もう……終わるのか……

「頑張れー！！！！」

「何をやってるぞら！！マルとの約束忘れたぞるか！！！！約束破ったらオラ

許さないからね！」

えっ!?マルちゃん：なんで客席に

ってよく見たら、鞠莉さんちのへりが飛んでる!?

小原家すげー：てか鞠莉さん居たんだ

はは：でもおかげでやる気が出てきたよ!!

こい!!

く決勝戦終了く

「へへ、勝ったよ」

「うん、カッコ良かったぞら」

甲子園決勝が終わり

俺達は見事、逆転勝利した

正直あんまり覚えては居ない

何が起こったのか放心状態だった

インタビューにも答えたがなんて答えたのか

覚えてはない

意識がはつきりしたのは

優勝を祝った食事の時だ

俺とマルちゃんは食事を抜けて

静かな場所にやってきた

「やつと、約束を果たせたよ…」

「うん…正斗くんならやってくれるって信じてた」

夜の大阪は内浦には無い

綺麗な景色が広がっていた

それを見ているマルちゃんの横顔が凄く綺麗だ…

凄く良い雰囲気だ

今なら告白出来るんじゃないか？

行け、正斗…そこで行けないと男じゃないぞ

「あ、あの!!」

マルちゃんと俺は同時に声を掛けた

「ご、ごめんずら…正斗くんからで良いよ」

「わ、わかった…」

「えっと…俺!!木田正斗は国木田花丸さんが大好きです!!だから俺と付き合ってください」

俺は深呼吸をしてから

大きな声を出して

告白した

マルちゃんがどんな表情をしているのか気になり
チラツと顔を見た

「……………へへ、夢じゃないよね?」

「オラ…正斗くんに告白されたんだよね?」

マルちゃんは涙を流し

自分の制服の袖で涙を拭いている

ゆつくりと俺は頷いた

「オラも……………国木田花丸も木田正斗くんが大好きです」

「よろしくお願ひします」

にっこりと笑顔になり

礼儀正しく、よろしくと頭を下げた

「えつと…これで彼氏、彼女なんだよね?」

「うん、マルが居るのに…浮気をしたら許さないぞよ?」

「わかってるよ…こんな可愛い彼女が居るのにしないよ」

俺はマルの頭を優しく撫でた

幸せそうな顔をする

マルちゃん

「あつ…正斗くんに今日のご褒美をあげるぞら」

「目を瞑ってしゃがんでほしいぞら」

「こ、こころかな…?」

マルちゃんがご褒美をあげると

目を瞑り、しゃがんでみた

何をくれるのだろう、ドキドキして待っていたら

柔らかい物が口に当たった

「へへ…目を開けていいよ?」

「……………ま、マルちゃん」

「まさか…」

「うん! オラのファーストキスぞら!」

自分でもわかるぐらいに真っ赤になった俺は
思わず、鼻血を出して

気絶してしまった

幸せだ…まさか、キスマで出来るとは

「ま、正斗くん!?起きるぞら!正斗くん起きてずらく!!」

これから嬉しい事

嫌な事がたくさんあるだろう

でも2人なら…マルちゃんとなら乗り越えられる気がする

これで木田正斗と国木田花丸の物語は終わり

これからは2人で紡ぐ恋の物語だ

幸せにするよ

マルちゃん

く完く